秋田県文化財調査報告書第445集

向　様　田　Ａ　遺　跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XX－

２００９・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

向様田（むかいさまだ）Ａ遺跡

－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XX－

２００９・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成18年度に北秋田市（旧森吉町）において実施した向様田Ａ遺跡の発掘調査成果についてまとめたものであります。調査の結果、多くの配石遺構が発見され、本遺跡が小又川流域における縄文時代晩期の中心的な祭祀遺跡であったことが明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、北秋田市、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成21年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本書は、秋田県北秋田市(旧森吉町)森吉字向様田家ノ下モ８外に所在する向様田Ａ遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果を収めたものである。

2　森吉山ダム建設事業に係る発掘調査は、平成12(2000)年度・平成13(2001)年度・平成18(2006)年度に秋田県教育委員会が実施し、平成12年度・平成13年度調査分については成果を『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－遺構篇』秋田県文化財調査報告書第346集(2003)、『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅻ－遺物篇』秋田県文化財調査報告書第370集(2004)として公表済みである。本書は、平成18年度調査分について報告する。尚、本書中では『第346集』を『遺構篇』、『第370集』を『遺物篇』と略称した。

3　遺跡の調査結果については、平成18年度に刊行した『秋田県埋蔵文化財センター年報』等においてその概要を公表してきたが、本書と相違のある場合、本書をもって訂正したものとする。

4　本書は、第５章を除き、第１章から第３章を馬場泰一が執筆し、他を宇田川浩一が執筆・編集した。第５章は、各節に執筆者・執筆機関を示した。

5　第１図は国土地理院発行1/50,000地形図「米内沢」・「大葛」を複製し、第２図は森吉山ダム工事事務所提供の1/1,000平面図をもとにそれぞれ作成した。

6　土層断面図の土色表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2001年度版)に準拠した。

7　発掘調査、整理作業においては一部の業務を下記の機関に委託した。なお、自然科学分析委託の内訳については、第５章第１節に記した。

　水準測量および方眼杭設置業務:株式会社東測エンジニアリング

　３Ｄレーザースキャナによる計測業務:株式会社アクト技術開発

　石器実測図・トレース図作成業務：特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり

　遺跡空中写真撮影業務：株式会社シン技術コンサル

8　平成17年度より「森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議」を設け、平成17年度２回、平成18年度３回、平成19年度２回、平成20年度１回実施した。検討会議の指導委員よりご指導・ご助言を賜っている。

　岡村道雄（委員長）　岡田康博（平成20年度新任）　高橋保雄（平成19年度退任）

　辻誠一郎　藤沼邦彦　山本暉久

9　発掘調査および整理にあたって、県内の教育委員会・諸機関のほか、以下の方々および機関からご指導・ご助言を賜った。

　千葉史　横山真　株式会社ラング

凡　例

1　本書に掲載した平面図の方位は、世界測地系平面直角座標第Ｘ系座標北である。原点（ＭＡ50）における座標北と磁北との偏角は、西に８°10′である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2　各遺構に付している略記号は以下のとおりである。

ＳＫＩ：竪穴状遺構　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＡ：柱列跡　　ＳＮ：焼土遺構
ＳＲ：土器埋設遺構　　ＳＱ：配石遺構　　ＳＫＦ：フラスコ状土坑　　ＳＫ：土坑
ＳＫＰ：柱穴

3　本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は、1/40を原則としたが、遺構の規模に応じて適宜1/100等を用いている。挿図にはそれぞれスケールを付した。

4　遺構番号は、その種別を問わず、プラン検出順に４桁の連番を付したが、精査の過程において遺構ではないと判断したものは欠番となっている。

5　土層番号は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構堆積土にはアラビア数字（１・２・３・・・）を用いた。注記には土壌層位学的記載法を用い、以下の項目を観察した。

色調→(色)　構造→(構)　土性→(性)　緻密度→(緻)　可塑性→(塑)　混入物→(混)
S：砂　　Si：シルト　　C：埴土　　L：壌土　　CL：埴壌土
SiL：シルト質壌土　　SiC：シルト質埴土　　SL：シルト質壌土
SC：砂質埴土　　SiCL：シルト質埴壌土　　SCL：砂質埴壌土

6　遺構実測図中の「●」は土器類、「▲」は石器類を示した。なお、遺物等の出土地点は平面分布図と遺構全体を透視した垂直分布図の２種類に示した。

7　遺物実測図の縮尺は、土器は１/２を、石器は１/３を原則とした。ただし、大形の土器・石器は大きさに応じて適宜異なる縮尺を用いた。挿図にはそれぞれスケールを付した。

8　挿図の遺物実測図には、器種を問わず遺構ごとに通し番号を付した。

9　挿図中に使用したパターンは以下の通りである。各挿図中にもそれぞれを示した。

焼土

柱痕跡

磨面

アスファルト

赤色顔料・赤彩

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次付図
付図

第１章　はじめに ……1
　第１節　調査に至る経過 ……1
　第２節　調査要項 ……2
第２章　遺跡の環境 ……4
　第１節　遺跡の位置と立地 ……4
　第２節　歴史的環境 ……5
第３章　発掘調査の概要 ……11
　第１節　遺跡の概観 ……11
　第２節　調査の方法 ……11
　　１　野外調査 ……11
　　２　室内整理 ……13
　第３節　調査の経過 ……13
第４章　調査の記録 ……15
　第１節　基本層序 ……15
　　１　平成12・13年度調査時の基本層序の変更点 ……15
　　２　統一層序 ……15
　第２節　検出遺構と出土遺物 ……30
　　（１）遺構と遺構内出土遺物 ……30
　　① 竪穴状遺構（ＳＫＩ）……31
　　② 掘立柱建物跡（ＳＢ）……31
　　③ 柱列跡（ＳＡ）……31
　　④ 土器埋設遺構（ＳＲ）……32
　　⑤ 配石遺構（ＳＱ）……32
　　⑥ フラスコ状土坑（ＳＫＦ）……36
　　⑦ 土坑（ＳＫ）……36
　　⑧ 柱穴（ＳＫＰ）……36
　　（２）遺構外出土遺物 ……37
第５章　自然科学的分析 ……148
　第１節　放射性炭素年代測定 ……148
　第２節　炭化材樹種同定 ……152
　第３節　岩石肉眼鑑定 ……155
第６章　まとめ ……162
報告書抄録 ……214

挿図目次

第１図　向様田Ａ遺跡と森吉山ダム工事区域の遺跡 ……２
第２図　向様田遺跡群全体図 …４
第３図　向様田Ａ遺跡グリッド設定図 ……12
第４図　向様田Ａ遺跡等高線図(配石遺構検出面) ……12
第５図　基本層序 ……16
第６図　遺構配置図(１)……17・18
第７図　遺構配置図(２)……19
第８図　遺構配置図(３)……20
第９図　遺構配置図(４)……21
第10図　遺構配置図(５)……22
第11図　遺構配置図(６)……23
第12図　遺構配置図(７)……24
第13図　遺構配置図(８)……25
第14図　遺構配置図(９)……26
第15図　遺構配置図(10)……27
第16図　遺構配置図(11)……28
第17図　遺構配置図(12)……29
第18図　SKI1075竪穴状遺構･SKP1054柱穴、レリーフ図、出土土器 ……54
第19図　SKI1075竪穴状遺構･SKP1054柱穴出土土器・石器……55
第20図　SKI1078竪穴状遺構 ……55
第21図　SKI1078竪穴状遺構遺物分布図 ……56
第22図　SKI1078竪穴状遺構レリーフ図、出土土器・石器 ……57
第23図　SKI1078竪穴状遺構出土石器 ……58
第24図　SB3071掘立柱建物跡 ……58
第25図　SB3071掘立柱建物跡出土土器 ……59
第26図　SA1029柱列跡 ……59
第27図　SA1038柱列跡･SQ1037･1039･1073配石遺構出土土器・石器 ……60
第28図　SA1038柱列跡･SQ1037･1039･1073配石遺構・SK1074土坑 …61・62
第29図　SQ1037・1039・1073配石遺構・SK1074土坑 ……61・62
第30図　SA1038柱列跡・SQ1037・1039・1073配石遺構・SK1074土坑レリーフ図 ……61・62
第31図　SA3030･3031柱列跡･SKP3078･3079・3080柱穴 ……63・64
第32図　SA3030柱列跡P1～P4 ……65・66
第33図　SA3031柱列跡P1～P7・SN1…67・68
第34図　SA3030･3031柱列跡･SKP3078･3079・3080柱穴レリーフ図 …69・70
第35図　SKP3078・3079・3080柱穴…71
第36図　SA3030柱列跡出土土器・石器 ……71
第37図　SA3030柱列跡P2出土石器…72
第38図　SA3031柱列跡P1出土土器・石器 ……72
第39図　SA3031柱列跡P1～P3･P5･P6･SN1出土土器・石器……73
第40図　SKP3079柱穴出土土器 …73
第41図　SR1067土器埋設遺構、出土土器 ……74
第42図　SR3081土器埋設遺構、出土土器 ……74
第43図　SQ1005配石遺構、レリーフ図 ……75
第44図　SQ1006配石遺構 ……76
第45図　SQ1006配石遺構レリーフ図 ……77

第46図　SQ1006配石遺構出土土器
……77
第47図　SQ1007・1008配石遺構・SKP
1032柱穴 ……78
第48図　SQ1007配石遺構・SKP1032
柱穴出土土器・石器 ……78
第49図　SQ1009配石遺構・SKP1026・
1079柱穴 ……79
第50図　SK1025土坑、SQ1009配石遺
構出土石器 ……80
第51図　SQ1007・1008・1009配石遺構・
SK1025土坑・SKP1026・1032・1079柱穴
レリーフ図 ……80
第52図　SQ1010配石遺構 ……81
第53図　SQ1010配石遺構レリーフ図
……82
第54図　SQ1010配石遺構出土土器…
……82
第55図　SQ1011配石遺構、レリーフ
図 ……83
第56図　SQ1012配石遺構、レリーフ
図 ……84
第57図　SQ1013・1031配石遺構、レ
リーフ図 ……85
第58図　SQ1013配石遺構出土土器…
……86
第59図　SQ1014配石遺構、レリーフ
図 ……86
第60図　SQ1014配石遺構出土土器・
石器 ……86
第61図　SQ1015・1023配石遺構・SKP
1040柱穴、レリーフ図……87
第62図　SQ1015配石遺構出土土器・
石器 ……88
第63図　SQ1016配石遺構 ……88
第64図　SQ1016配石遺構レリーフ図、
出土土器・石器 ……89
第65図　SQ1018配石遺構礫堆積順序
……90
第66図　SQ1018配石遺構 …91・92
第67図　SQ1017・1018配石遺構SB1・
SKP1058・1059柱穴 ……93・94
第68図　SQ1017・1018配石遺構・SKP
1058・1059柱穴レリーフ図 …95・96
第69図　SQ1018配石遺構出土土器・
石器 ……95・96
第70図　SQ1018配石遺構出土石器…
……97
第71図　SQ1018配石遺構出土石器…
……98
第72図　SQ1018配石遺構出土石器…
……99
第73図　SQ1018配石遺構SB1P1出土
土器・石器 ……100
第74図　SQ1018配石遺構SB1P2出土
土器・石器 ……100
第75図　SQ1019配石遺構 ……101
第76図　SQ1019配石遺構レリーフ図、
出土土器 ……101
第77図　SQ1020・1021配石遺構、レ
リーフ図 ……102
第78図　SQ1022配石遺構、レリーフ
図 ……102
第79図　SQ1024配石遺構 ……103
第80図　SQ1024配石遺構レリーフ図
……104
第81図　SQ1024配石遺構出土土器…
……104
第82図　SQ1024配石遺構出土石器…
……105
第83図　SQ1036配石遺構 ……106
第84図　SQ1036配石遺構・SK1049土
坑・SKP1053柱穴レリーフ図 …106
第85図　SK1049土坑・SKP1053柱穴、
SQ1036配石遺構出土石器 ……107
第86図　SQ1047配石遺構・SKP1060
柱穴、レリーフ図 ……108
第87図　SKP1060柱穴出土石器…108
第88図　SQ1065配石遺構、遺物分布
図、SQ1065・1066配石遺構レリーフ
図 ……109
第89図　SQ1066配石遺構、遺物分布
図 ……110
第90図　SQ1065配石遺構出土土器…
……110
第91図　SQ1065配石遺構出土土器・
石器 ……111
第92図　SQ1066配石遺構出土土器・
石器 ……112
第93図　SQ2007配石遺構・SKP2006
柱穴、レリーフ図 ……113
第94図　SQ2007配石遺構・SKP2006
柱穴出土土器・石器 ……113
第95図　SQ2009配石遺構、レリーフ
図、出土石器 ……114
第96図　SQ3003・3004・3005配石遺
構 ……114
第97図　SQ3003・3004・3005配石遺
構レリーフ図 ……115
第98図　SQ3023配石遺構・SKP3047
柱穴、レリーフ図、出土土器 …115
第99図　SQ3049配石遺構出土土器・
石器 ……116
第100図　SKP3053・3054・3060・30
61柱穴出土土器・石器 ……116
第101図　SQ3049配石遺構、SKP3053・
3054・3060・3061柱穴、レリーフ
図、遺物分布図 ……117・118
第102図　SQ3055配石遺構、レリーフ
図、出土石器 ……119
第103図　SQ43・44配石遺構 …120
第104図　SQ43・44配石遺構レリーフ
図、出土土器 ……121
第105図　SQ275配石遺構、レリーフ
図、出土土器 ……121
第106図　SKF1027フラスコ状土坑、
SK1050・1055土坑、SKP1045・1057
柱穴 ……122
第107図　SKP1045柱穴出土土器…123
第108図　SK2010土坑、出土土器……
……123
第109図　SK2012・3010・3015・3037
土坑 ……124
第110図　SKP1041柱穴 ……124
第111図　SKP1041柱穴出土土器…125
第112図　SKP1043柱穴、出土土器 …
……125
第113図　SKP1052・1061柱穴 …125
第114図　SKP1062・1063・1064柱穴、
SKP1064柱穴出土土器・石器 ……126
第115図　SKP1070・1071柱穴……126
第116図　SKP2001柱穴、出土土器 …
……127
第117図　SKP2002・2003柱穴、出土
土器 ……127
第118図　SKP2005柱穴、出土石器 …
……127
第119図　SKP2008柱穴 ……128
第120図　SKP2011柱穴、出土土器 …
……128
第121図　SKP3002柱穴、出土土器・
石器 ……128
第122図　SKP3008・3013・3018・3026
柱穴 ……129
第123図　SKP3018柱穴出土土器・石
器 ……129
第124図　SKP3028・3034・3035柱穴
……130
第125図　SKP3034柱穴出土土器・石
器 ……130
第126図　SKP3036・3038・3039柱穴、
SKP3038柱穴出土土器 ……131
第127図　SKP3040柱穴、出土土器 …
……131
第128図　SKP3040柱穴出土石器 ……
……132
第129図　SKP3041柱穴、出土土器 …
……132
第130図　SKP3041柱穴出土土器…133

第131図　SKP3042・3043・3044柱穴、SKP3042柱穴出土土器 ……134
第132図　SKP3044柱穴出土土器・石器 ……134
第133図　SKP3045柱穴、出土石器 ……135
第134図　SKP3046柱穴、出土土器 ……135
第135図　SKP3048・3051柱穴……135
第136図　SKP3048・3051柱穴出土土器 ……136
第137図　SKP3057・3058・3062・3069・3072柱穴、SKP3072柱穴出土石器 ……136
第138図　遺構外出土石器 ……137
第139図　遺構外出土石器 ……138
第140図　遺構外出土石器 ……139
第141図　暦年較正結果 ……151
第142図　出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真 ……154
第143図　配石遺構、偽配石および段丘礫層 ……158
第144図　各グリッドにおける礫種組成 ……159
第145図　配石遺構類型 ……163
第146図　SQ1018東部環状配石と等高線 ……163
第147図　SQ3049「西部環状配石」と等高線 ……163
第148図　配石遺構出土石棒・石刀……165

表目次

第１表　周辺遺跡一覧 ……３
第２表　発掘調査経過 ……14
第３表　縄文時代遺構一覧（１）…38
第４表　縄文時代遺構一覧（２）…39
第５表　縄文時代遺構一覧（３）…40
第６表　縄文時代遺構一覧（４）…41
第７表　縄文時代遺構一覧（５）…42
第８表　縄文時代遺構一覧（６）…43
第９表　縄文時代遺構一覧（７）…44
第10表　縄文時代遺構一覧（８）…45
第11表　縄文時代遺構一覧（９）…46
第12表　縄文時代遺構一覧(10) …47
第13表　縄文時代遺構一覧(11) …48
第14表　縄文時代遺構一覧(12) …49
第15表　縄文時代遺構一覧(13) …50
第16表　縄文時代遺構一覧(14) …51
第17表　縄文時代遺構一覧(15) …52
第18表　縄文時代遺構一覧(16) …53
第19表　縄文土器観察表（１）……140
第20表　縄文土器観察表（２）……141
第21表　縄文土器観察表（３）……142
第22表　縄文土器観察表（４）……143
第23表　縄文土器観察表（５）……144
第24表　石器観察表（１）……145
第25表　石器観察表（２）……146
第26表　石器観察表（３）……147
第27表　土製品・アスファルト塊観察表 ……147
第28表　測定試料及び処理（１）…148
第29表　測定試料及び処理（２）…149
第30表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果 ……149
第31表　向様田Ａ遺跡出土炭化材の樹種同定結果 ……153
第32表　配石遺構及び段丘礫の礫種組成 ……159
第33表　出土石器の石材鑑定結果（１） ……159
第34表　出土石器の石材鑑定結果（２） ……160
第35表　出土石器の器種別石材組成 ……161
第36表　向様田Ａ遺跡遺構総数…162

図版目次

図版１
１　SKI1075完掘（東→）
２　SKI1075・SKP1054断面（西→）
３　SKI1075P1精査（西→）
４　SKI1075P1断面（西→）
図版２
１　SKI1078検出（東→ SQ1014下部より）
２　SKI1078断面（西→）
３　SKI1078・SQ1014東西断面(南→)
４　SQ1014SK1完掘（北西→）
図版３
１　SKI1078完掘（北西→）
２　SKI1078P1断面（東→）
３　SKI1078P2断面（東→）
４　円盤状石製品出土状況（南→）
５　SQ1014精査（南東→）
図版４
１　SB3071完掘（北→）
２　SB3071P1完掘（東→）
３　SB3071P1断面（東→）
４　SB3071P2完掘（東→）
５　SB3071P2断面（東→）
図版５
１　SB3071P3完掘（東→）
２　SB3071P3断面（東→）
３　SB3071P4完掘（東→）
４　SB3071P4断面（東→）
５　SA1029完掘（西→）
６　SA1029P1完掘（北→）
７　SA1029P1断面（南→）
図版６
１　SA1029P2完掘（北→）
２　SA1029P2断面（北→）
３　SA1029P3完掘（北→）
４　SA1029P3断面（北→）
５　SA1029P4完掘（東→）
６　SA1029P4断面（東→）
７　SA1038P1完掘（東→）
８　SA1038P1断面（東→）
図版７
１　SA1038・SQ1037・1039・1073・SK1074完掘（東→）
２　SA1038P2遺物出土（東→）
３　SA1038P2完掘（北→）
４　SA1038P2柱痕跡（南→）
５　SA1038P3精査（東→）
図版８
１　SA1038P3完掘（南→）
２　SA1038P3断面（東→）
３　SQ1037精査（北→）
４　SQ1037断面（東→）
５　SQ1037完掘（東→）
６　SQ1073精査（東→）
７　SQ1073精査（東→）
８　SQ1073断面（東→）
図版９
１　SQ1073完掘（東→）
２　SK1074断面（西→）
３　SK1074完掘（東→）
４　SQ1039完掘（東→）
５　SA3030・3031精査（南→）
図版10
１　SA3030P1(左)・SA3031P6(右)完掘（北→）
２　SA3030P1完掘（北→）

3　SA3030P1断面（西→）
4　SA3030P1断面（北→）
5　SA3030P2(右)・3031P1(左)完掘（南→）
6　SA3030P2(左)・3031P1(右)断面（北→）
7　SA3030P2(左)・3031P1(右)断面（北→）
8　SA3030P2台石出土（南→）
図版11
1　SA3030P3断面（南→　平成13年調査SX348）
2　SA3030P4断面（南→　平成13年調査SX347）
3　SA3031P2完掘（北西→）
4　SA3031P2断面（北西→）
5　SA3031P3完掘（南→）
6　SA3031P3断面（東→）
7　SA3031P3遺物出土（東→）
8　SA3031P4完掘（南→）
図版12
1　SA3031P5完掘（西→）
2　SA3031P5断面（西→）
3　SA3031P6精査（南→）
4　SA3031P6断面（南→）
5　SA3031P6断面（東→）
6　SA3031P6柱痕跡（西→）
7　SA3031P7完掘（北→）
8　SA3031P7断面（南→）
図版13
1　SA3031SN1精査（東→）
2　SA3031SN1断面（南→）
3　SR1067精査（西→）
4　SR1067精査（西→）
図版14
1　SQ1005精査（東→）
2　SQ1005東西断面（南→）
3　SQ1005東西断面拡大（南→）
4　SQ1005南北断面（西→）
5　SQ1005完掘（西→）
図版15
1　SQ1006検出（南→）
2　SQ1006東西断面（南→）
3　SQ1006中心配石（南→）
4　SQ1006中心配石南北断面（東→）
図版16
1　SQ1007精査（東→）
2　SQ1007・SKP1032完掘（南→）
3　SQ1007南北断面（西→ SKP1032が新）
4　SQ1007南北断面（西→）
5　SQ1008精査（東→）
6　SQ1008南北断面（西→）
7　SQ1009精査（南→）
8　SQ1009南北断面（西→）
図版17
1　SQ1009下部・SKP1079断面（西→）
2　SQ1009完掘（南→）
3　SQ1010精査（南西→）
4　SQ1010南北断面（西→）
5　SQ1011精査（南→）
6　SQ1011東西断面拡大（南西→）
7　SQ1031精査（西→）
8　SQ1031断面（西→）
図版18
1　SQ1013精査（東→）
2　SQ1013完掘（北東→）
3　SQ1013南北断面（西→）
4　SQ1015精査（南→）
図版19
1　SQ1015遺物出土（東→）
2　SQ1015下部土坑断面（東→）
3　SQ1015下部土坑完掘（東→）
4　SQ1012精査（西→）
5　SQ1016精査（南東→）
図版20
1　SQ1016下部土坑断面（南西→）
2　SQ1016完掘（南西→）
3　SQ1017精査（西→）
4　SQ1017断面（西→）
5　SQ1018（南→　平成13年撮影）
図版21
1　SQ1018全景（南→）
2　クラスタ確認（南→）
3　クラスタ堆積状態（南西→）
4　炭化物分布面（南→）
5　炭化物分布面除去後中心配石完掘（南→）
図版22
1　SQ1018SB1P1断面（北→）
2　SQ1018SB1P1完掘（北→）
3　SQ1018SB1P2断面（西→）
4　SQ1018SB1P2完掘（南→）
5　SQ1018SB1P3断面（西→）
6　SQ1018SB1P3完掘（西→）
7　SQ1018SB1P4断面（西→）
8　SQ1018SB1P4完掘（南→）
図版23
1　SQ1018中心配石精査（西→）
2　SQ1018中心配石断面（東→）
3　SQ1018中心配石北側の土留石と炭化物出土面（南東→）
4　河床礫の覆瓦構造（南東→　SQ1018下）
5　SQ1018断面（東→　中心配石より南半）
6　SQ1018断面（東→　中心配石より北半）
7　SQ1018SB1P4上面石刀出土（北東→）
8　SQ1018SB1P4上面石刀出土（北→）
図版24
1　SQ1019・1047精査（北→）
2　SQ1019精査（北→）
3　SQ1019遺物出土（北→）
4　SQ1019断面（西→）
5　SQ1020・1021・1022精査（西→）
6　SQ1020精査（南→）
7　SQ1020断面（南→）
8　SQ1021精査（南→）
図版25
1　SQ1021断面（南→）
2　SQ1022精査（西→）
3　SQ1023精査（南→）
4　SQ1023断面（東→）
5　SQ1024精査（北→）
図版26
1　SQ1024断面（東→）
2　SQ1036精査（西→）
図版27
1　SQ1036断面（北→）
2　SQ1047精査（北→）
3　SQ1047断面（西→）
4　SQ1065遺物出土（西→）
5　SQ1065断面（西→）
6　SQ1066上面石皿出土（南西→）
7　SQ1066断面（北→）
図版28
1　SQ1065(右)・SQ1066(左)完掘（北→）
2　SQ2007精査（南→）
3　SQ2007石棒出土（西→）
4　SQ2007断面（東→）
5　SQ2007完掘（東→）
図版29
1　SQ2009精査（南→）
2　SQ2009断面（東→）
3　SQ3003精査（東→）
4　SQ3003断面（東→）
5　SQ3004精査（東→）
6　SQ3004精査（東→）
7　SQ3004断面（東→）
8　SQ3004完掘（東→）
図版30
1　SQ3005精査（東→）
2　SQ3005完掘（東→）
3　SQ3005断面（東→）
4　SQ3023精査（東→）
5　SQ3023完掘（東→）
6　SQ3055断面（西→）

7　SQ3055精査（西→）
8　SQ3055完掘（西→）
図版31
1　SQ3049精査（北→ 平成13年撮影）
2　SQ3049礫除去後断面（南→）
3　SKP3053断面（北東→）
4　SKP3053完掘（東→）
図版32
1　SKP3054断面（南→）
2　SKP3054礫出土状況（南→）
3　SKP3054完掘（南→）
4　SQ43(右)・44(左)精査（南→）
5　SQ43(右)・44(左)断面（南→）
6　SQ44下部土坑完掘（北西→）
7　SQ275精査（南→）
8　SQ275断面（西→）
図版33
1　SKF1027断面（東→）
2　SKF1027断面（東→）
3　SKF1027完掘（東→）
4　SK1025精査（南→）
5　SK1025立石検出（南→）
6　SK1025完掘（北→）
7　SK1049断面（南→）
8　SK1049完掘（東→）
図版34
1　SK1050断面（南→）
2　SK1050完掘（南→）
3　SK1055断面（西→）
4　SK1055完掘（東→）
5　SK2010断面（東→）
6　SK2010完掘（北→）
7　SK2012断面（北→）
8　SK2012完掘（北→）
図版35
1　SK3010断面（東→）
2　SK3010完掘（南→）
3　SK3015確認（東→）
4　SK3015完掘（西→）
5　SK3037完掘（北→）
6　SKP1032完掘（西→）
7　SKP1040断面（北→）
8　SKP1040完掘（北→）
図版36
1　SKP1041上部断面（南西→）
2　SKP1041断面（南西→）
3　SKP1041柱痕跡精査（南西→）
4　SKP1041完掘（南西→）
5　SKP1043断面（北→）
6　SKP1043完掘（北→）
7　SKP1045精査（西→）
8　SKP1045断面（西→）
図版37
1　SKP1045完掘（西→）
2　SKP1052断面（西→）
3　SKP1052完掘（西→）
4　SKP1053断面（東→）
5　SKP1054断面（西→）
6　SKP1054完掘（西→）
7　SKP1057精査（西→）
8　SKP1057完掘（南→）
図版38
1　SKP1058精査（西→）
2　SKP1058断面（西→）
3　SKP1059断面（西→）
4　SKP1059完掘（西→）
5　SKP1060断面（西→）
6　SKP1060完掘（西→）
7　SKP1061断面（西→）
8　SKP1061完掘（西→）
図版39
1　SKP1062断面（東→）
2　SKP1062完掘（南→）
3　SKP1063断面（北→）
4　SKP1063完掘（北→）
5　SKP1064断面（西→）
6　SKP1064完掘（西→）
7　SKP1070完掘（南→）
8　SKP1071断面（東→）
図版40
1　SKP1071断面（東→）
2　SKP1071完掘（東→）
3　SKP2001精査（西→）
4　SKP2001完掘（北西→）
5　SKP2002礫出土状況（西→）
6　SKP2002完掘（西→）
7　SKP2005断面（東→）
8　SKP2005完掘（東→）
図版41
1　SKP2006柱痕跡（南→）
2　SKP2008完掘（西→）
3　SKP3002断面（東→）
4　SKP3002完掘（南→）
5　SKP3008断面（西→）
6　SKP3008完掘（南西→）
7　SKP3013断面（西→）
8　SKP3013完掘（西→）
図版42
1　SKP3018断面（西→）
2　SKP3018完掘（東→）
3　SKP3026完掘（北→）
4　SKP3028完掘（北→）
5　SKP3034断面（東→）
6　SKP3034完掘（東→）
7　SKP3035断面（南→）
8　SKP3035完掘（南→）
図版43
1　SKP3036断面（北→）
2　SKP3036完掘（南→）
3　SKP3038完掘（西→）
4　SKP3038断面（西→）
5　SKP3039断面（東→）
6　SKP3039完掘（東→）
7　SKP3040断面（東→）
8　SKP3040完掘（東→）
図版44
1　SKP3041断面（西→）
2　SKP3041遺物出土（西→）
3　SKP3041完掘（西→）
4　SKP3042断面（南→）
5　SKP3042完掘（北→）
6　SKP3043完掘（北→）
7　SKP3044断面（東→）
8　SKP3044完掘（東→）
図版45
1　SKP3045断面（南→）
2　SKP3045完掘（南→）
3　SKP3046断面（北→）
4　SKP3046完掘（北西→）
5　SKP3047完掘（北西→）
6　SKP3048完掘（南東→）
7　SKP3051断面（西→）
8　SKP3051完掘（西→）
図版46
1　SKP3057断面（北→）
2　SKP3057完掘（北→）
3　SKP3058断面（南→）
4　SKP3058完掘（南→）
5　SKP3062完掘（北→）
6　SKP3069断面（東→）
7　石刀（SQ1018SB1P4）
8　有孔石製品（SQ1018）

付　図

付図１　向様田Ａ遺跡調査区全体図（１/２）
付図２　向様田Ａ遺跡調査区全体図（２/２）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

秋田・岩手の県境付近の中岳に源流をもち、秋田県北部を東から西へ流れる米代川は、31の支流を合わせながら日本海に注ぐ県下三大河川の一つである。この米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた。

昭和47年７月の集中豪雨により起きた大洪水は旧二ツ井町や能代市の市街地などを浸水させ、県北部に甚大な被害を及ぼした。

この大洪水を機に「米代川水系工事実施基本計画」が改訂され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダムが建設されることとなった。のちに森吉山ダムと改称されたこのダムは、洪水調節の他、既得取水の安定化・河川環境の保全、灌漑用水の供給、水道用水の供給、水力発電などの多目的ダムとして計画が整備された。

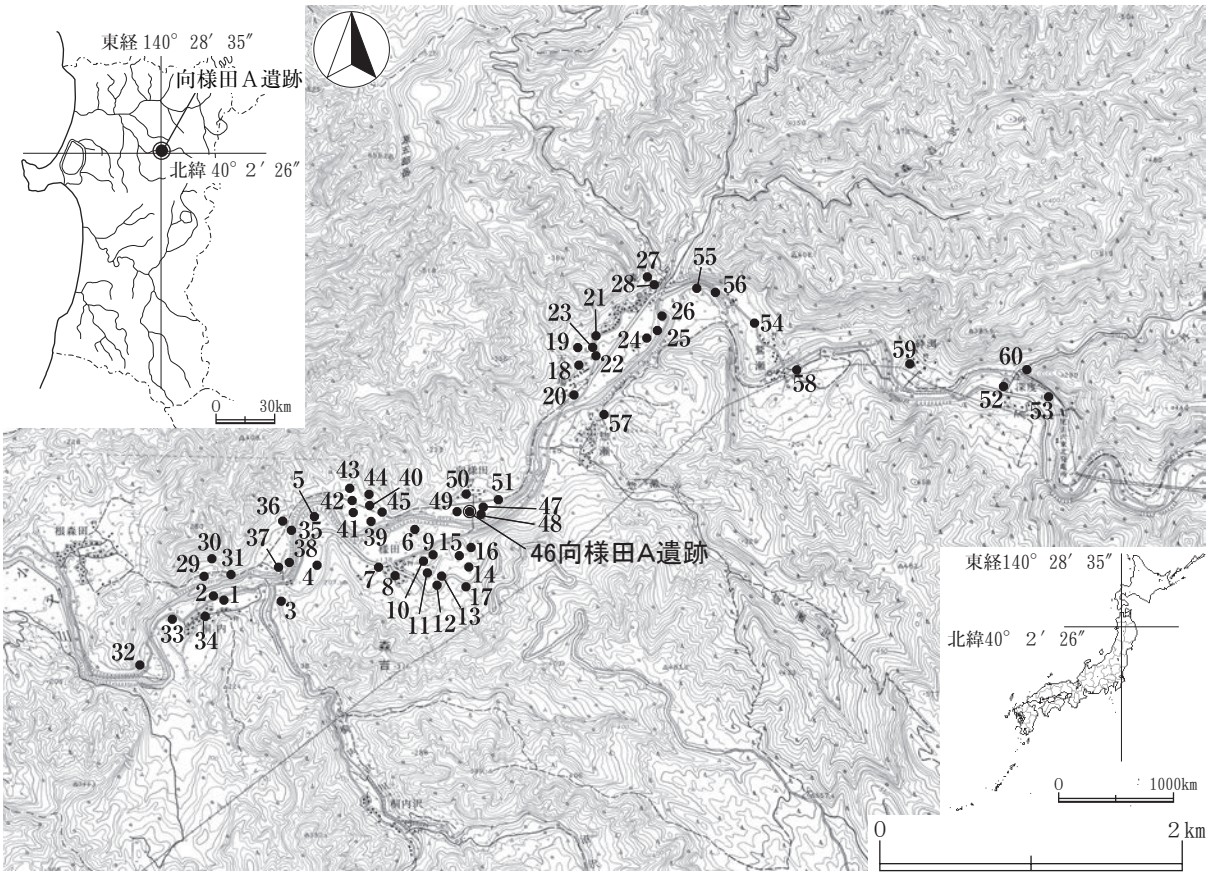
森吉山ダム建設に伴い、事業主体である建設省（現国土交通省）東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0㎢の遺跡分布調査を依頼した。この依頼に基づき、秋田県教育委員会は、遺跡分布調査を1992(平成４)・1993(平成５)年の２か年にわたって実地し、その結果、桐内遺跡等の６遺跡が開発区域に関わることを新たに確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は引き続いて事業区域内の確認調査を実施していくことを申し合わせた。この協議を承けて秋田県教育委員会では、1994(平成６)年より確認調査を実施し、1998(平成10)年までに60の遺跡を確認した(第１表)。

森吉山ダム建設事業に関わる発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事日程に合わせて発掘調査を実施してきている。これまで1997(平成９)年～2006(平成18)年の10年間で、深渡遺跡・砕渕遺跡・日廻岱Ｂ遺跡・森吉家ノ前Ａ遺跡・地蔵岱遺跡等の発掘調査を実施し、そのいくつかについては、調査を終了し報告書も既に刊行されている。

向様田Ａ遺跡の発掘調査は、過去２か年にわたって行われ、遺跡総面積7,600㎡のうち、平成12年度（2000年７月17日～10月19日）に3,600㎡を、平成13年度（2001年５月17日～10月19日）に4,000㎡の調査を実施した。その結果、調査した区域内にていずれも段丘上の自然礫を並べたり組み合わせたりした配石遺構が多数確認された。特に、東部には直径13ｍ程の環状配石遺構が、また、これより西へ約60ｍの位置で中心部に敷石状の配石を伴う遺構が見つかった。当時の調査では、両配石遺構の下部施設の有無を確認することなく、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の協議にてこれを数年間は保存し、一般に公開することとしてきた。遺跡総面積7,600㎡のうち、両配石遺構等が検出された3,000㎡の配石下部および礫層中の遺構群補足調査についてはダム建設工事の状況と合わせ、平成18年度（2006年５月15日～10月20日）に調査を実施した。本書は向様田Ａ遺跡の最終調査となった平成18年度に行われた発掘調査の報告書である。

第２節　調査要項

遺　　跡　　名　向様田Ａ遺跡（むかいさまだＡいせき）（略号２ＭＳＤ－Ａ）
所　　在　　地　秋田県北秋田市森吉字向様田家ノ下モ８外
調　査　期　間　2006(平成18)年５月15日～10月20日
調　査　目　的　森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調　査　面　積　3,000㎡
調 査 主 体 者　秋田県教育委員会
調 査 担 当 者　宇田川浩一（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
　　馬場　泰一（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
総 務 担 当 者　袴田　幸樹（秋田県埋蔵文化財センター主任）　※職名は調査年当時のもの
調査協力機関　国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所
　　北秋田市
　　北秋田市教育委員会



第１図　向様田Ａ遺跡と森吉山ダム工事区域の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡所在地(北秋田市)	主な時代	遺構・遺物	文献
1	桐内C	森吉字桐内家ノ上ミ岱11外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、石囲炉、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、トランシェ様石器	13
2	桐内D	森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、土器埋設焼土遺構、柱穴様ピット、溝跡	15
3	桐内沢	森吉字桐内沢関下タ103	縄文	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、フラスコ状土坑、竪穴状遺構、石器	18
4	日廻岱A	森吉字日廻岱65外	縄文・近世	縄文土器(前期～晩期)、土坑、焼土遺構、掘立柱建物跡(近世)、溝跡、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、陶磁器、銭貨、砥石	3・18
5	日廻岱B	森吉字日廻岱86外	縄文・近世	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、土器埋設炉、焼土遺構、土器埋設遺構、柱穴様ピット、土坑、掘立柱建物跡(近世)、石器、土製品、石製品、陶磁器	31
6	漆下	森吉字漆下2-1外	縄文・中世	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、配石遺構、焼土遺構、竪穴状遺構(中世)、掘立柱建物跡(縄文・近世)、捨て場、フラスコ状土坑、土器埋設炉、石積み階段状道路、陥し穴、柱列、柱穴様ピット、土坑、石組炉(中世)、溝跡、土製品、石器、石製品	19・25・37
7	上ハ岱A	森吉字上ハ岱102外	縄文・弥生	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑(縄文・弥生)、土坑、石器	16
8	上ハ岱B	森吉字上ハ岱70外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ土坑、捨て場	16
9	二重鳥A	森吉字二重鳥31-1外	旧石器・縄文	旧石器、縄文土器(前期・後期・晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器	35
10	二重鳥B	森吉字二重鳥11外	旧石器・縄文	旧石器、縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、焼土遺構、土坑、石器	28
11	二重鳥C	森吉字二重鳥93外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設炉、土器埋設遺構、焼土遺構、配石遺構、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、土偶	26・28
12	二重鳥D	森吉字二重鳥39	縄文	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、石器、土製品、石製品	20
13	二重鳥E	森吉字二重鳥65外	縄文・弥生	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、石器、土製品、石製品、弥生土器	20
14	二重鳥F	森吉字二重鳥124-1外	縄文・弥生	縄文土器(前期・後期)、土坑(縄文・弥生)、フラスコ状土坑(弥生)、石器、弥生土器	20
15	二重鳥G	森吉字二重鳥80外	縄文・近世	縄文土器(早期・中期・晩期)、竪穴住居跡、掘立柱建物跡(縄文・近世)、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器、銭貨、煙管	26
16	二重鳥H	森吉字二重鳥6外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、石器	28
17	水上ミ	森吉字水上ミ42-1外	縄文・弥生	縄文土器(中期・晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器、弥生土器	16
18	天津場A	森吉字天津場15-3	縄文・古代	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(古代)、土坑、石器	2
19	天津場B	森吉字天津場16-1	縄文	縄文土器(後期)、竪穴住居跡、石囲炉、土坑、石器	2
20	天津場C	森吉字天津場87-1外	縄文	縄文土器(中期・後期)、土坑、石器	5
21	ネネム沢A	森吉字ネネム沢26外	旧石器・縄文・古代	旧石器、縄文土器(後期)、土器(古代)、竪穴住居跡、焼土遺構、土坑	2
22	ネネム沢B	森吉字ネネム沢17外	縄文	縄文土器(後期)、焼土遺構、石器	2
23	ネネム沢C	森吉字ネネム沢6-1	縄文	縄文土器(晩期)、土坑	2
24	森吉家ノ前A	森吉字森吉家ノ前50外	縄文・古代・中世	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、竪穴状遺構、土坑、溝跡(中世)、掘立柱建物跡(中世)、柱穴様ピット、石器、土師器、須恵器、陶磁器(中世)、銭貨(中世)、羽口	34・40
25	森吉家ノ前B	森吉字森吉家ノ前138外	縄文・中世	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(中世)、土坑、焼土遺構、配石遺構、石器、石冠、木器、陶器、鉄器	5
26	森吉家ノ前C	森吉字森吉家ノ前101-1外	縄文	中世・近世	30
27	森吉A	森吉字森吉95	縄文	縄文土器(後期)、土坑、石組、火葬墓、石器	2
28	森吉B	森吉字森吉69	縄文	縄文土器(後期)、石器	35
29	上悪戸A	根森田字上悪戸4-1外	縄文	縄文土器(中期・後期)、土坑、焼土跡、炭化物、石器	8
30	上悪戸B	根森田字上悪戸8-12	弥生	弥生土器、土坑、石器	12
31	上悪戸C	根森田字上悪戸7外	縄文	縄文土器(前期・後期・晩期)、土坑、石器	12
32	上悪戸D	根森田字上悪戸34-33外	縄文	縄文土器(中期～晩期)、土坑、石囲炉、埋甕、石器、土製品	6
33	桐内A	森吉字桐内前田5-1外	縄文	縄文土器(早期・中期～晩期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、フラスコ状土坑、土坑、溝跡、配石遺構、窯跡、柱穴様ピット、石器、土製品、石製品、弥生土器、陶磁器	17
34	桐内B	森吉字家ノ下16外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、土器埋設遺構、石器	6
35	姫ヶ岱A	根森田字姫ヶ岱8外	縄文	縄文土器(前期～後期)、土坑、配石遺構、石器	12
36	姫ヶ岱B	根森田字姫ヶ岱14-10外	縄文	縄文土器(前期・中期)、土坑、柱穴様ピット、石器	12
37	姫ヶ岱C	根森田字姫ヶ岱12-2外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、石囲炉、焼土遺構、土製品、石器、トランシェ様石器	10・12
38	姫ヶ岱D	根森田字姫ヶ岱12-31外	縄文	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、配石遺構、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、石器	14
39	橋場岱A	森吉字橋場岱48外	縄文	縄文土器(中期・後期)、竪穴住居跡、土坑、石器	4・38
40	橋場岱B	森吉字橋場岱69外	縄文	縄文土器(後期・晩期)、土坑、溝跡、石器	4・41
41	橋場岱C	森吉字橋場岱42外	縄文	縄文土器(後期・晩期)、配石遺構、土坑、石器	4・38
42	橋場岱D	森吉字橋場岱110-1	縄文	縄文土器(晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、土坑、溝跡、石器	36
43	橋場岱E	森吉字橋場岱109	縄文	縄文土器、竪穴住居跡、竪穴状遺構、配石遺構、土坑、石器	36
44	橋場岱F	森吉字橋場岱101外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、石器	36
45	橋場岱G	森吉字橋場岱6-1外	縄文	縄文土器(後期)、石器	4・38
46	向様田A	森吉字向様田家ノ下モ8外	縄文	縄文土器(晩期)、土坑、土坑墓、配石墓、環状配石遺構、配石遺構、土器埋設遺構、焼土遺構、柱穴様ピット、竪穴住居跡、捨て場、石器、土製品、石製品	21・27・37
47	向様田B	森吉字向様田家ノ下モ67-1外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、土坑、配石遺構、石器、土製品	22
48	向様田C	森吉字向様田家ノ下モ76外	縄文	縄文土器(後期・晩期)、土坑、配石遺構、石器、土製品、石製品	22
49	向様田D	森吉字向様田家ノ下モ14-1外	縄文	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、配石遺構、焼土遺構、土器埋設遺構、柱穴様ピット、土坑、盛土、石器、土製品、石製品	29・40
50	向様田E	森吉字橋場岱6-1外	縄文・古代・中世	縄文土器(早期・前期・後期・晩期)、竪穴住居跡(縄文・古代)、掘立柱建物跡(中世)、土坑(縄文・古代)、土器埋設遺構、焼土遺構、溝跡(古代)、炉(中世)、柱列(中世)、石器、土師器、須恵器、鉄製品	22
51	向様田F	森吉字向様田家ノ下モ57外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、柱穴様ピット、溝跡、石器	23
52	深渡	森吉字深渡家ノ前104-1外	縄文	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡(古代以降)、フラスコ状土坑、土坑、焼土遺構、配石遺構、溝状遺構、柱穴様ピット、石棺様組石、石器	5・9・32
53	深渡A	森吉字深渡29外	縄文・近世	縄文土器(中期～晩期)、竪穴住居跡、土坑、石器、トランシェ様石器、掘立柱建物跡(近世)、陶磁器(近世)	33
54	鷲ノ瀬	森吉字鷲ノ瀬80外	縄文	縄文土器(後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、フラスコ状土坑、貝風呂、石器	7・11
55	地蔵岱	森吉字地蔵岱74外	縄文・古代	縄文土器(前期～後期)、竪穴住居跡(縄文・古代)、土器埋設遺構、土坑、焼土遺構、溝跡、捨て場、掘立柱建物跡、製鉄関連遺構、炭窯、石器、土製品、石製品、土師器、須恵器、羽口、鉄滓	5・39
56	地蔵岱A	森吉字地蔵岱124外	縄文	縄文土器(中期・後期)、焼土遺構、土坑	36
57	惣瀬	森吉字惣瀬86外	縄文・古代	縄文土器(後期)、竪穴住居跡(古代)、土坑、石器	7
58	栩岱	森吉字栩岱74外	縄文	縄文土器(後期・晩期)	1
59	砕渕	森吉字砕渕124外	縄文	縄文土器(中期・後期)、竪穴住居跡、土器埋設遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、土製品(縄文・近世)、石器、石製品、陶器(近世)	3・24
60	丹瀬口	森吉字丹瀬2-1外	縄文	縄文土器(後期)	1

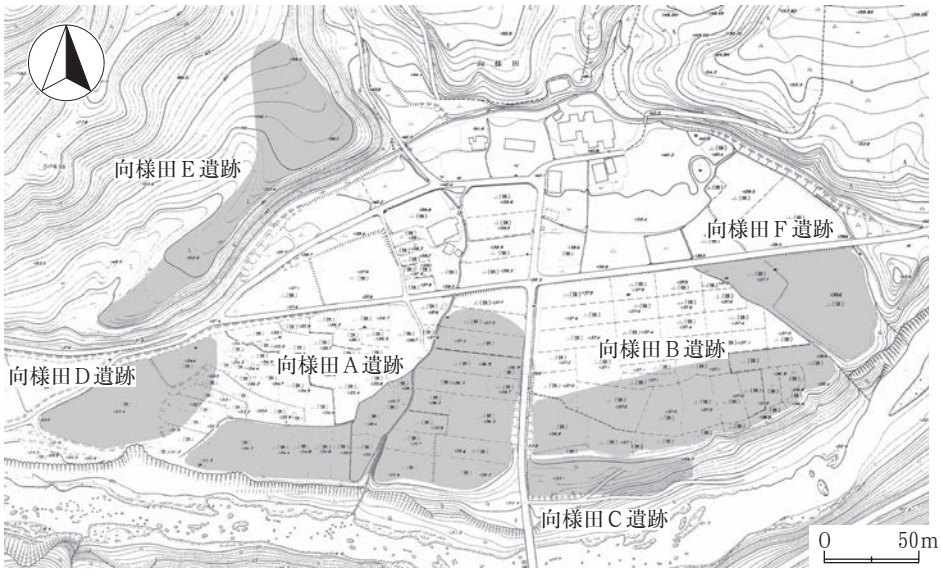
※文献の番号は２章末の「第１表文献」と対応する。

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

向様田Ａ遺跡は、秋田県北秋田市森吉（旧北秋田郡森吉町）字向様田に所在している。この向様田地区には向様田Ａ遺跡の他、向様田Ｂ～Ｆ遺跡の計６遺跡が所在する。遺跡のある北秋田市森吉地区は秋田県の内陸北部に位置し、南東部には森吉山(標高1,454m)がある。遺跡群の立地する向様田地区は、森吉山系に源を発する小又川の右岸に位置し、森吉山ダム完成時には湛水区域となる。地理的には、北緯40° 2′ 26″、東経140° 28′ 35″に位置し、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の東南東約６kmに所在する。

向様田Ａ遺跡は、小又川の右岸河成段丘上に位置する。南側は、小又川に向かい比高差14～16mの段丘崖となっている。これは源五郎岳山地が南に張り出した山裾につながる段丘面にあたる。向様田遺跡群６遺跡は、低位(向様田Ｃ)・中位(向様田Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｆ)・高位(向様田Ｅ)の３面に分かれて立地する（第２図)。標高は、向様田Ａ遺跡が134～136m前後で、南東の川側が最も高く、北、西の方向に非常に緩やかに傾斜する。今回の調査区では135.3mが最高値である。当遺跡の西側には沢状の低地を挟んで向様田Ｄ遺跡があり、標高は約134mである。東側では道路を挟んで向様田Ｂ・Ｃ遺跡が隣接し、向様田Ｂ遺跡は同じ中位段丘面で標高約137mである。向様田Ｃ遺跡は一段下がって低位段丘面にあり、標高約132mである。向様田Ｂ遺跡の東にある向様田Ｆ遺跡は標高約138m、向様田Ｄ遺跡の北東の高位段丘面には向様田Ｅ遺跡が位置し、標高は約150～159mである。



第２図　向様田遺跡群全体図

遺跡が所在する北秋田市は、平成17年３月に森吉町、鷹巣町、合川町、阿仁町の４町の合併により誕生した。秋田県の内陸北部に位置し、東は鹿角市・仙北市、北は大館市、西は北秋田郡上小阿仁村・能代市、南は秋田市・仙北市と接する。市域面積は約1,200㎢で、市北部を西流する米代川と、市内を南北に貫流し米代川に合流する阿仁川の流域とからなる。市南端には標高1,454ｍのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山が位置し、北半域の米代川流域には、鷹巣盆地が広がる。

本遺跡の北縁を流れる小又川は、北秋田市・仙北市・鹿角市の境界をなす三ツ又森(標高1,119ｍ)および柴倉岳(標高1,178ｍ)を源流とする。太平湖(森吉ダム)を経て、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、本遺跡の下流約７㎞の阿仁前田地内で阿仁川と合流する。阿仁川はさらに約20㎞下流で米代川と合流する米代川の一次支流で、小又川は米代川の二次支流である。

小又川沿いには集落や耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では更新世段丘を含め最大６段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500ｍ、狭いところでは約20ｍである。南北両側より山が迫ってきており、概ね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進み、大規模なほ場整備事業が行われたことによって、平坦地の地形は改変されている。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた集落はすべて移転している。

この地域の地質は、東北地方日本海側グリーンタフ地域に属する。小又川の北側に位置する小繋森や竜ヶ森の山腹などで粘板岩・ホルンフェルス等の先第三紀に属する古期堆積岩が見られるが、他は新第三紀中新世の火山岩類が基盤岩となる。小又川の南側では、第四紀の柴倉火山噴出物や森吉火山噴出物が被覆する地域も見られる。また、小又川流域の低地には完新世の沖積層が堆積する。

本遺跡が立地する段丘面は、小又川に沿って長さ450ｍ、幅160ｍ前後である。基盤は砂礫～シルト層である。明瞭なテフラ起源の堆積物はなく、完新世段丘面の可能性が強いものと推定できる[註1]。この層(後述する基本層序Ⅻ層)からは、縄文時代の礫石器と石核(第140図27～29)が出土している。今後、当該資料の評価も勘案した上で、高位面を含めた最低位段丘の形成過程とその時期比定の検討を行う必要があろう[註2]。

第２節　歴史的環境

森吉山ダム建設事業においては、ダム建設用地および貯水池用地を中心とした、小又川中流域のおよそ1,200,000㎡が直接的に事業に係わる地域であった。当該地域は、平成３年刊行の『秋田県遺跡地図(県北版)』においては鷲ノ瀬遺跡など２か所、小又川流域全体でも10数か所程度の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が掲載されていたにすぎなかった[註3]。平成４年以降、秋田県教育委員会が実施した森吉山ダム建設事業に係る分布調査および確認調査により、現在、当該地域内には計60遺跡が確認されている[註4]。以下では、発掘調査が行われた森吉山ダム建設事業地内の遺跡をとりあげ、住居跡の分布状況を中心に本遺跡周辺の歴史的変遷を概観する。なお、文中(　)内の数字は、第１図および第１表と対応する。

旧石器時代の遺跡には、小又川中流域左岸の標高150ｍ～154ｍの緩斜面上に立地する二重鳥Ａ遺跡

(第１図９、以下第１図は省略)がある。調査では、２か所の石器集中出土地点が確認され、ナイフ形石器、掻器、石刃、剥片など、あわせて458点の旧石器が出土した。主体をなす石器群は大きくは東山系石器群に位置づけられている(註5)。また、二重鳥Ｂ遺跡(10)やネネム沢Ａ遺跡(21)や地蔵岱遺跡(55)でも若干量であるが、旧石器時代の遺物が出土している。現時点では、小又川流域における旧石器時代資料は限定されており、当該時代の様相については不明瞭な部分が大きい。

縄文時代においては、現段階では早期になり遺跡が確認される。早期～前期初頭の遺跡として、日廻岱Ｂ遺跡(５)、森吉Ｂ遺跡(28)、桐内Ａ遺跡(33)、姫ケ岱Ｃ遺跡(37)、向様田Ｂ遺跡(47)、地蔵岱遺跡(55)などがある。地蔵岱遺跡で竪穴住居跡１軒、森吉Ｂ遺跡で土坑１基がそれぞれ確認されているほかは、遺物が断片的に出土しているのみである。向様田Ｂ遺跡、地蔵岱遺跡は小又川の最低位段丘面上に立地しており、遅くとも早期～前期初頭までには最低位段丘面は離水し、居住も含めた一定の活動対象となったものと考えられる。現在の調査結果からは、当該期には大規模な集落は未だ成立せず、小規模集団が断続的に小又川流域で活動したものと想定できよう。

前期中葉～後葉になると複数の遺跡で竪穴住居跡が確認される。前期中葉では深渡遺跡(52)、地蔵岱遺跡(55)で各６軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で３軒、後葉には日廻岱Ｂ遺跡(５)で２軒、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)で１軒の竪穴住居跡が確認されている。この頃から一定規模の集落が出現し、徐々に定住および集住化が進んでいったと考えられる。

中期になると遺跡数が増加し、それに伴い竪穴住居跡の検出例も増加する。前葉では、桐内沢遺跡(３)で１軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で２軒、漆下遺跡(６)で４軒の竪穴住居跡が検出されている。前期中葉～後葉と同様に小規模な集落が点在していたと考えられる。中葉になると、桐内Ｃ遺跡(１)、二重鳥Ｂ遺跡(10)、二重鳥Ｄ遺跡(12)、水上ミ遺跡(17)、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、桐内Ａ遺跡(33)でそれぞれ１軒、二重鳥Ｅ遺跡(13)、二重鳥Ｇ遺跡(15)で２軒、漆下遺跡(６)で３軒、二重鳥Ｃ遺跡(11)で14軒が検出されおり、前葉に比べ住居数が増加する傾向を認めることができる。後葉には、上ハ岱Ｂ遺跡(８)、二重鳥Ｄ遺跡(12)、二重鳥Ｅ遺跡(13)、橋場岱Ｆ遺跡(44)、向様田Ａ遺跡(46)、向様田Ｄ遺跡(49)、深渡Ａ遺跡(53)、砕渕遺跡(59)でそれぞれ１軒、桐内Ｄ遺跡(２)、二重鳥Ｂ遺跡(10)、水上ミ遺跡(17)、深渡遺跡(52)で各２軒、漆下遺跡(６)、二重鳥Ｃ遺跡(11)、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)で各３軒、上ハ岱Ａ遺跡(７)で４軒、姫ケ岱Ｃ遺跡(37)で５軒、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)で６軒、二重鳥Ａ遺跡(９)で７軒の竪穴住居跡が検出されており、中葉よりもさらに住居数が増加する。当該期の住居跡検出遺跡数は19遺跡を数えるが、１遺跡における検出数は１～７軒と少数である。住居は段丘の縁辺に散発的に立地する傾向があり、環状集落のような定型的な集落構造を示す遺跡は認め難い。

中期後葉の住居跡は複式炉を伴う竪穴住居が特徴的であるが、このうち、深渡遺跡および隣接する深渡Ａ遺跡では、竪穴壁際に礫が巡る住居跡が各１軒存在する。住居廃絶時に複式炉を組み替え、さらに壁際に礫を巡らして竪穴を埋め戻している。埋め戻し時には壁際の礫の上半は地表面に露出しており、環状もしくは弧状の配石遺構と評価することができる。住居に伴う炉と係わる屋内祭祀が住居外の配石遺構と係わる屋外祭祀へと変質する過渡期の様相を示している可能性があろう。

後期初頭には、桐内Ｃ遺跡(１)、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)、深渡遺跡(52)でそれぞれ１軒、姫ヶ岱Ｃ遺跡(37)で２軒、漆下遺跡(６)で５軒が検出されており、これらの遺跡の竪穴住居跡分布状況は基本的に前時期と共通する。これに対し、日廻岱Ｂ遺跡(５)では、長軸約60ｍの空閑地の周囲に50軒前後の住

居が環状もしくは「い」の字形に立地する。中央の空閑地には土坑等の規則的かつ集中的な分布は認められないが、中央広場の周囲に住居が集中的・累積的に巡る環状集落の一形態と評価できる。日廻岱Ｂ遺跡で環状集落が形成された時期には、約600ｍ上流の漆下遺跡で上述した数軒の竪穴住居が営まれるとともに、多数の土坑墓や配石遺構が造営され始める可能性がある。この時期には、集団の集住化と呼応するように、墓域や祭祀域を居住域とは別地点に設けるものと想定される。以後、墓域や祭祀域として関連する諸施設を特定の地点に集約することが遺跡構造の一つの特徴となる可能性がある。

後期前葉～中葉になると、竪穴住居跡の検出例は激減する。前葉では二重鳥Ｃ遺跡(11)で１軒、桐内Ｃ遺跡(１)で３軒、中葉では漆下遺跡(６)で４軒、向様田Ｄ遺跡(49)で１軒が検出されているのみである。後葉には再び竪穴住居跡の検出数が増え、二重鳥Ｄ遺跡(12)で12軒、二重鳥Ｈ遺跡(16)で９軒、二重鳥Ａ遺跡(９)、二重鳥Ｅ遺跡(13)で各６軒、桐内Ａ遺跡(33)で５軒、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)で１軒が検出されている。これに対し、漆下遺跡では、後期前葉から中葉前後の多数の配石遺構のほか、70棟以上の掘立柱建物跡が分布するとともに、大量の遺物が出土している。竪穴住居跡の分布状況からは、後期前葉から後葉には小規模な集落が点在し、初頭における日廻岱Ｂ遺跡のような大規模な環状集落は継続しない。その一方で、漆下遺跡では、竪穴住居数は限られるものの、大量の遺物が出土しており、多数の掘立柱建物跡が居住施設であった可能性も想定し得る。ただし、併存する竪穴住居との関係など検討すべき問題も多く、該期の集落の様相に実態は必ずしも明確ではない。

後期末から晩期になると、竪穴住居跡の検出例は減少する。後期末～晩期前葉では、日廻岱Ｂ遺跡(５)、橋場岱Ｆ遺跡(44)、深渡遺跡(52)で各１軒、姫ケ岱Ｄ遺跡(38)、向様田Ｆ遺跡(51)で各２軒、二重鳥Ｅ遺跡(13)で３軒確認されている。晩期後葉では二重鳥Ａ遺跡(９)で３軒、水上ミ遺跡(17)で２軒、上ハ岱Ｂ遺跡(８)、二重鳥Ｅ遺跡(13)で１軒検出されているのみである。一方、向様田Ａ遺跡(46)や向様田Ｄ遺跡(49)などから成る向様田遺跡群では晩期前葉から中葉にかけての大規模な配石遺構や盛土あるいは捨て場が形成され、多様かつ活発な祭祀活動等が行われたものと推定される。この時期に掘立柱形式の平地住居が一般化した痕跡は認め難く、現状の竪穴住居跡の確認状況が当時実態をほぼ反映するものと考えられる。これらのことから、当該時期においては、小又川流域では１軒もしくは２軒程度の竪穴住居居住集団が小又川流域内に通常はそれぞれ分散居住し、特定時期に向様田遺跡群に集まり、盛んに祭祀活動等を行ったものと想定される。

弥生時代では住居は未確認であり、集落の実態は不明である。二重鳥Ｆ遺跡(14)でフラスコ状土坑４基、土坑１基、二重鳥Ａ遺跡(９)、桐内Ａ遺跡(33)、日廻岱Ｂ遺跡(５)では弥生時代前期の遺物が、橋場岱Ｂ遺跡(40)では天王山式が検出されている。これらの遺跡は縄文時代の遺跡と重複しており、その立地は縄文時代と顕著な違いを認めることはできない。水稲耕作の有無をはじめ、当該時代の生業活動等の詳細は不明瞭である。

古墳時代もしくはそれに併行する時代に属する遺跡は、小又川流域では確認できず、以前に存在した集落等は断絶したものと考えられる。小又川流域に再び集落が形成されるのは、古代以降である。

古代では、向様田Ｅ遺跡(50)で竪穴住居跡３軒が検出されており、小規模な防御性集落が形成されていた可能性が報告されている。天津場Ａ遺跡(18)、ネネム沢Ａ遺跡(21)、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、惣瀬遺跡(57)で古代の遺構・遺物が確認されている。古代後半には、地蔵岱遺跡(55)に大規模な集落

が出現する。多数の竪穴住居や製鉄関連遺構が分布するほか、総延長200ｍ以上に及ぶ環壕を巡らすなど、小又川流域における拠点的な中心集落であったととらえることができる。また橋場岱Ｂ遺跡(40)では十和田ａ火山灰降下直後の谷筋にスギの板材・丸太材などを集積した遺構が検出された。

中世では、地蔵岱遺跡(55)、森吉家ノ前Ａ遺跡(24)、森吉家ノ前Ｂ遺跡(25)、森吉家ノ前Ｃ遺跡(26)で集落が営まれている。地蔵岱遺跡は、古代後半から中世まで基本的に継続して営まれたと考えられる。多数の建物跡や火葬墓、荒型を含む多量の木製品が出土した水場遺構などが分布するほか、中世後半には幅２ｍの大溝で集落を区画するなど、引き続き拠点的な中心集落であったと考えられる。一方、地蔵岱遺跡の対岸に位置する森吉家ノ前Ａ遺跡でも多くの掘立柱建物跡が確認され、大規模な集落が営まれている。ここでも集落を区画すると考えられる堀状の大溝跡も検出されており、両遺跡の推定継続年代を勘案すると、地蔵岱遺跡から対岸の森吉家ノ前Ａ遺跡へ当時の中心集落が移動した可能性も想定される。

近世の遺跡では、日廻岱Ｂ遺跡（５）で掘立柱建物跡７棟、地蔵岱遺跡(55)、日廻岱Ａ遺跡（４）で掘立柱建物跡各２棟、森吉Ｂ遺跡(28)、地蔵岱Ａ遺跡(56)で掘立柱建物跡各１棟がそれぞれ検出されている。菅江真澄による紀行文をはじめとした当時の史料との対比を通じて、近世の集落の実態を検討し得る資料となっている。(註6)

註１　本段丘面は、小又川の最低位の段丘面であること、段丘面上に明瞭なテフラ起源の堆積物が現時点では認められないことから、豊島正幸による米代川水系の小猿部川段丘区分における中畑段丘に大きくは対比されるか、あるいはより低位に相当する段丘面であると想定される。
豊島正幸　「米代川支流、小猿部川における最終氷期後半以降の河成段丘形成」　『地理学評論』60巻１号　1987(昭和62)年

註２　本節では、下記の文献を参考にした。
川村公一　『子孫に残す歴史の記録　森吉路　過去から未来へ』　モリトピア選書２　建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所　1993(平成５)年

註３　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

註４　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第259集　1995(平成７)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

註５　二重烏Ａ遺跡での旧石器出土層準は、十和田八戸火砕流起源の泥流堆積層と推定されているが、旧石器出土状況は、十和田八戸火砕流の下位が神子柴長者久保系文化の層準とする所見とは整合的ではない。この問題については、文献39の第２章註５を参照のこと。

註６　本節は下記の第１表文献32・40の「第２章　第２節　遺跡の歴史的環境」をもとに、平成17～19年度に刊行された発掘調査報告書等により一部加筆し作成した。また、第１図は同文献21の第１図を、第１表は同文献34の第１表をもとに作成した。

第１表文献

1　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第251集　1994(平成６)年

2　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996(平成８)年

3　森吉町教育委員会　『平成７年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1996(平成８)年

4　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

5　森吉町教育委員会　『平成８年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1997(平成９)年

6　森吉町教育委員会　『上悪戸Ｄ遺跡発掘調査報告書　～比内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』　1997(平成９)年

7　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

8　森吉町教育委員会　『平成９年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　1998(平成10)年

9　秋田県教育委員会　『深渡遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』　秋田県文化財調査報告書第286集　1999(平成11)年

10　秋田県教育委員会　『姫ケ岱Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調査報告書第287集　1999(平成11)年

11　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

12　森吉町教育委員会　『平成10年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　上悪戸Ｂ・Ｃ遺跡　姫ヶ岱Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　1999(平成11)年

13　秋田県教育委員会　『桐内Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第299集　2000(平成12)年

14　秋田県教育委員会　『姫ケ岱Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第300集　2000(平成12)年

15　秋田県教育委員会　『桐内Ｂ遺跡・桐内Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』　秋田県文化財調査報告書第318集　2001(平成13)年

16　森吉町教育委員会　『平成10・11年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査　上ハ岱Ａ遺跡・上ハ岱Ｂ遺跡・水上ミ遺跡』　2001(平成13)年

17　秋田県教育委員会　『桐内Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財調査報告書第334集　2002(平成14)年

18　秋田県教育委員会　『桐内沢遺跡・日廻岱Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』　秋田県文化財調査報告書第335集　2002(平成14)年

19　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　20　平成13年度』　2002(平成14)年

20　森吉町教育委員会　『平成12年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　2002(平成14)年

21　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－　遺構篇』　秋田県文化財調査報告書第346集　2003(平成15)年

22　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡・向様田Ｃ遺跡・向様田Ｅ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第347集　2003(平成15)年

23　秋田県教育委員会　『向様田Ｆ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』　秋田県文化財調査報告書第348集　2003(平成15)年

24　秋田県教育委員会　『砕渕遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ－』　秋田県文化財調査報告書第349集　2003(平成15)年

25　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　21　平成14年度』　2003(平成15)年

26　森吉町教育委員会　『平成13年度　埋蔵文化財発掘調査報告書　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～　二重鳥Ｃ・Ｇ遺跡』　2003(平成15)年

27　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－　遺物篇』秋田県文化財調査報告書第370集　2004(平成16)年

28　森吉町教育委員会　『二重鳥Ｂ・Ｃ・Ｈ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　2004(平成16)年

29　秋田県教育委員会　『向様田Ｄ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ－』　秋田県文化財調査報告書第392集　2005(平成17)年

30　秋田県教育委員会　『森吉家ノ前Ｃ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅣ－』秋田県文化財調査報告書第393集　2005(平成17)年

31　秋田県教育委員会　『日廻岱Ｂ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－』　秋田県文化財調査報告書第394集　2005(平成17)年

32　秋田県教育委員会　『深渡遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅥ－』　秋田県文化財調査報告書第407集　2006(平成18)年

33　秋田県教育委員会　『深渡Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅦ－』　秋田県文化財調査報告書第408集　2006(平成18)年

34　秋田県教育委員会　『森吉家ノ前Ａ遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅧ－』秋田県文化財調査報告書第409集　2006(平成18)年

35　北秋田市教育委員会　『森吉Ｂ遺跡　二重鳥Ａ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第２集　2006(平成18)年

36　北秋田市教育委員会　『地蔵岱Ａ遺跡　橋場岱Ｄ・Ｅ・Ｆ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第３集　2006(平成18)年

37　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　25　平成18年度』　2007(平成19)年

38　北秋田市教育委員会　『橋場岱Ａ・Ｃ・Ｇ遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第５集　2007(平成19)年　146ｐ

39　秋田県教育委員会　『地蔵岱遺跡　－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅨ－』　秋田県文化財調査報告書第434集　2008(平成20)年

40　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報　26　平成19年度』　2008(平成20)年

41　北秋田市教育委員会　『橋場岱Ｂ遺跡　～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』　北秋田市埋蔵文化財調査報告書第７集　2008(平成20)年　134ｐ

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

向様田Ａ遺跡を含む向様田遺跡群は、森吉山の北麓を西に流れる小又川の右岸段丘上に立地する。1994(平成６)年度に秋田県教育委員会が対象面積63,934㎡の確認調査を実施し、そのうちの7,600㎡が向様田Ａ遺跡の範囲とされた。

向様田Ａ遺跡は東西に細長く形成された河成段丘上にあり、東西約170ｍ、南北最大約95ｍに及ぶ。調査区内の標高は135～136ｍと比較的平坦であるが、段丘縁辺部である南側がやや高く、北西に向かい緩やかに傾斜している。南側は小又川に向かい比高差約15ｍ前後の段丘崖となっている。

向様田Ａ遺跡はその中央を南北に走る用水路によって大きく東西に分断され、それぞれ調査年度が異なる。既調査は平成12年度に遺跡東半の3,600㎡を、平成13年度には西半4,000㎡の調査を行ったが、今回は平成13年度に調査を行った4,000㎡のうちの3,000㎡を補足調査として行った。

調査区内を便宜上３つに分けた。用水路に隣接し、環状配石遺構と中心配石ＳＱ77が検出された区域（ＭＤ～ＭＭ）を東部、遺跡の西端域で「西部環状配石」中心部敷石が確認された区域（ＮＡ～ＮＧ）を西部、東部と西部に挟まれる区域（ＭＮ～ＭＴ）を中央部とした。

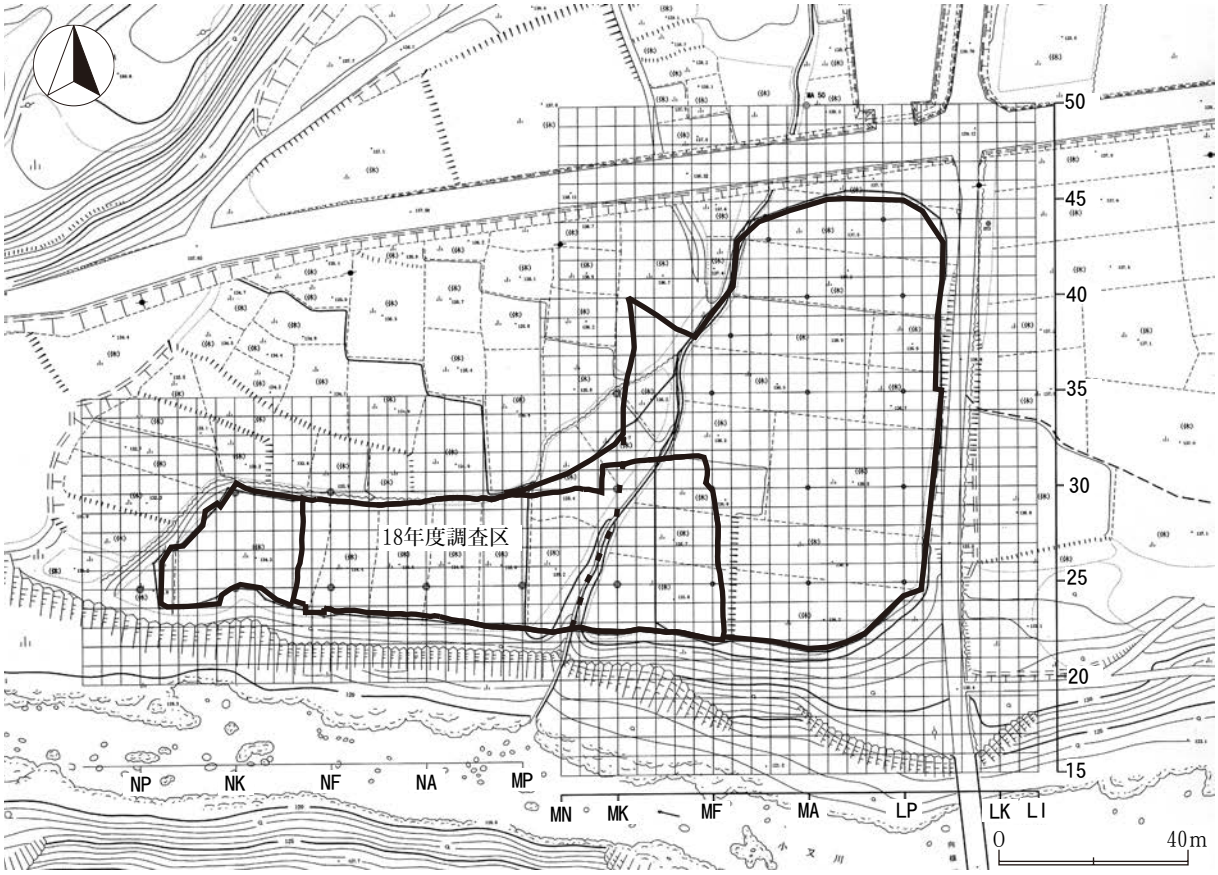
第２節　調査の方法

１　野外調査

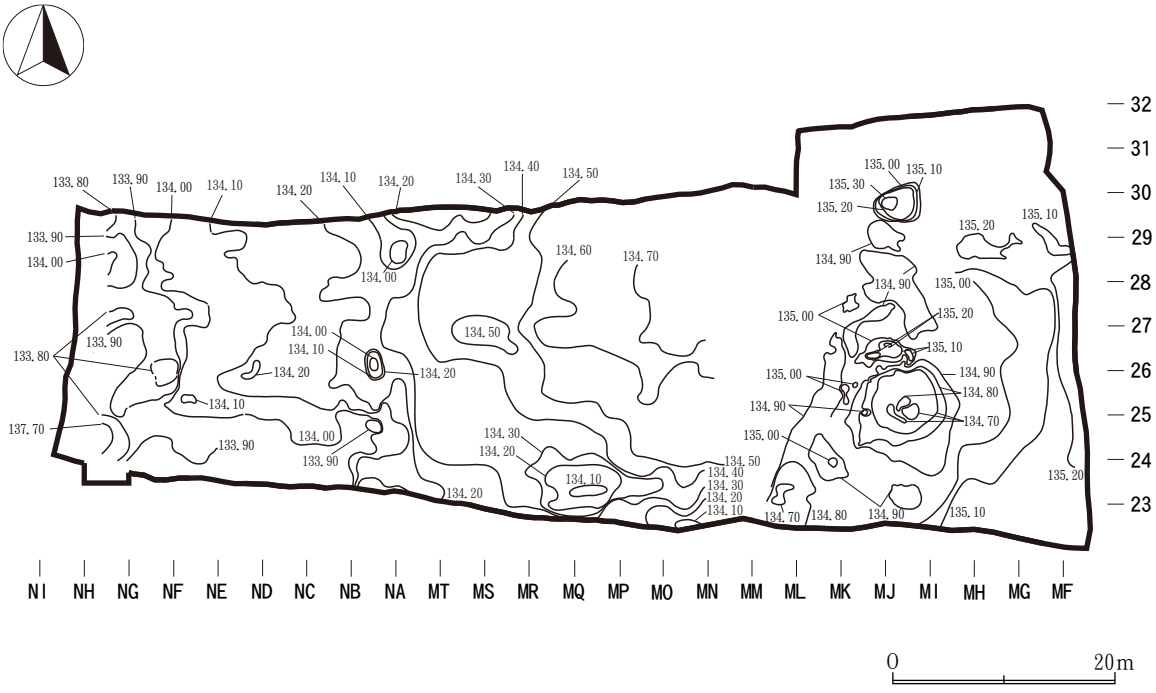
調査はグリッド法で行った。グリッドは平成12年度・平成13年度に設定したものを踏襲した（第３図)。向様田Ａ遺跡のみではなく、向様田遺跡群の対象面積全域にグリッドを設定するため、向様田Ａ遺跡の北、向様田地区中央付近に任意の原点（国家座標第Ｘ系、Ｘ＝4316.000、Ｙ＝-30145.000、Ｚ＝138.882）を設定し、この原点を通る南北方向に南北基準線Ｘ軸を設定している。その地点でこの基準線と直交する線を東西基準線Ｙ軸とし、これらＸ・Ｙ両軸に４ｍ×４ｍの方眼メッシュを割り付けた。その原点をＭＡ50とし、東西方向には、Ｙ軸上西に４ｍ進む毎にＭＢ・ＭＣ・ＭＤ・・・・と昇順に、東に４ｍ進む毎にＬＴ・ＬＳ・ＬＲ・・・・と降順に各々Ａ～Ｔまでの２文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Ｘ軸を北に４ｍ進む毎に51・52・53・・・・、南に４ｍ進む毎に49・48・47・・・・と増減する２桁のアラビア数字を付してある。しかし方眼杭打設から年月が経過していることから、失われたものや位置が移動したものも多数あり、今回はそれらの杭を再設置した。その際、国家座標第Ｘ系から世界測地系へと座標値を換算し直し、ＭＦ25がＸ＝4523.389、Ｙ＝-30463.138、Ｚ＝135.575となった。

各グリッドは、南東隅の杭を通るＸ軸とＹ軸を組み合わせ、ＭＡ50・ＭＢ51・・のように呼称した。

遺構は種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けることとした。遺構の検出区域が分かりやすいように東部は1000番台、中央は2000番台、そして西部には3000番台を付した。番号登録の



第３図　向様田Ａ遺跡グリッド設定図



第４図　向様田Ａ遺跡等高線図（配石遺構検出面）

後、遺構認定から除外したものは、これを欠番としている。原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２または４分割法による精査を行った。土層注記は、土壌層位学的記載法による。

遺構外遺物は、原則的にグリッド単位で取り上げ、グリッド名、出土層位、種別、年月日を記録した。遺構内およびその周辺出土の遺物についてはトータル・ステーションによる機械測量を行った。記録した項目は、１.遺物番号、２.出土グリッド、３.出土層位、４.種別、５.Ｘ座標、６.Ｙ座標、７.Ｚ座標（標高）、８.取り上げ年月日である。

平面図および断面図は、原則として縮尺1/20での作図を基本としたが、土器埋設遺構等は細部状況を表すために適宜縮尺1/10の図も作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、基本的にはグリッド杭を基準とする簡易遣り方測量によったが、調査範囲や等高線図（第4図）はトータル・ステーションによる測量を行い、パソコン上での処理を経た上で図面とした。また、遺構配置図や礫の検出・配石状況図は３Ｄレーザースキャナによる機械測量を行った。断面図には土色・土性・緻密度・可塑性・混入物等を注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。

写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、規模の大きな遺構・遺跡の部分的な全景撮影の際にはローリングタワーを使用した。発掘終了の際には全景撮影のためにラジコンヘリコプターによる空撮を行った。35㎜カメラにモノクロ、カラーリバーサルフィルムを装着して撮影した。

２　室内整理

各遺構については、現場で作成した平面図・断面図及びトータル・ステーションで測量しパソコンによって出力した図を第１原図とした。これらを基に平面図と断面図の整合をはかった図を第２原図とした。作図された第２原図をスキャニングし、Adobe社「PhotoshopCS３」・Adobe社「IllustratorCS３」を使用し、トレースおよびレイアウトまでの作業を行った。また、３Ｄレーザースキャナで取得した３次元データに面をつけ陰影処理をしてレリーフ図とした。

遺物については、洗浄・注記の後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に現寸で実測図を作成した。出土遺物のうち石器132点については、平成19年５月～９月に特定営利活動法人歴史・環境・まちづくりに委託した。その他の遺物は実測後、遺構同様のデジタル処理を行い、トレース及びレイアウトまでの作業を行った。また、土器片は拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業の後、デジタルカメラによる写真撮影を行った。

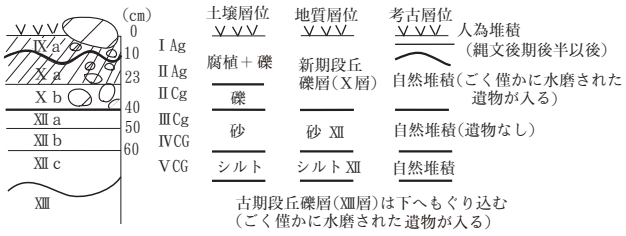
第３節　調査の経過

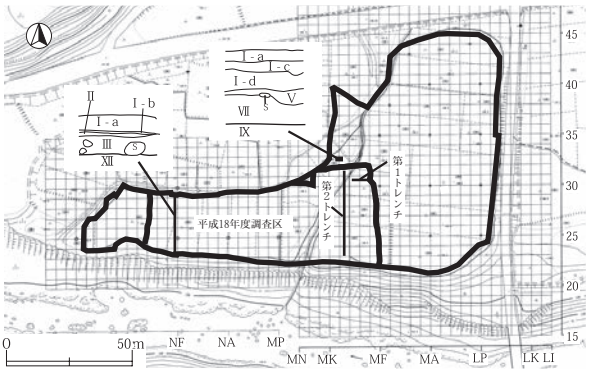
発掘調査は、平成18年５月15日から10月20日まで実施した。調査着手に先立ち、調査区全域の現状や礫の配石状況を３Ｄレーザースキャナにて計測する作業を開始した。その後の調査手順としては東部から西部へ向かって、各調査区は南から北へ向かって進めた。

以下、調査経過の概要は第２表に示す。

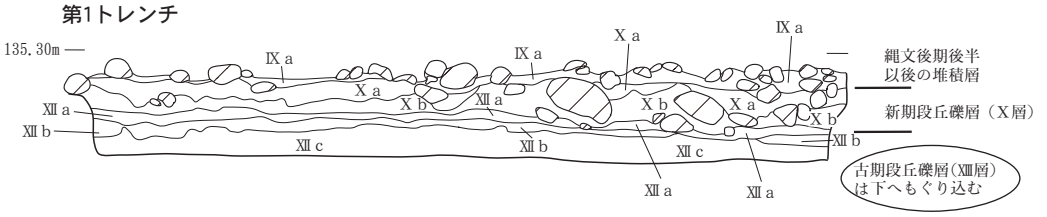
第２表　発掘調査経過

	作業状況		作業状況
５月 ８～ 12日	グリッド杭打設開始。	７月 31日 ～ ８月 ４日	東区東半分を完掘。 SQ1018中心配石の断ち割り準備。 西区へ移動し、3000番台の精査に着手。 2003年度調査のSX347・348に連続するSA3030・3031の下部に直径１ｍを超える土坑もしくは大形柱穴を確認。土坑内部中層より大洞BC～C1式の破片出土。
５月 15～ 19日	調査開始。機材搬入と事務所・プレハブ内機器類の設営。 ３Ｄスキャンに備えた配石露出作業と遺構精査開始。	８月 ７～ 11日	SQ1018中心配石の断ち割り開始。 配石を形成する礫には通し番号をふり移築に備えた。 SQ2007、SK2010・SKP2011・SK2012を完掘し中央区精査完了。 西区3000番台の精査継続。 東区中心配石北側の土器と石皿の集中区SQ1065下部に土坑を確認。
５月 22～ 26日	アクト技術開発による３Ｄスキャン開始。 東区に一輪車用の通路を構築。	８月 21～ 25日	SQ1065精査開始。隣接してSQ1066検出。 SQ1019はSQ1018・SQ1065より新しく、SQ1018はSQ1066より新しいことが判明。 SKP1054から磨製石斧出土。 西区ではNA23～NF23までの礫を全て除去し、下部遺構の確認を実施するも遺物が疎らに出土、目立った遺構は確認されない。
５月 29日 ～ ６月 ２日	東区の掘り下げ開始。 MK29に東西方向のトレンチ１を、MH22～30に南北方向のトレンチ２を設定し実測。 東区と中央区境界に南北方向のトレンチ３を設定し掘り下げ。	８月 28～ ９月 １日	SQ1065とSQ1066の新旧が確定。SQ1065から石鏃出土。 （新）SQ1019・1047→SQ1018→SQ1066→SQ1065（古） SQ1037、SA1038P2などML23を中心として分布する５基の柱穴を完掘。 SA1038P2の柱痕跡上部から晩期組成深鉢の大破片出土。
６月 ５～ ９日	トレンチ３の断面図作成。 調査区内の礫分布を１ｍメッシュでデジタルカメラにて撮影。 東部環状配石の等高線図作成開始。 SQ43・44・1008・1010・1011に南北ベルトを設定し断ち割るが、掘り込みは見つからない。	９月 ４～ ８日	SQ1066完掘。SQ1065の残り半分の掘り下げ。 SK1049完掘。 西区はNF列を除く上面の礫を撤去し、下部遺構の精査を開始。 西区中央配石SQ3049の下部調査開始。2基の土坑を確認。6～8日、ﾊﾟﾘﾉ・ｻｰｳﾞｪｲ石岡氏、石材調査。
６月 12～ 16日	SQ43・44・1005・1006・1010の断面図作成。 SQ43・44・1005完掘。 東区と中央区境界の土手を掘り始める。 東部環状配石等高線図完成。 東部環状配石と等高線は非常によく合致する。	９月 11～ 15日	東区は中央配石の半分とSQ1018の炭化物出土面を残し終了。 SQ1065・1066の周辺をだめ押し。 西区はNF列を除く上面の礫を撤去し、下部遺構の精査を継続。 西区中央配石SQ3049下の柱穴は４基となった。
６月 19～ 23日	東部環状配石SQ1018を断ち割り、SQ1024を貫く大トレンチを掘り始めた。石皿や磨石の礫石器や小土器片出土。 SQ1007・1009・1016・1023の石組み下部に土坑確認。SQ1016・1023より十腰内4～5式粗製土器片出土。	９月 18～ 22日	西区上面の礫すべてを取り除いた。 西区中央配石SQ3049の下部柱穴４基SKP3053・3054・3060・3061を調査。 他の柱穴も西区東側から面的に精査。 SQ3049から小形磨製石斧出土。 実測図のﾁｪｯｸを開始。
６月 26～ 30日	SQ1018・1024を断ち割る大トレンチがほぼ掘り終る。 SQ1018の北東１ｍに柱穴SK1030を、SQ1009の北側に立石が埋め込まれたSK1025を検出。 SQ1036には大形の扁平礫が5～6個立て並べられているがそのうちの中央2個が石皿であることを確認。	９月 25～ 29日	西区中央配石SQ3049および下部柱穴SKP3053・3054・3060・3061を完掘。 SQ3049西側の大形柱穴SA3030・3031・3031P6の調査。
７月 ３～ ７日	降雨による東区水没のため排水作業。東区調査を中断し中央区の遺構確認作業に移る。 以前の調査で検出されていたSQ275をガレ場上面で再発見。埋め土には大洞C1式が混じる。 ガレ場上面に組まれたSQ2007の西脇より石棒出土。	10月 ２～ ６日	調査区完掘の等高線図作成。 SA3030・3031・3031P6の南側に対応する柱穴を探査。 西区北西隅に１間×１間の掘立柱建物跡検出。柱間は2.5m。 東区中心配石の残り半分と炭化物分布面を掘り下げた。 来週末の見学会に向け見学ルートの整備。5日、シン技術コンサル空中写真撮影。
７月 10～ 14日	中央区にて検出の遺構の実測。 東区から南西隅に立石をもつ土坑SQ1037を検出。 SQ1010・1011を完掘。 SQ76は自然現象と判断。遺構認定を外す。 13日、指導委員による調査指導。14日、平成18年度第１回森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議（於漆下遺跡発掘調査事務所）。	10月 ９～ 14日	西区大形柱穴SA3030・3031・3031P2・3031P3・3031P6の調査継続。 東区中心配石の構築面をさらに掘り下げ、自然礫層を完全に露出。 SQ1018SB1P4より石刀基部出土。 以前SQ1018から出土の石刀先端部と接合する。 見学会に向けて見学ルートの整備。14日、北秋田市縄文回廊遺跡合同見学会。
７月 17～ 22日	遺跡見学会の準備。22日、第1回見学会。 連日の大雨で調査区水没。排水作業。 SQ1018外帯の掘り下げ開始。 SQ1015北側に隣接するSKP1040を検出。 SKI1078からｱｽﾌｧﾙﾄ付着土器の破片、SQ1024からｱｽﾌｧﾙﾄ塊が出土。	10月 16～ 20日	西区大形柱穴群がつくる皿状地形にトレンチを入れ、最後のだめ押し。 西区大形柱穴がつくる弧の開放部分にSA3031P4・3031P5を検出。SA3031P5より大洞C1式土器片出土。 調査区全域よりグリッド杭や単管パイプなどを回収。 撤収作業と引き渡しに向けての掃除。 向様田A遺跡の調査終了。
７月 24～ 28日	SQ1007～1009、1020～1022、SK1025など東区東側の配石遺構を完掘。 SQ1007南側の巨礫下より土坑SK1050検出、精査開始。 SQ1018の掘り下げ一段落、断面図作成。 SQ1019の下から石皿と土器の集中区が見つかる。		

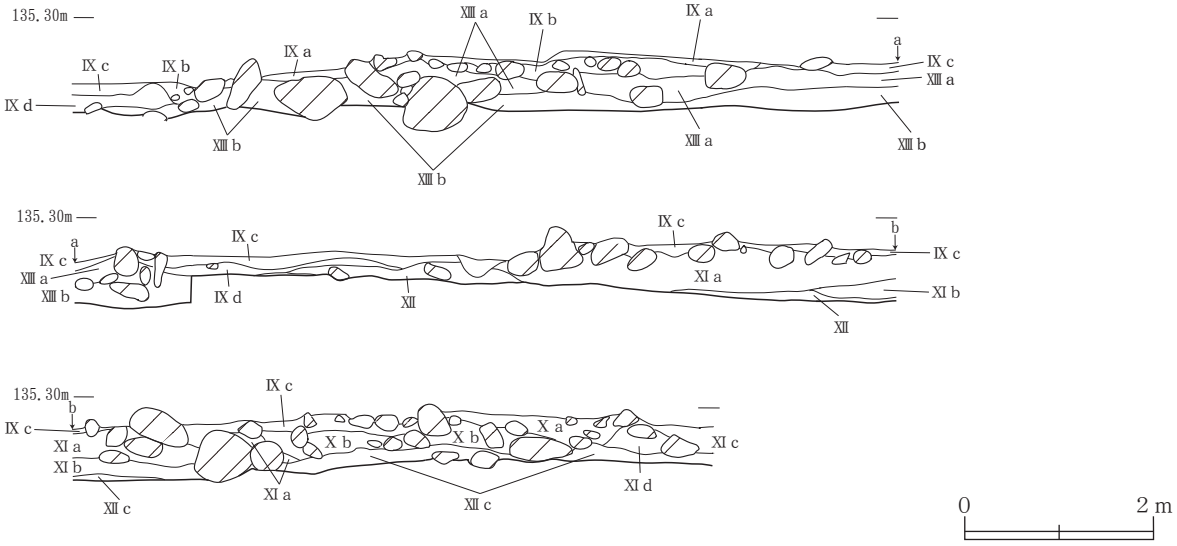




第1トレンチ



第2トレンチ



Ⅸa （色)10YR2/2 (構)亜角塊状～団粒状 (性)L (緻)+ (塑)±～+ (混)礫φ10～700㎜+++ 遺物少量混
Ⅸb （色)10YR4/1～10YR3/2 7.5YR4/1 (構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)SC～SCLと礫 (緻)+ 1層より+ (塑)+
(混)礫φ10～700㎜+++ 遺物少量混 (備)疑似グライ斑
Ⅸc （色)10YR2/2 (構)亜角塊状～団粒状 (性)L (緻)+ (塑)±～+ (混)礫φ100～200㎜+ (備)礫層から離れた下部砂層が土壌化
Ⅸd （色)2.5Y3/2 (構)亜角塊状φ5㎜ (性)SL (緻)+～++ (塑)- (備)グライ化
Ⅹa （色)10YR3/2～10YR3/3 (構)亜角塊状φ3～10㎜ (性)SLと礫 (緻)± (塑)± (混)礫φ100～500㎜+++ φ10～50㎜+++
(備)疑似グライ斑
Ⅹb （色)10YR3/1～10YR3/2 7.5YR3/1～3/2 (構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)SL～Sと礫 4層よりS+ (緻)+～++ (塑)-
(混)礫φ5～700㎜+++ φ10㎜小豆大～ソラ豆大中心 (備)グライ化
ⅪⅠa （色)10YR3/1～10YR3/2 7.5YR3/1～3/2 (構)亜角塊状φ5㎜ (性)Sと礫 (緻)++ (塑)-
(混)礫φ5～700㎜+++ φ10㎜小豆大からソラ豆大中心 (備)グライ化
ⅪⅠb （色)10YR3/4～10YR4/3 2.5Y3/3～2.5Y4/3 (構)亜角塊状φ5㎜ (性)Sと礫 (緻)++～+++ (塑)- (混)礫φ10㎜礫+
ⅪⅠc （色)10YR3/1～10YR3/2 7.5YR3/1～3/2 (構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)SL～Sと礫 4層よりS+ (緻)+～++ (塑)-
ⅪⅠd （色)10YR4/3～10YR4/4 2.5Y4/2～2.5Y4/3 (構)亜角塊状φ5㎜ (性)Sと礫 (緻)++～+++ (塑)- (混)礫φ5～10㎜+ 小豆大の礫目立つ
ⅫⅠa （色)2.5Y4/2 (構)角塊状～亜角塊状φ7～10㎜ (性)S (緻)++ (塑)- (備)疑似グライ斑 3層より砂の粒径が小さく均質化
ⅫⅠb （色)2.5Y4/2 5Y5/2 (構)角塊状～亜角塊状φ7～10㎜ (性)S (緻)+ (塑)- (備)グライ化 4層より砂の粒径が小さく均質化
ⅫⅠc （色)10YR5/3～10YR4/3 2.5Y4/3 (構)亜角塊状φ5㎜ (性)S (緻)++ (塑)- (混)礫φ100～300㎜
ⅩⅢa （色)10YR3/1～10YR3/2 7.5YR3/1～3/2 (構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)Sと礫 (緻)+++ (塑)- (混)礫φ5～700㎜+++
ⅩⅢb （色)2.5Y3/1～2.5Y3/2 (構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)Sと礫 (緻)+++ (塑)- (混)礫φ5～700㎜ (備)グライ化

第５図　基本層序

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

１　平成12・13年度調査時の基本層序の変更点

今回の調査は、『遺構篇』で「Ⅸ層」と命名された礫層が露出した状態で開始し、調査区に５か所のトレンチを設けて地層を観察し、２か所を図示した。

平成12・13年度調査時には、Ａ・Ｂ２調査区６か所のトレンチを設け基本層序を設定している。それらのうち２か所が今回調査区の隣接地に設けられているので、それを柱状図に改変して再録する。ただし以下の２点について大きく変更した。

①「Ｂ区Ⅳ層」は、今回の調査でⅫ層とした。

②平成12・13年度調査時にはＡ・Ｂ両調査区に現れる礫層を「Ⅸ層」として同一層と捉えていたが、今回「Ⅸ層」はⅫ層を間層として上下に分かれる、異なった堆積層であることが判明した。そのため、「Ⅸ層」は間層をⅫ層としⅨ層からⅩⅢ層まで５層に分層した。

これらのことから平成12・13年当時のＡ調査区Ⅰ～Ⅷ層とＢ調査区Ⅰ～Ⅲ層はその内容を踏襲し、今回調査で新たに検出または細分した層位には、Ⅸから後続する番号を付ける。

２　統一層序

調査区内では基盤礫層であるⅩⅢ層および砂層であるⅫ層が遺跡を広く覆った後、幅数ｍ～10数ｍの小河川が流れ、氾濫を繰り返して礫を供給している。従って遺跡層位の母材は、全て水成堆積層である。そのような小河川からも離水した後、遺構の形成が始まる。

Ⅰ～Ⅷ層は『遺構篇』に掲載済みの為、省略。Ⅱ層以下が遺物包含層である（第５図）。

Ⅸ層は、縄文時代晩期の遺構検出面・遺物包含層であり、ａ～ｄの４層に細分される。これら４層は、Ⅹ・Ⅺ・ⅩⅢ層の上部が遺構構築に伴う礫の移動・再堆積や土壌生成作用によって分離された層である。

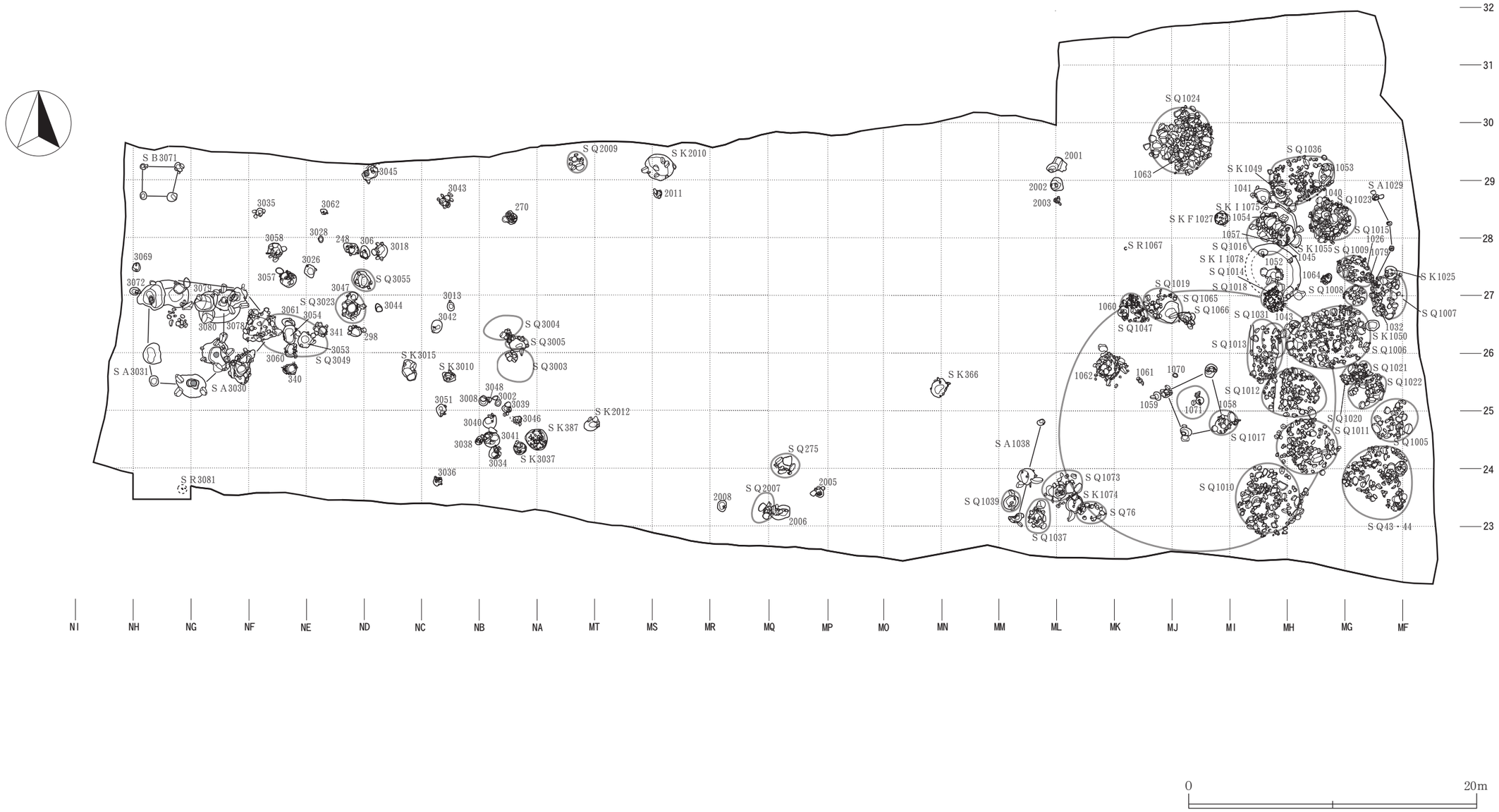
Ⅹ層は、幅５ｍ程の小河川流路内に堆積した礫層であり、洪水・氾濫原堆積物である。断続的な流路埋積過程の堆積単位差によって細分した。僅かに遺物を含むが、上層から落ち込んだと考えられる。

Ⅺ層は、幅12ｍ程の小河川流路を埋める氾濫原堆積物で、無遺物層である。流路が埋まる断続的な過程からａ～ｄの４層に細分される。

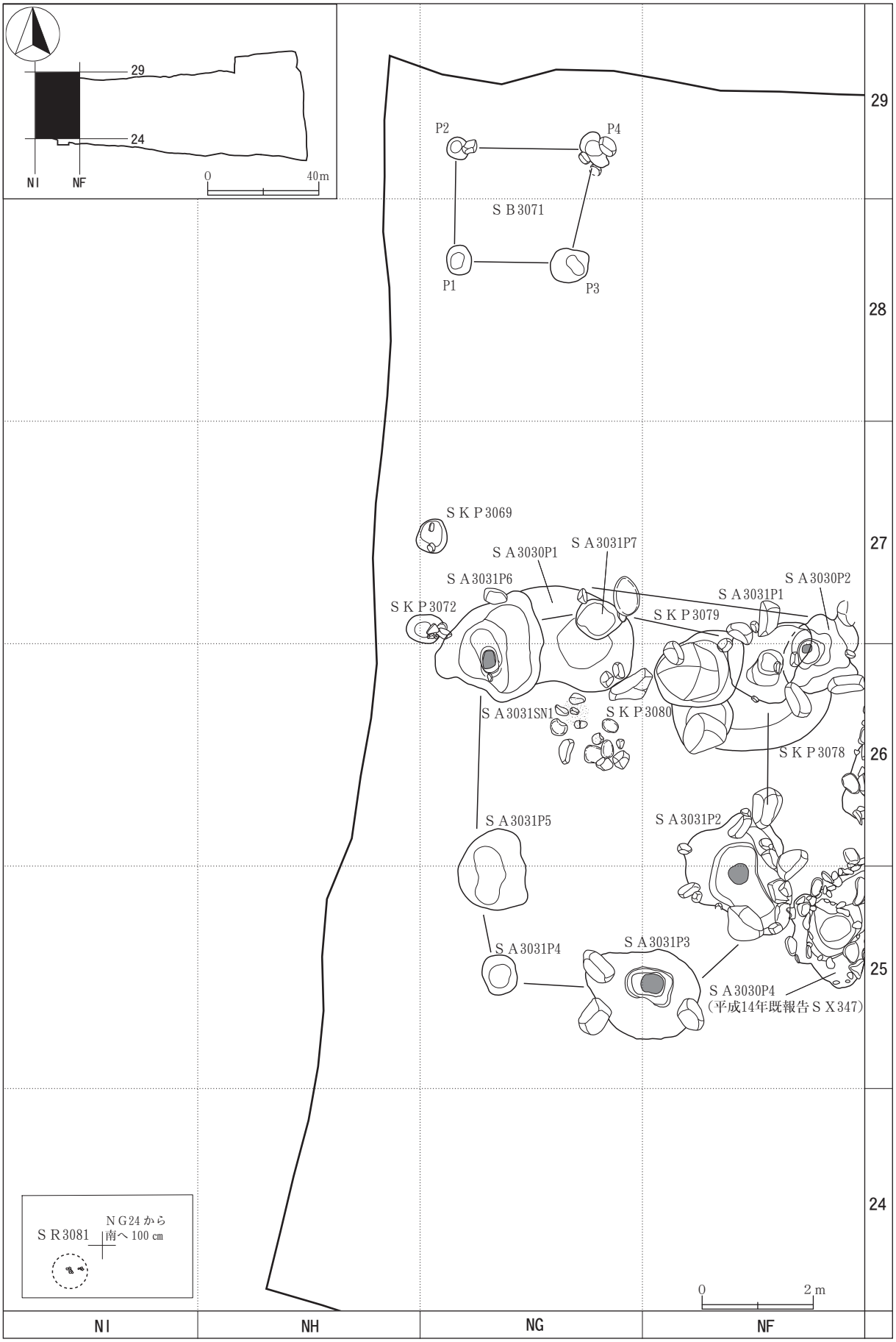
Ⅻ層は、遺跡内を広く覆う氾濫原堆積物である。『遺構篇』の「Ｂ区Ⅳ層」も本層に含まれる。本来は無遺物層であるが、Ⅻ層が地表に露出している地点では上部に遺物が散布する。

ⅩⅢ層は、遺跡の基盤となる小又川の氾濫原堆積物である。堆積単位の違いでａ・ｂ２層に細分される。僅かに水磨された石器が出土する。

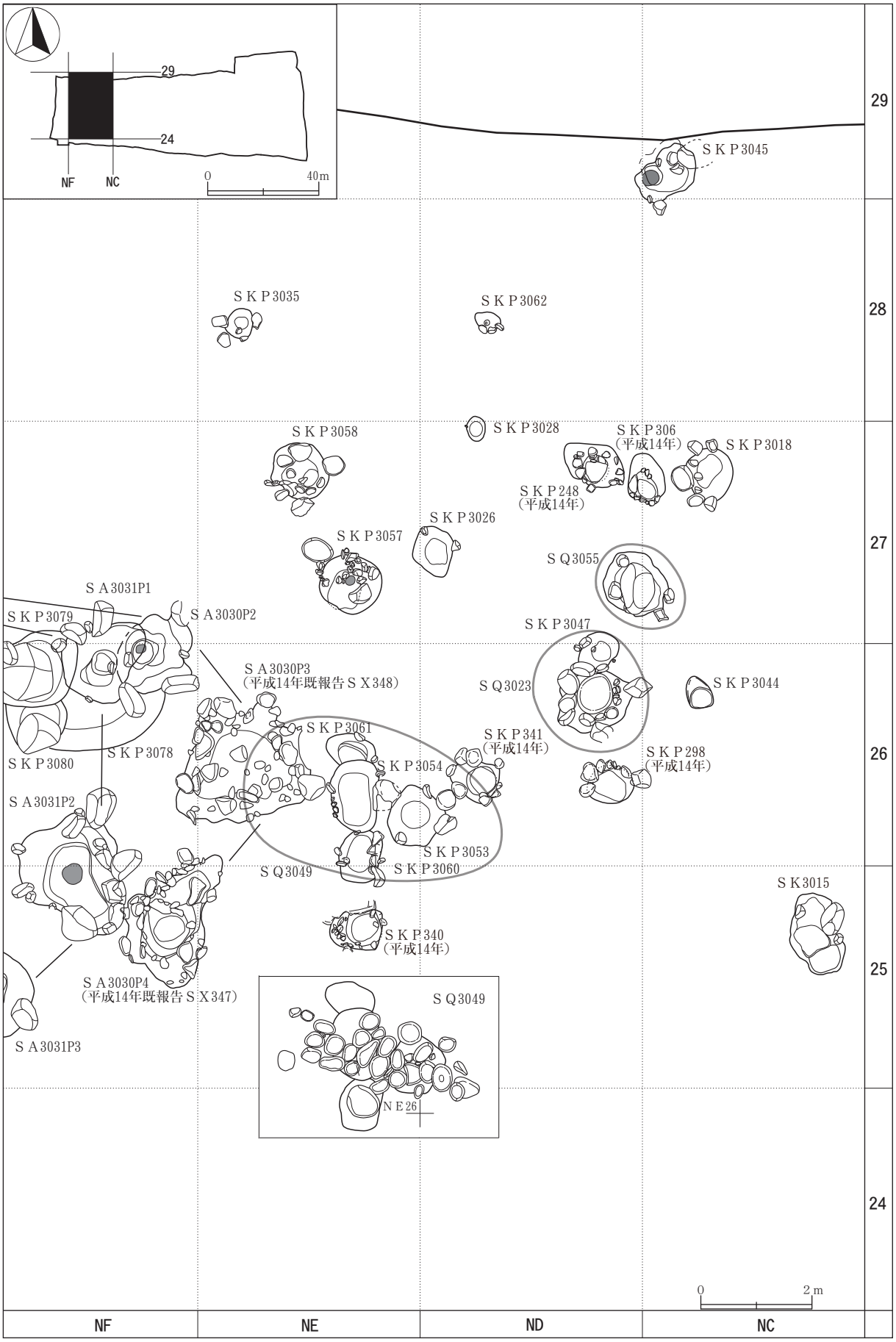
調査区東側ＭＡ～ＭＬグリッドと調査区西側ＮＡグリッド以西では、堆積した岩石の起源が森吉山起源の卓越する東側と、新第三紀の岩石が卓越する西側とで異なるため、遺跡に立って全景を見渡



第６図　遺構配置図（１）（ＳＫＰは遺構番号のみ）


29
24
NI
NF
0
40m
P2
P4
S B3071
P1
P3
S K P3069
S A3030P1
S A3031P7
S A3031P6
S A3030P2
S A3031P1
S K P3072
S K P3079
S A3031SN1
S K P3080
S K P3078
S A3031P5
S A3031P2
S A3031P4
S A3031P3
S A3030P4
（平成14年既報告ＳＸ347）
ＳＲ3081
ＮＧ24から
南へ100㎝
0
2m
NI
NH
NG
NF
29
28
27
26
25
24

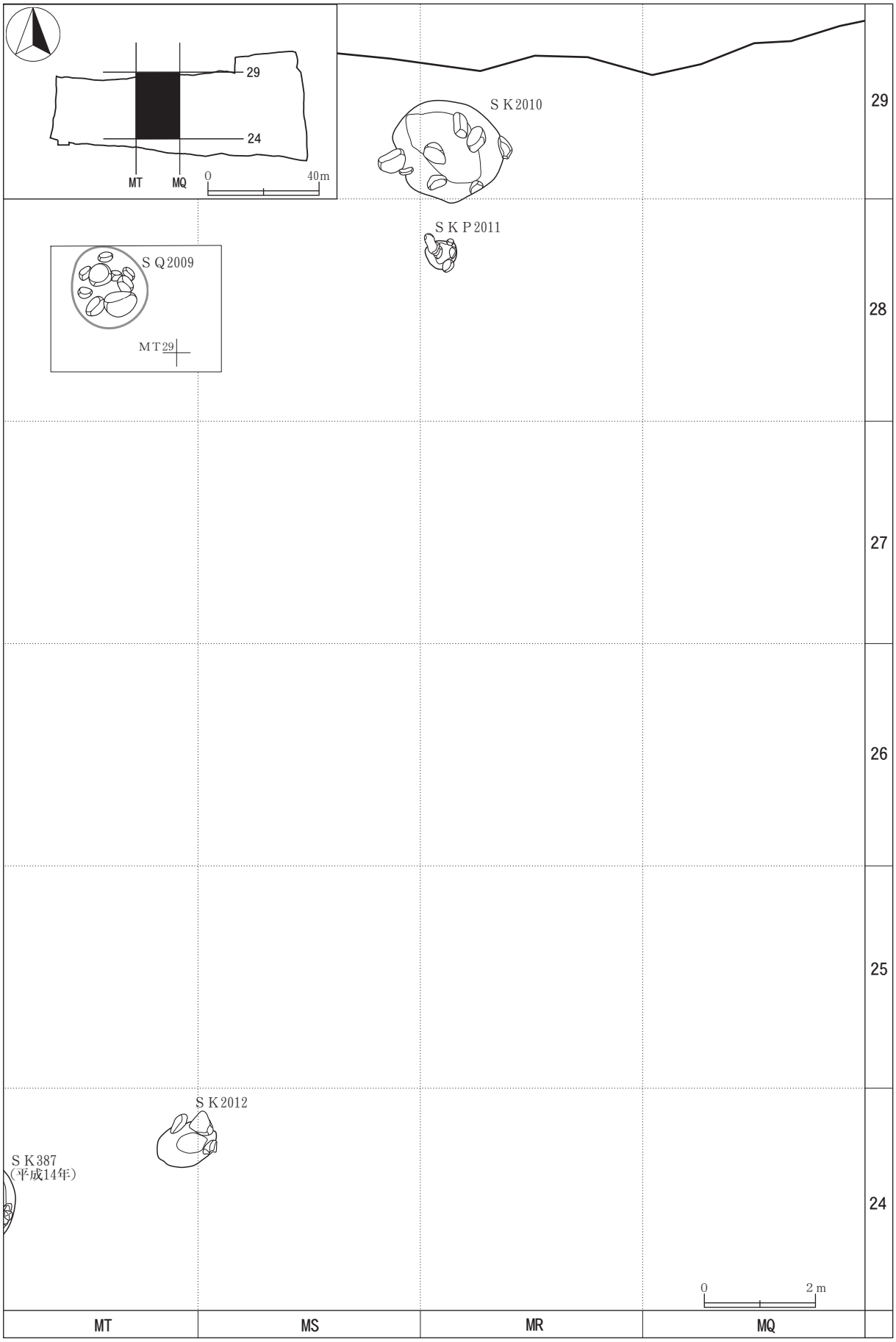
第７図　遺構配置図（２）


29
24
NF
NC
0
40m
SKP3045
SKP3035
SKP3062
SKP3058
SKP3028
SKP306
（平成14年）
SKP3018
SKP248
（平成14年）
SKP3026
SKP3057
SQ3055
SA3031P1
SKP3079
SA3030P2
SKP3047
SA3030P3
（平成14年既報告SX348）
SQ3023
SKP3044
SKP3061
SKP341
（平成14年）
SKP3080
SKP3078
SKP3054
SKP298
（平成14年）
SA3031P2
SKP3053
SQ3049
SKP3060
SK3015
SKP340
（平成14年）
SA3030P4
（平成14年既報告SX347）
SA3031P3
SQ3049
NE26
0
2m
NF
NE
ND
NC

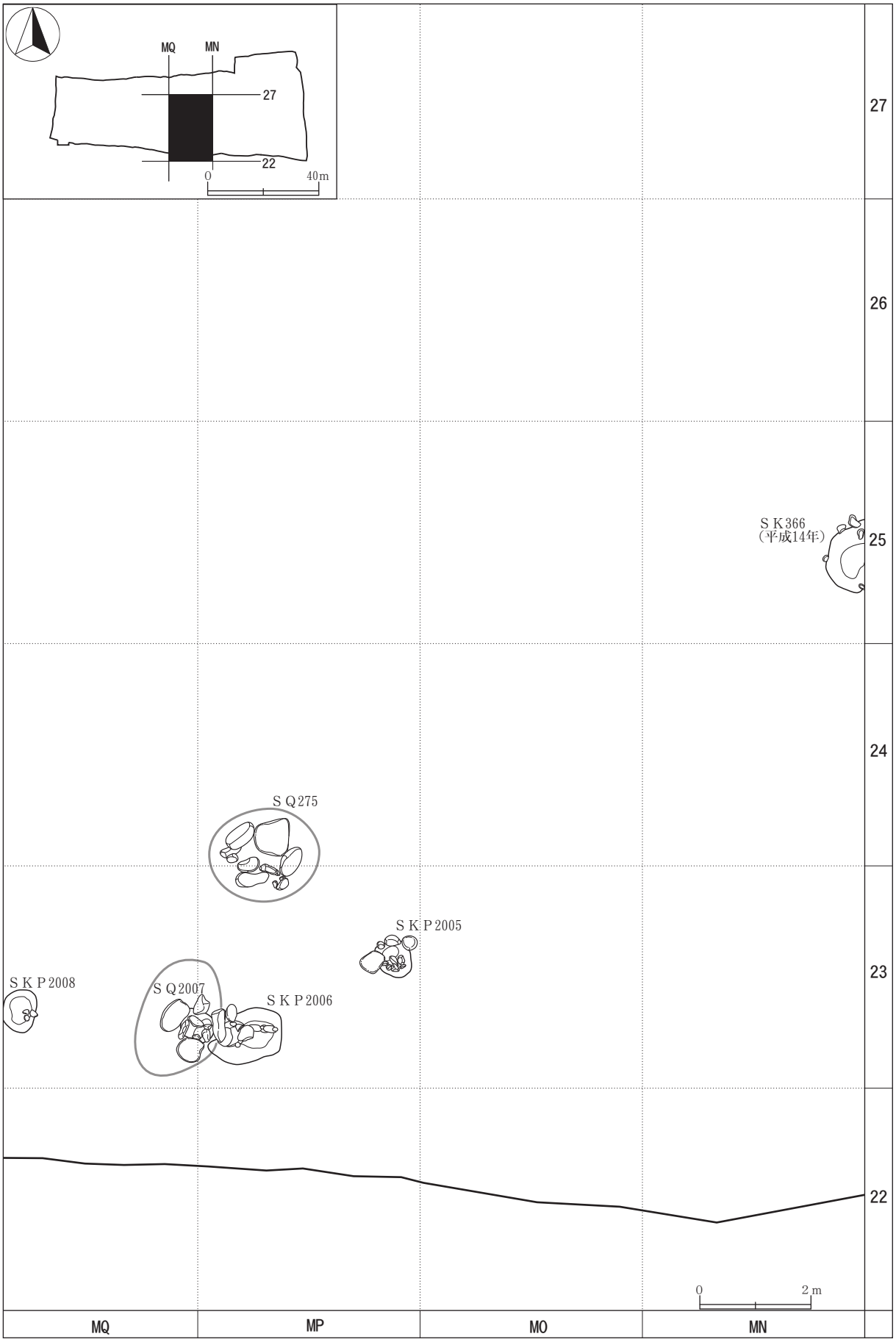
第８図　遺構配置図（３）

29
24
NC
MT
0
40m
SQ2009
SKP3043
SKP270
（平成14年）
SKP3018
SKP3013
SKP3044
SKP3042
SQ3004
SQ3005
SQ3003
SK3015
SK3010
SKP3048
SKP3008
SKP3002
SKP3051
SKP3039
SKP3046
SKP3040
SK2012
SK387
（平成14年）
SKP3041
SKP3038
SK3037
SKP3034
NC24
SKP3036
0
2m
29
28
27
26
25
24
NC
NB
NA
MT

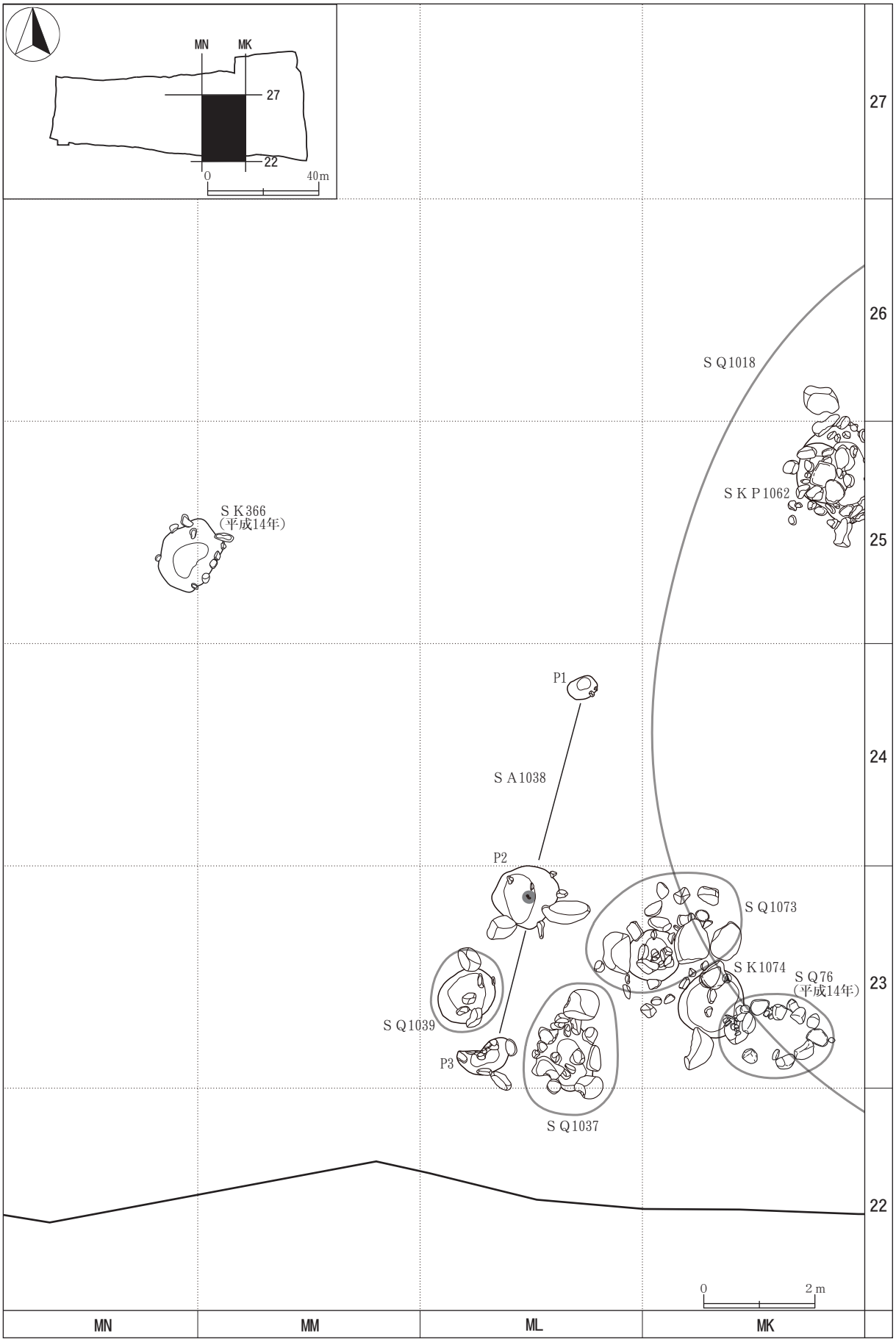
第９図　遺構配置図（４）


29
24
MT
MQ
0
40m
ＳＫ2010
ＳＫＰ2011
ＳＱ2009
ＭＴ29
ＳＫ2012
ＳＫ387
(平成14年)
0
2m
29
28
27
26
25
24
MT
MS
MR
MQ

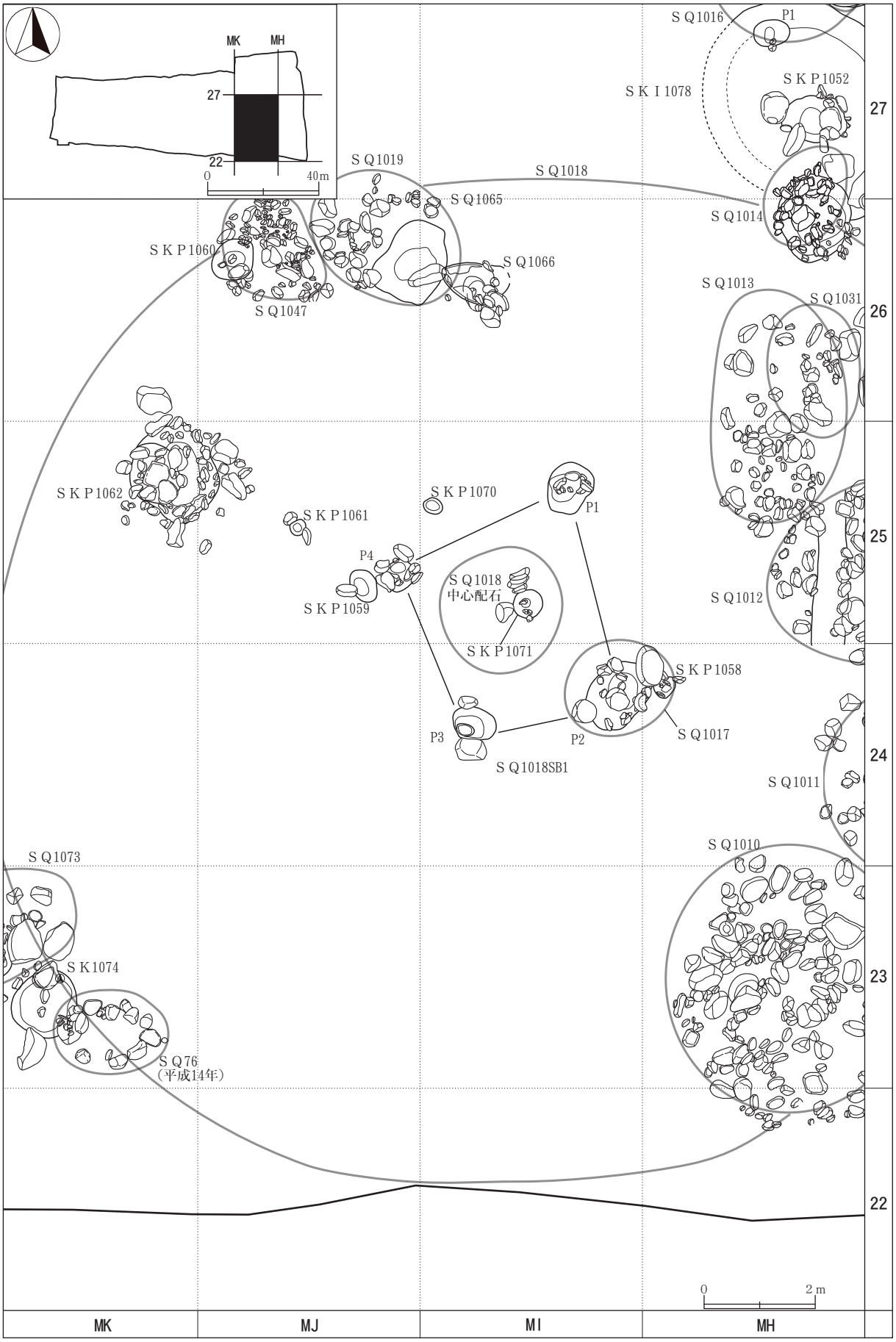
第10図　遺構配置図（５）


MQ
MN
27
22
0
40m
27
26
25
24
23
22
ＳＫ366
（平成14年）
ＳＱ275
ＳＫＰ2005
ＳＫＰ2008
ＳＱ2007
ＳＫＰ2006
0
2m
MQ
MP
MO
MN

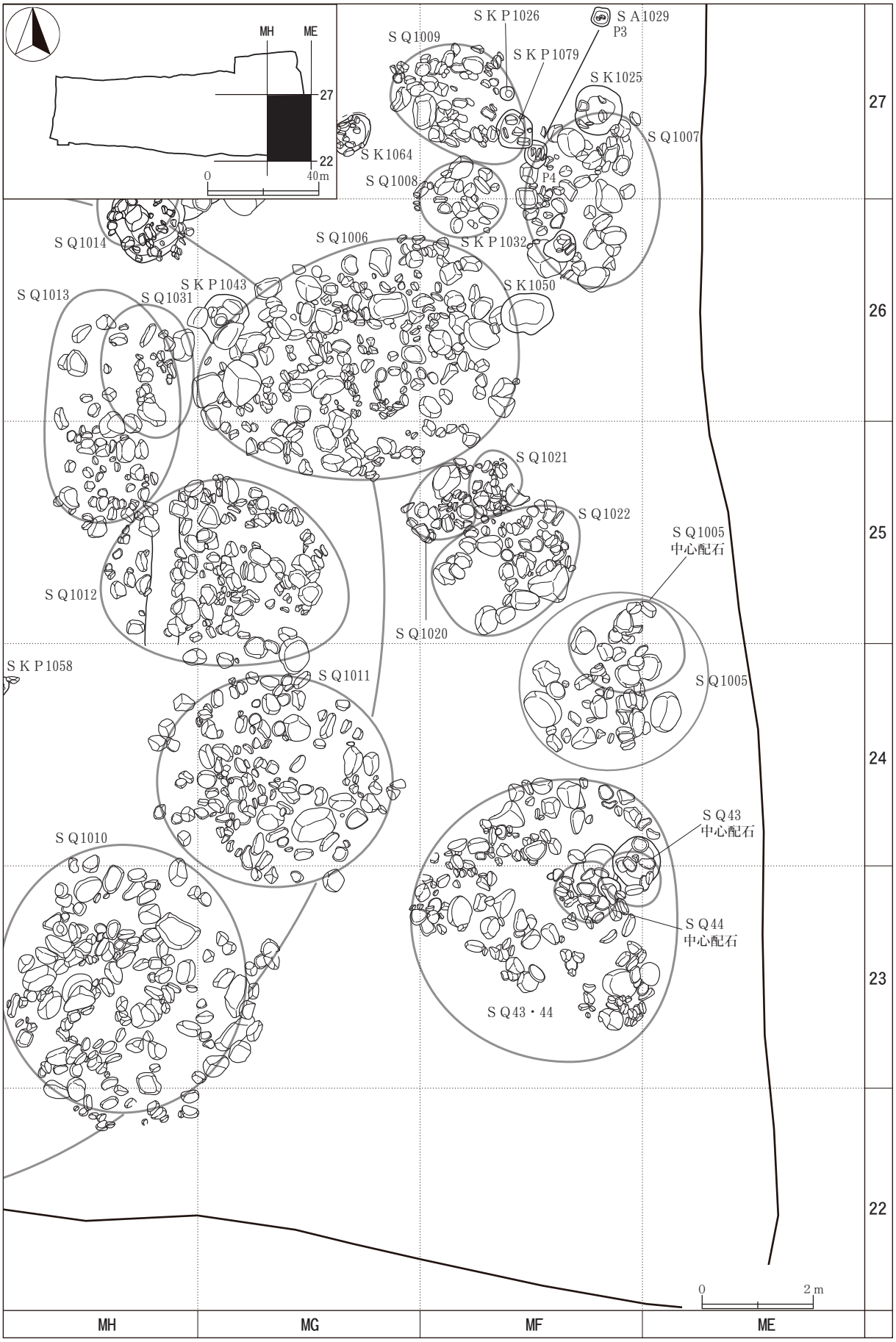
第11図　遺構配置図（６）


MN
MK
27
22
0
40m
S Q1018
S K P1062
S K366
（平成14年）
P1
S A1038
P2
S Q1073
S K1074
S Q76
（平成14年）
S Q1039
P3
S Q1037
0
2 m
27
26
25
24
23
22
MN
MM
ML
MK

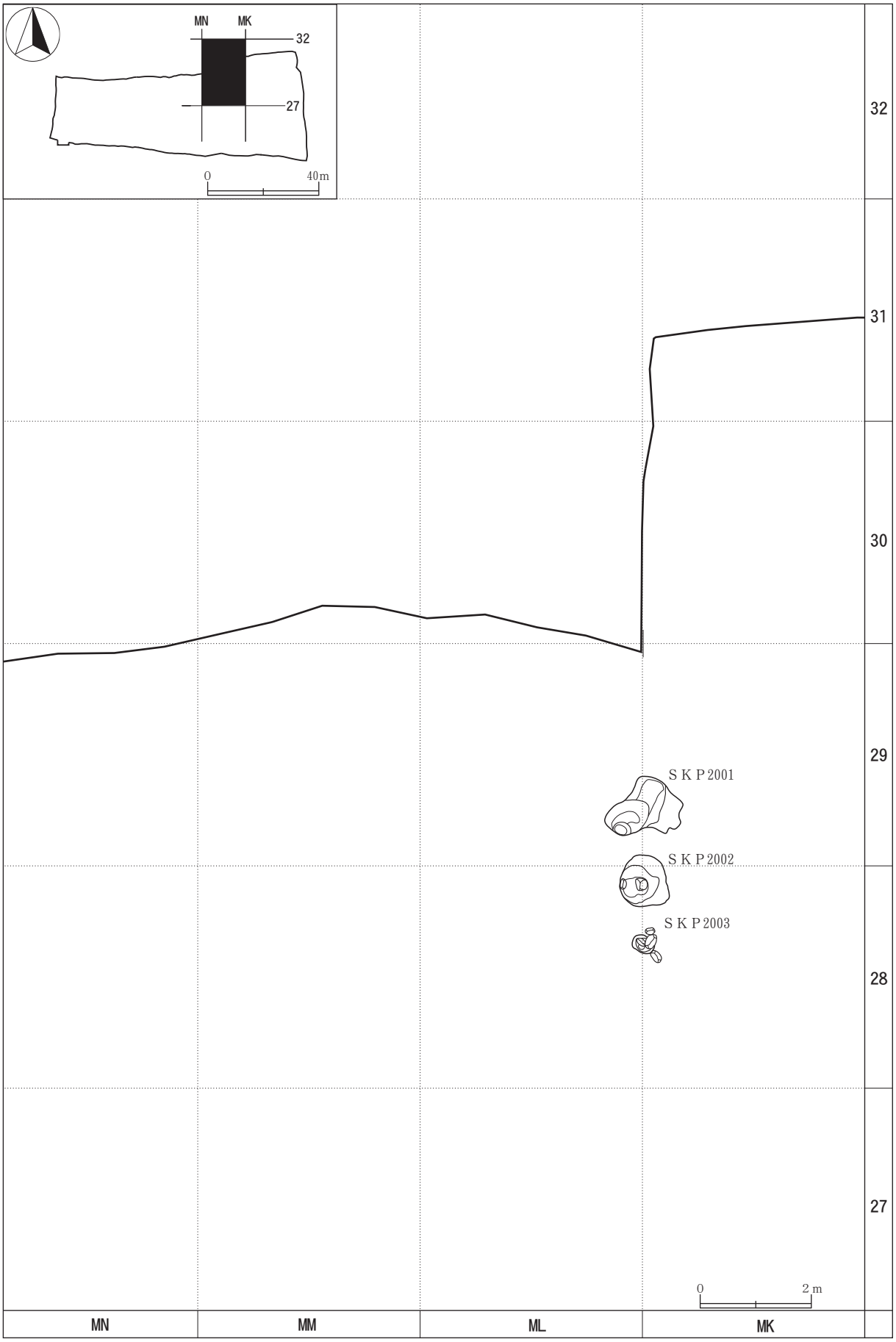
第12図　遺構配置図（７）


MK
MH
27
22
0
40m
SQ1016
P1
SKI1078
SKP1052
SQ1019
SQ1018
SQ1065
SQ1014
SKP1060
SQ1066
SQ1047
SQ1013
SQ1031
SKP1062
SKP1070
P1
SKP1061
P4
SQ1018
中心配石
SQ1012
SKP1059
SKP1071
SKP1058
P3
P2
SQ1017
SQ1018SB1
SQ1011
SQ1010
SQ1073
SK1074
SQ76
（平成14年）
0
2m
MK
MJ
MI
MH

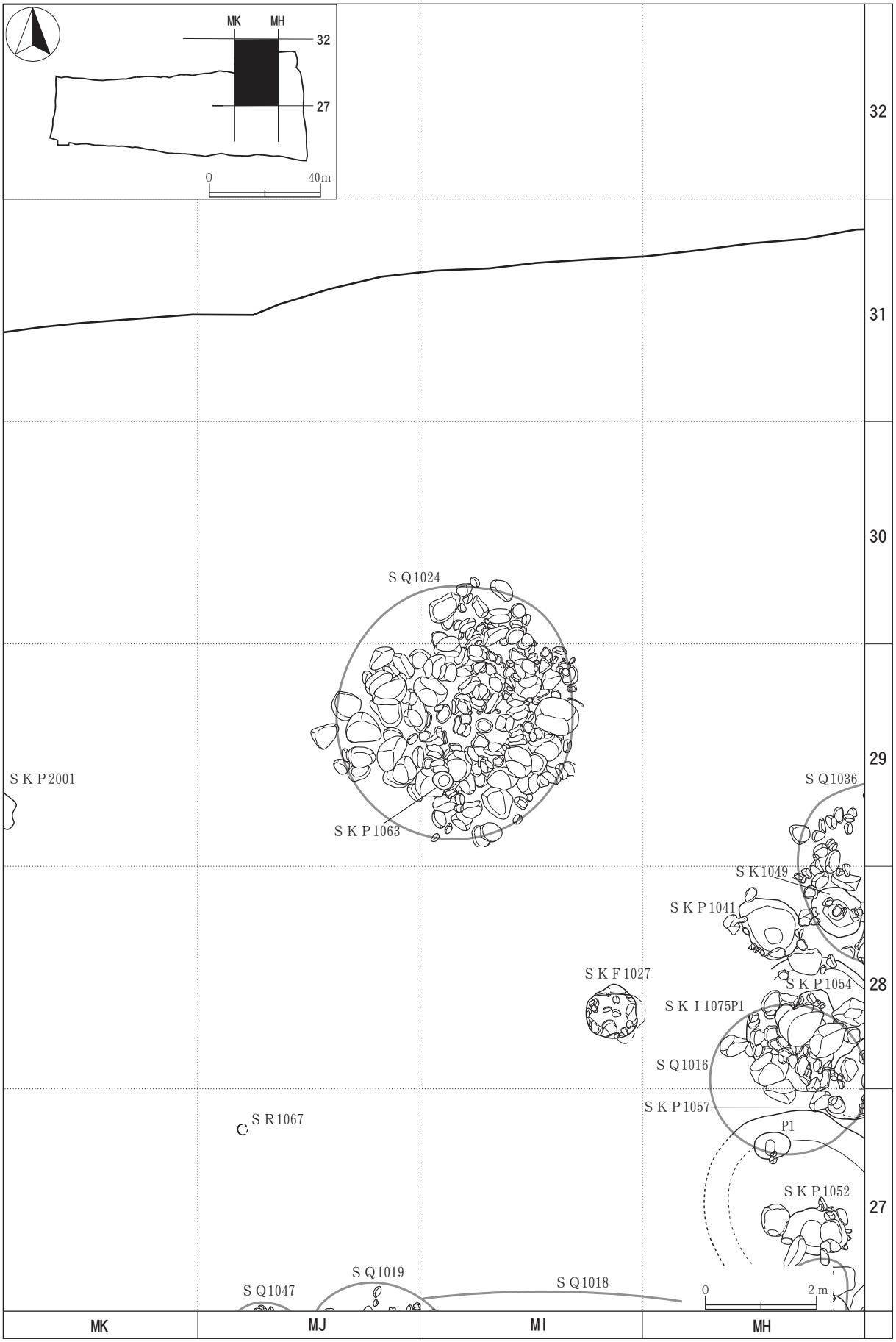
第13図　遺構配置図（８）


MH
ME
27
22
0
40m
S K P 1026
S A 1029
P3
S Q 1009
S K P 1079
S K 1025
S Q 1007
S K 1064
S Q 1008
P4
S Q 1014
S Q 1006
S K P 1032
S K P 1043
S K 1050
S Q 1013
S Q 1031
S Q 1021
S Q 1022
S Q 1005
中心配石
S Q 1012
S Q 1020
S K P 1058
S Q 1011
S Q 1005
S Q 1010
S Q 43
中心配石
S Q 44
中心配石
S Q 43・44
0
2 m
27
26
25
24
23
22
MH
MG
MF
ME

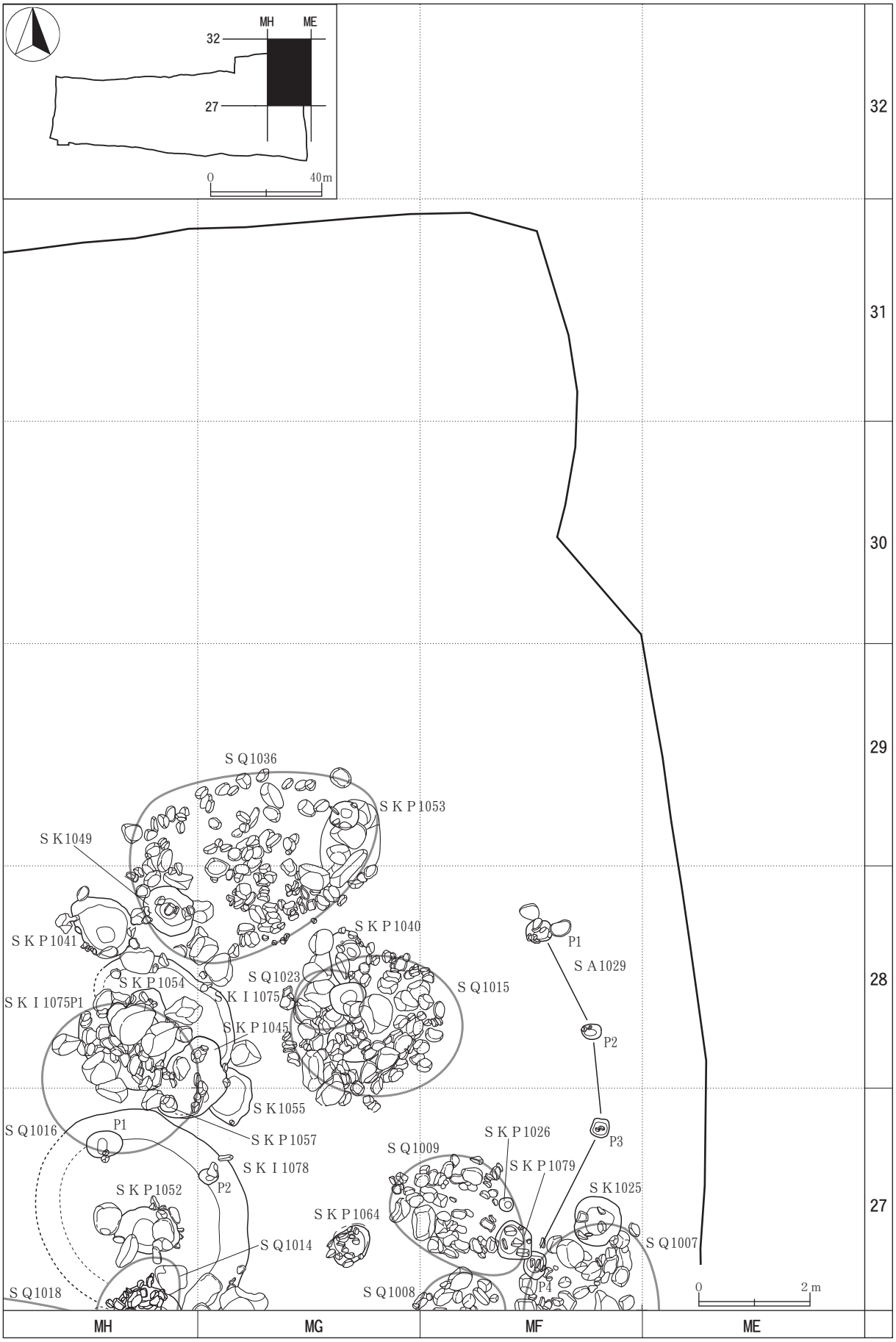
第14図　遺構配置図（９）



第15図　遺構配置図（10）



第16図　遺構配置図（11）



第17図　遺構配置図（12）

したときの印象が全く違う。

Ⅻ層自体に、堆積時期が異なる全く違った礫層を包含している可能性が高い（同一堆積物の小単位による細分ではなく）が、東西に調査区を横断するトレンチでは礫層上面を確認したにとどまり、包含する礫の起源の違いによる分層の可否は明らかにできなかった。

Ⅸ層はⅩ～Ⅻ層を母材として生成した地表面である。Ⅹ層以下は河川流路の変遷によって堆積しており、本遺跡が乗る河成段丘面の微地形形成に深く関わる。地形形成史を粗く記述すれば、河成段丘の基本となる平坦面を形成した時期には、小又川の河床及び河原となっていたと考えられ、Ⅻ層が広く堆積して礫床を形成している。Ⅻ層はⅫ層と異なり、堆積物が粗砂～シルトまで変化しクロスラミナが発達することから、河川の堆積環境が変わり河川の淵に近い部分であったことがわかる。離水しつつも未だ水中にあった。

Ⅺ層の堆積物を供給した河川は、原小又川から分流した小河川であり、強く曲流してＬＱ22付近からＭＥ25を通り、ＭＩ30から西へ向かい、現在向様田Ｄ遺跡と本遺跡を隔てる小さな谷に合流する。この小河川はＭＩ30付近で12ｍ以上の幅を持っていたが、河川の埋積に伴い徐々に幅を減じ完全に埋積する。

その後、最終的にⅩ層を堆積した幅８ｍの河川が流路を踏襲して西へ流れる。Ⅹ層の堆積終了と小又川の段丘面形成が関係すると思われる。段丘面の形成の進行とともに離水が進み、洪水堆積物による砂礫の供給が止まると、人類の土地利用が始まるのであろう。

第２節　検出遺構と出土遺物

１　縄文時代

（１）遺構と遺構内出土遺物

今回の調査では、縄文時代晩期の遺構が８種115基が発見された。その内訳は以下の通りである。

竪穴状遺構ＳＫＩ２基、掘立柱建物跡ＳＢ１棟、柱列跡ＳＡ４条、土器埋設遺構ＳＲ２基、配石遺構ＳＱ35基、フラスコ状土坑ＳＫＦ１基、土坑ＳＫ10基、柱穴ＳＫＰ60基。これらは全て縄文時代晩期の遺構である。また、平成12・13年度に調査着手しながら中断していた配石遺構５基（ＳＱ43・44・275・東部環状配石及び中心配石ＳＱ77・西部環状配石及び中心部敷石）も調査を再開し完掘した。なお、これら５基の内ＳＱ275を除く４基（ＳＱ43・44・東部環状配石及び中心配石ＳＱ77・西部環状配石及び中心部敷石）は、『遺構篇』に遺構番号・図面・部分的な所見が記載されているが、所見を修正し改めて報告する。また『遺構篇』での「東部環状配石及び中心配石ＳＱ77」をＳＱ1018に、西部環状配石及び中心部敷石はＳＱ3049に名称を変更した。

上記今回発見の遺構数及び巻末の抄録に掲載された遺構数には、これら４基を含めていない。３か年の調査における最終的な検出遺構数は450基であり、本書第６章第36表にまとめた。

遺構・遺物の詳細は観察表（第３～27表）にまとめた。以下に各種別ごとの代表的な遺構を取り上げて概述する。

①竪穴状遺構（ＳＫＩ）

竪穴状遺構ＳＫＩは２基検出した。重複する配石遺構や土坑の調査に伴って上面及び周辺の礫を除去したところ、Ⅻ・ⅩⅢ層よりも黒色味の強い土が円形に堆積し遺物が集中する地点であることから、遺構と判断した。両者とも浅く緩やかに掘り窪めた竪穴部を持ち１～２基の柱によって簡単に小屋がけしたと考えられる。

ＳＫＩ1075（第18・19図、第３表、図版１）は柱穴を１基持つ。ＳＱ1016・ＳＫＰ1045・ＳＫＰ1054・ＳＫ1055・ＳＫＰ1057よりも古い。ＳＫＩ1078とは隣接する。掘方は明瞭であるが、壁の立ち上がりはⅪ層とⅫ層の層界の傾斜に沿い、緩やかで底面との境も明瞭ではない。近接するＳＫＩ1078とは同時期もしくは連続して構築されたと考えている。埋土から出土した粗製土器深鉢と石皿を図示した（第18図１～19図３、第19・24表）。

ＳＫＩ1078（第20～23図、第３表、図版２・３）は柱穴を２基持つ。ＳＱ1014、ＳＫＰ1052より古い。規模・形態ともＳＫＩ1075と相似し、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土から出土した大洞Ｃ１式土器・粗製土器、石核転用削器・石匙・折断石器・円盤状石製品・剥片・石核を図示した（第22図１～23図21、第19・24表）。大洞Ｃ１式土器（第22図１）の内面に塊となってアスファルト（第27表）が付着していた。この土器は、割面にもアスファルトが付着しているので、パレットのような道具として使われた可能性がある。

②掘立柱建物跡（ＳＢ）

掘立柱建物跡ＳＢ（第24・25図、第３表、図版４・５）は１棟検出した（ＳＱ1018に付随するＳＱ1018SB1は「配石遺構」として扱う）。ＳＢ3071は４基の柱穴で構成され、規模は2.8ｍ×2.1ｍである。柱穴は４基とも礫混じりの褐色土で埋められる。柱穴Ｐ３から大洞Ｃ１式土器が出土した（第25図２、第19表）。

③柱列跡（ＳＡ）

柱列跡ＳＡは４条検出した。柱配置の平面形状で分類すると、直線を呈するもの１条（ＳＡ1038）、弧状を呈するもの２条（ＳＡ1029・3030）と、環状もしくは多角形を呈するもの（ＳＡ3031）１条に分けられる。弧状および環状もしくは多角形を呈するものは柱を立てて復原した場合、所謂「ウッド・サークル」となるだろう。

ＳＡ1038（第27・28・30図、第３表、図版６～８）は柱穴３基が長さ７ｍの直線状に配置される。隣接してＳＱ1037・1039・1073・ＳＫ1074がある。柱穴とこれらの遺構は重複しないので、新旧関係は不明であるが、遺構の集中地点となっている。柱穴P2から大形の土器破片（第27図１～３、第19表）が出土した。

ＳＡ1029（第26図、第３表、図版５・６）は柱穴４基が長さ7.6ｍの弧状に配置される。Ⅻ層上面で確認した。他の柱穴列や柱穴と異なり、埋土にⅩⅢ層由来の礫が全く入らずⅫ層由来の細かい砂で一様に埋められている。このことから、ＳＡ1029の構築面はⅫ層上面であり、構築時期は周辺の配石遺構よりも古い。Ⅻ層が卓越する自然堤防状の微高地に造られたと考えられる。その後本遺構の上面には、ＳＱ1007～1009・1036などⅩⅢ層由来の礫を積み上げて構築する配石遺構群が造られ、一面が礫で埋め尽くされる。

ＳＡ3030（第31・32・34・36・37図、第３・19・24表、図版９～11）は、柱穴４基が9.1ｍ×4.8ｍの弧状に配置される。Ｐ２がＳＡ3031P1に切られることから、ＳＡ3031より古い。『遺構篇』でＳＸ347・348として報告した２基が、本遺構の柱穴Ｐ３・4となった。柱穴の直径・深さ・堆積土は、ＳＡ3031とほぼ同様である。柱穴の平面形は不整形である。礫層を掘り込むときに大形礫をさけながら作業したことにもよるが、Ｐ１～３は柱を抜去していることから、抜去時に上部を壊していることにも関係する。柱穴Ｐ２上面を蓋するように台石（第37図11、第24表、図版10－８）が埋められていた。

ＳＡ3031（第31・33・34・38・39図、第４・19・20・24表、図版９～13）は柱穴７基が直径８ｍ×5.8ｍの環状もしくは多角形に配置される。掘方の直径が１ｍを超える柱穴が多い。柱で囲われた内部北寄りに焼土遺構SN1がある。掘立柱建物となる可能性があるが、柱の配置・柱間がまちまちで上屋構造を想定しにくいため柱穴列とし「ウッド・サークル」と考えた。ＳＡ3030と重複し柱配置も類似するので、ＳＡ3030からＳＡ3031へ建て替えられSN1を共有・継続利用したと考えられる。

④土器埋設遺構（ＳＲ）

土器埋設遺構ＳＲは２基検出した。両者とも遺存状態は悪いものの、１基ＳＲ1067（第41図、第４・20表、図版13）は大洞Ｃ１式土器の鉢形土器、もしくは深鉢形土器を倒立して埋めている。ＳＲ3081（第42図、第４・20表）は、水田耕作による遺構・遺物の破損が著しく、土器片が約１ｍの範囲にまとまって出土した。土器破片の大半が同一個体であることから土器埋設遺構と認定した。

⑤配石遺構（ＳＱ）

配石遺構ＳＱは新たに34基検出し、平成12・13年度に調査中断していた５基（ＳＱ43・44・275・東部環状配石遺構及び中心配石ＳＱ77・西部環状配石遺構及び中心部敷石）を加えて39基を調査・報告した。配石遺構は、平面形と下部土坑の有無で３形態９細別した（第６章第145図）。なお、『遺構篇』では焼土や埋設土器を伴う石囲炉状の配石遺構が22基報告されているが、今回は未検出である。

１　円形に石を配列する
　ａ下部土坑を持つ　　ＳＱ1014・1066・3003・3004・3005
　ｂ下部土坑を持たない　ＳＱ1007・1008・1009・1010・1012・1013・1017・1019・1047・2009
２　石を寄せ集める
　ａ下部土坑を持つ　　ＳＱ1015・1016・1023・1065・1073・3023・3055
　ｂ下部土坑を持たない　ＳＱ1011・1020・1021・1022・1031・275
３　特殊な形に石を配列、もしくは積み上げる
　ａ環状配石　　ＳＱ1018
　ｂ塚状　　ＳＱ1024
　ｃ敷石状　　ＳＱ3049
　ｄ竪穴住居跡状　　ＳＱ1005・1006・1036・43・44
　ｅ立石を持つ　　ＳＱ1037・1039・2007

１ａ類の内、ＳＱ1014（第59・60図、第５表、図版２・３）やＳＱ1066（第88・89・92図、第９表、図版27・28）は、直径１ｍを超える下部土坑を持つ点が２ａ類と似る。配石が２類に比べて整った円形を呈する。ＳＱ1066の配石は石皿（第92図24、第25表）を含む楕円形の礫が放射状となるように配置されていた。ＳＱ3003～3005（第96・97図、第９表、図版29・30）は対照的に下部土坑がごく浅く、ＳＱ43・44中心配石と下部土坑の関係に似た印象を受ける。ＳＱ3005には長辺0.76ｍの直方体を呈する大形礫が埋められていた。１面には自然面を残すが、他は全て１撃の剥離面で構成されていた。自然面の形状から本来は円礫であったことがわかる。

１ｂ類の内、ＳＱ1019（第75・76図、第６表、図版24）・1047（第86図、第８表、図版24・27）は、ＳＱ1018の外帯外縁の裾の礫を除去して構築している。ＳＱ1018の外帯が崩れて再堆積した礫で埋まる。ＳＱ2009（第95図、第９表、図版29）は配石遺構の少ない調査区中央部の北寄りで検出した。Ⅻ層が下層から一部露出した地点での構築であり偽配石と区分しづらいが、礫の配列が整然としていたので遺構とした。本類と２ｂ類の区分は、やや曖昧さが残る。

２ａ類は、直径0.5ｍを超える大形礫をランダムに積んでおり、直径１ｍを超える礫も含まれる。ＳＱ1016（第63・64図、第６表、図版19・20）は、当初上面の礫が巨大であることから人為的に積まれたとは考えておらず、下部土坑が検出されて初めて上面の礫が人工的な集積物であることに気づいた。下部土坑も直径が２ｍ近くの大形である。

２ｂ類はＳＱ1020～1022（第77・78図、第７表、図版24・25）のように、直径0.2ｍ程度の礫を集中的に用い、Ⅻ層から露出した直径１ｍ近い礫と礫の狭い間にまとめている。礫の大きさにまとまりが強く、周囲の自然礫層の大きさと構成が異なることから弁別した。

３類はより具象的な形状を持つ。ａ類としたＳＱ1018（第65～74図、第６表、図版20～23・46）は、直径1.96ｍ×1.6ｍで石囲炉状を呈する中心配石、柱穴４基で構成される掘立柱建物跡SB1と直径20.5ｍ×18.6ｍの環状配石によって構成される。ただし環状配石部は中心配石からＮ－０～90°－Ｗの１/４弧、長さ12ｍ幅５ｍ高さ0.5ｍ以上の範囲が人為堆積部分で、他はほぼ自然の高まりである。ＳＱ1018はこのような外帯を、壁もしくは周堤に見立てることができる巨大な竪穴住居形を呈する。東部環状配石とする。

人為的に積まれた１/４弧部分は、礫の堆積単位を18単位（以下、堆積単位をクラスタと呼ぶ）見いだすことができた。各クラスタは、積まれた礫の堆積方向と構成礫の重なりの卓越傾向によってそれぞれの新旧を区別した。クラスタの堆積順序と中心配石構築時点の関係を、第65図にハリス・マトリクス(註1)として示した。

ＳＱ1018の構築順序は、中心配石構築以前に内帯に形成された大量の炭化物を含む極薄い層（炭化物ラミナ）を鍵層として大きく２分する事ができる。炭化物ラミナと直接新旧関係を持たないクラスタは、クラスタ11を介在することで全体の堆積順序に位置づけることができるが、クラスタ11を含めてクラスタ２～７・12～18は、中心配石構築との先後関係が不明である。

最初に連続して積まれるのはクラスタ１→10→９である。中心配石の北側に堆積したクラスタ９では、外帯の内法最下部前面に直径0.5ｍを超える大形礫を数個配置して、クラスタ１や10の礫が内側に崩れないための土留石としている。炭化物ラミナは、クラスタ９の土留石前面でとぎれ下面には潜り込まないことから、クラスタ９堆積後に形成されたと判断する。

クラスタ１・10・９に隣接するがクラスタ境界の重複を決定できなかったのが、クラスタ２・３・７・12・18である。これらは、クラスタ３→18→７→12とクラスタ７→２の２つの堆積順序に分かれる。炭化物ラミナとの重複がなく新旧関係を直接立証できないが、クラスタ１と隣り合って連続するのがクラスタ７であるから、クラスタ１の堆積とほぼ同時に堆積したと考えた方が自然であろう。すると、クラスタ７よりも古いクラスタ３・18も連続して積まれたはずであるから、炭化物ラミナ形成以前に外帯の基本的な形態は造られたと考えられる。つまり中心配石構築位置を中心に直径４～６ｍの内帯から礫を外側に積んで、内帯を凹地とすると共に外帯を形成したと考えられる。

そして炭化物ラミナが内帯に堆積した後、中心配石を設置している。ＳＱ1018SB1P2付近にもよく似た炭化物散布面が広がっており、もともとは内帯に広く堆積していた可能性がある。

クラスタ７より新しくクラスタ４より古いのが、クラスタ２である。炭化物ラミナとの重複が不明であることから、堆積順序としては中心配石やクラスタ11と同時期に積まれたことになる。ただ、クラスタ２は、中心配石構築以前に堆積したクラスタ９と同じく外帯内法に堆積しており、外帯の構築順序が外側→内側に積まれる傾向があることから、炭化物ラミナ形成以前に堆積したと考えられる。

ＳＱ1018SB1P2の上面にはＳＱ1017（第67・68図、第６表、図版20）が構築されているが、直接の関係はないと考えている。ＳＱ1018外帯東部にはＳＱ1006をはじめとして複数の配石遺構が構築されるので、ＳＱ1018外帯堆積後に造られる小形円形配石の一つとして考えられる。ＳＱ1019とＳＱ1047はＳＱ1018の外帯を壊して構築され、外帯から崩落した礫で埋められていた。

中心配石の北西脇ＳＱ1018SB1P4上面から石刀（第72図48～57、第25表、図版46－７）が破砕されて出土した。48・55・57が上から、残りが５㎝程下から出土したので、先端側を先に埋め、その後基部側を埋めたと考えられる。

ｂ類としたＳＱ1024（第79～82図、第７表、図版25・26）は大形礫を積み上げ塚状をなす。２ａ類に似て下部土坑を持たない。遺構構築面は、縄文時代晩期の旧地表面である。ＳＫＰ1063を埋めている。本遺構の上面西側は近代に再堆積した礫が塚状に堆積していた。また、南側は塚状を呈する遺構の裾直近まで水田耕作による削平が行われていたので、本遺構も近代に農耕の邪魔になった礫を重機で積み上げた可能性があった。しかし、近代の礫層中に含まれていた陶磁器類は、ＳＱ1024上面以下からは全く出土せず、礫間を埋めるマトリクスの緻密度も礫自体の密集度も急に高くなることから、縄文時代の遺構であると判断した。積まれた礫の間には大洞式土器の破片が混じる（第81図１～６、第20・21表）。アスファルト塊が出土した（第82図16、第27表）。

ｃ類としたＳＱ3049（第99・101図、第10表、図版31）は、『遺構篇』では「西部環状配石遺構中心部敷石」として報告された。直径0.3ｍを超える大形の扁平礫を敷く。礫の敷設に先立って厚さ0.1ｍ程の盛土をしている。盛土の下からＳＫＰ3053・3054・3060・3061の４基が検出された。これらの柱穴は埋土上面にすでに薄く腐植が蓄積しており、柱穴の埋め戻しと盛土は連続していない。

敷設される礫は重複しないものの、縁と縁の組み合わせからある程度の構築順が想定できる。中央部ＳＫＰ3054上面に重なる９個の礫をおおよそ三角形になるように並べ、西側に５個、東側のＳＫＰ3053上面に６～７個を連続して並べている。

なお敷石の敷設に先立つ盛土の根拠は、１層の色調が明度４であるのに対し、２層では明度３とより暗いことによる。１層の明度の高さは、Ⅻ層由来のブロックが２層よりも多く含まれることによ

る。両者ともⅫ層を母材としているが、１層と２層の層界には断絶があり、１層の堆積時に新たな母材が供給されたことにより明度が高くなる。２層はＳＫＰ3053・3054の埋土を母材として生成された土壌としてすでに腐植の蓄積が進んでいるのに対し、１層はより腐植の蓄積が弱い。従って、１層と２層は連続する土壌生成作用によらず、１層の堆積には新たな母材の供給が行われたと結論できる。

新たな母材の供給について自然要因（急速な風成砂堆積や洪水堆積物）を想定するならば、遺跡内の広い範囲で同様な母材の供給が観察されるはずだが、調査区内では見つからなかった。従って、母材の供給は人為的であること、遺構の構築に伴うことから盛土と判断する。

『遺構篇』ではＳＱ3049の「周辺に礫が希薄であること、その外側に比較的小さな礫がやや集中傾向にあること」を根拠に「西部環状配石遺構」が設定された。しかし、今回すべての礫をはがしたところ、南側ＮＥ24～ＮＧ24にかけて「集中傾向」にあるとされた礫も、北側と東西の礫層もⅫ層の自然礫層が露出したものであった。Ⅻ層上面では、複数の柱穴や配石遺構が構築されることから、礫はある程度人為的に移動しているが、ＳＱ1018外帯のように礫を積み上げて周堤を構築するような大規模な礫の移動はない。

ただしＳＱ3049周辺６～８ｍは礫が希薄である。理由は次の３点が考えられる。①旧河床の凹地やスパンの長いうねり（頂点間の距離数10ｍのアップダウン）に砂が堆積した、周囲よりも僅かに低い位置を利用している。②ＳＱ3049下部に柱穴が４基（ＳＫＰ3053・3054・3060・3061）あり、西側にはＳＡ3030・3031が構築されるなど、自然礫層を掘り込んで頻繁に遺構を構築し、土壌と共に埋め戻している。③ＳＱ3049の敷石直下の堆積土は、Ⅻ層の黄褐色砂質壌土を由来とする盛土である。

これら３点に加えて、ＳＱ3049構築に当たっては大形の礫を直径６～８ｍの範囲で除去し、まき散らすように周辺に廃棄したと考えられる。

ＳＱ3049の周囲12ｍ程に現れる自然礫層については、掘り込み・積み上げといった通常の遺構認定の基準となる要件を欠く以上、東部環状配石ＳＱ1018とは同列には扱えないので、ＳＱ3049の類型はあくまでｃ類敷石状である。ただし、盛土と礫の移動によって礫のない地点を人工的に創出し、周辺の地形・土壌を含めてＳＱ1018のような環状配石様の景観を持つ点を積極的に評価し、括弧付きで「西部環状配石」とする。

ｄ類としたＳＱ1005（第43図、第４表、図版14）・ＳＱ1006（第44～46図、第４表、図版15）は石囲炉状の中心配石を持ち、周囲に大形の礫を配して竪穴住居跡状の平面形を形成する。中心配石内部は焼けず焼土も堆積していない。遺物の出土も稀薄である。

またＳＱ43・44（第103・104図、第10表、図版32）は、共に『遺構篇』で石囲炉状の配石として中心配石内面のみが調査・報告された。今回、周囲を含めてⅫ層まで断ち割り、中心配石の構築に先立つ極浅い土坑と直径4.92ｍ×4.7ｍの円形平面を構成する大形礫を確認した。下部土坑上場と配石の位置は僅かにずれている。

ＳＱ1036（第83～85図、第８表、図版26・27）は他の４基と異なり石囲炉状の中心配石を持たないが、大形の台石・石皿（第85図１・２、第25表）・礫を弧状に立て並べており、竪穴住居跡の壁か衝立のような印象を受けるため本類に含めた。弧状に配置された石皿・礫の反対側には直径１ｍを超える自然礫があり、Ⅻ層から一部が露出した巨礫を遺構の一部として取り込んでいると考えられる。このように自然礫の一部を取り込んで遺構全体が円形となるような配置は、前述のＳＱ1018・

3049といった環状配石とも共通する。

⑥フラスコ状土坑（ＳＫＦ）

フラスコ状土坑はＳＫＦ1027（第106図、第11表、図版33）を１基のみ検出した。上部は水田耕作時に削平されておりⅫ層上面で確認した。本来であれば、Ⅻ層（砂層）上にはⅨ～Ⅺ層が堆積しているはずである。底面は、Ⅻ層上面を掘り込む。ＳＱ1016の近くにあることから、上面に配石が積まれていた可能性もある。

⑦土坑（ＳＫ）

土坑ＳＫは10基検出した（第27～30・49～51・84・106・108・109図、第11・12表、図版７・９・33～35）。土坑の分類基準を直径0.6ｍ以上あるもの、0.6ｍ未満を柱穴とした。しかし直径0.6ｍ以上でも、柱痕跡や柱抜去痕跡が残ることから、柱穴ＳＫＰに分類した遺構も多い。そのため柱穴の方が、直径・深さとも土坑より大きい遺構が目立つことになった。

ＳＫ2010（第108図、第11表、図版34）は直径２ｍの大形円形土坑である。特大の柱穴の平面形は柱の抜去で壊されていることが多いが、本遺構は整った円形を呈する。ＳＫ3015（第109図、第12表、図版35）は底面に直径0.5ｍを超える大形の扁平礫を埋めていた。

⑧柱穴（ＳＫＰ）

柱穴ＳＫＰは、60基検出した。柱穴は大きさで５種類（特大・大・中・小・杭状）、埋土で２種類（黒色土と礫によって埋められるものと、褐色の砂質壌土と礫によって埋められるもの）の10種類がある。なお、文中黒色としたのは、明度３以下で彩度２未満、または明度２以下・彩度２以下の色調であり、褐色としたのは明度３以上・彩度２以上の色調である。

ほとんどの柱穴ではマトリクスとなる土壌とⅫ層を由来とする大量の礫によって埋められているが、一部の柱穴では礫をあまり含まない場合がある。このような特徴を持つ柱穴は、埋土が褐色の場合は配石構築に伴う大がかりな礫の移動がなされる前に造られた可能性があり、埋土が黒い場合は遺跡に黒色土が厚く堆積した後に掘られたことになる。柱穴の埋土が礫をあまり含まない場合、色調も褐色であることが多いので、生活面の土壌化があまり進んでいない時期に掘られたと考えられる。

１　特大　直径1.21～2.0ｍ、深さ0.56～1.12ｍ
　ａ黒色土と礫で埋める　ＳＫＰ1041・1045・2006
　ｂ褐色土と礫で埋める　ＳＫＰ1062・3054・3078・3079
２　大　直径0.94～1.2ｍ、深さ0.48～1.07ｍ
　ａ黒色土と礫で埋める　ＳＫＰ1040・2001・2002・3018・3026・3041・3057・3058
　ｂ褐色土と礫で埋める　ＳＫＰ1043・1052・3040・3042・3045・3051・3053・3060・3061・3080
３　中　直径0.56～0.84ｍ、深さ0.28～0.98ｍ
　ａ黒色土と礫で埋める　ＳＫＰ1032・1053・1054・1064・1071・1079・2011・3008・3013・3034・3036・3038・3039・3046

ｂ褐色土と礫で埋める　ＳＫＰ1059・1060・2005・2008・3035・3043・3044・3047・3069・3072

４　小　直径0.32～0.47m、深さ0.12～0.63m

ａ黒色土と礫で埋める　ＳＫＰ1058・1063・1070・3002・3028・3048

ｂ褐色土と礫で埋める　ＳＫＰ1057・3062

５　杭状　直径0.28～0.3m、深さ0.22～0.48m

ａ黒色土と礫で埋める　ＳＫＰ1061・2003

ｂ褐色土と礫で埋める　ＳＫＰ1026

ＳＫＰ1071（第115図、第14表、図版39・40）はＳＱ1018中心配石の下部で検出した。ＳＱ1018中心配石の構築面である炭ラミナを除去してⅫ層上面が露出した段階で検出した。ＳＫＰ1071の埋土は、10YR2/2でⅫ層由来の礫を多く含むのに対し、炭ラミナの色調は10YR1.7/1～2/1であり、ＳＫＰ1071の埋土よりも黒いことから、この柱穴は炭ラミナ面形成以前にすでに埋まっていたと判断した。従って、本遺構はＳＱ1018とは直接関係しない。

ＳＫＰ3053・3054・3060・3061（第100・101図、第17・18表、図版31・32）は、ＳＱ3049よりも古い。全て暗褐色土と礫で埋められており、ほぼ同時期に埋まったことを示唆する。ただし、ＳＫＰ3054には大量の礫が含まれ、ＳＫＰ3053では土が多いといった差異もある。埋戻後上面が窪んでいたらしく、その面に合わせて埋没土壌（ＳＱ3049の２層）が形成されている。このことから、ＳＫＰ3053・3054・3060・3061の廃絶・埋め戻しとＳＱ3049構築には時間差があるといえる。

ＳＫＰ3078・3079・3080（第35図、第18表）は特異である。ＳＫＰ3078が埋め戻された上面に、他の２基が作られる。ＳＫＰ3078は、ＳＡ3030・3031の柱穴より古く、他の２基もＳＡ3030・3031の柱筋とごく近接していることから、柱穴列が柱の抜き取りと立て直しを繰り返したものの古い段階である可能性が高い。頻繁な柱の抜き取り・埋め戻しを示すようにＳＫＰ3078埋土と周辺のⅫ層が著しく乱れていた。また、ＳＫＰ3079・3080は柱抜き取り後直径0.5m以上の円礫を埋めており、廃絶儀礼と考えられる。上面観がＳＱ3023・3055と非常によく似ていた。

（２）遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、晩期の縄文土器片が369点（口縁部29点、胴部333点、底部７点）、2668.3ｇ（口縁部303.8ｇ、胴部2127.1ｇ、底部237.4ｇ）出土した。石器は剥片を含めて295点30098.0ｇ出土した。晩期遺構の構築面出土遺物のうち石器を26点(第138図１～140図26、第26表)と、Ⅻ層上部にくい込んで出土した石器３点（第140図27～29・第26表）を図示した。

Ⅻ層上部に食い込んで出土したのは全て石器である。大形の剥片と石核で全体的に水磨されており、氾濫原堆積物としてⅫ層を構成する礫と共に上流から流されてきた可能性が高い。土器が伴わないので堆積年代は不明であるが、大形剥片の分厚さや粗さから縄文時代前期の剥片に似ている。使用石材は、全て黒色の硬質頁岩である。

註１）　ハリス、エドワード『考古学における層位学入門』（小沢一雅訳）雄山閣223P. 1995（平成７）年

第３表　縄文時代遺構一覧（１）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKI1075（第18・19図 図版1）	MG28～MH28	—	SQ1016 SK1055 SKP1045 SKP1054 SKP1057	2.8m以上不整円形平面　壁高0.28m緩やかに立ち上がる 柱穴1基（P1　直径0.48m×0.32m深さ0.08m）	Ⅸ層由来の砂礫層で埋め戻し	晩期土器（第18図1・2、第19表）　土器片37.3g　石皿（第19図3、第24表）	縄文時代晩期
SKI1078（第20～23図 図版2・3）	MH27	—	SQ1014 SKP1052	4.2m不整円形平面　壁高0.35m　柱穴2基（P1　0.64m×0.5m楕円形平面　壁高0.22m P2　0.34m×0.22m円形平面　深さ0.22m）	Ⅸ層由来の砂礫層で埋め戻し	大洞C1式土器（第22図1～4、第19表）　晩期土器（第22図5～12、第19表）　土器片792.9g　石核転用削器（第22図13、第24表）石匙（第22図14、第24表）折断石器（第23図15・17、第24表）　円盤状石製品（第23図16、第24表）　剥片（第23図18～20、第24表）石核（第23図21、第24表）　他に折断石器1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SB3071（第24・25図 図版4・5）	NG28～NG29	—	—	長軸2.8m×短軸2.1m方形平面　柱間1間柱穴4基（P1直径0.5m深さ0.45m　P2直径0.37m深さ0.3m　P3直径0.6m深さ0.46m P4直径0.35m深さ0.35m）	Ⅻ層由来の暗褐色砂質壌土で埋め戻し	P1　土器片2g P2　晩期土器（第25図1、第19表）土器片0.7g　P3　大洞C1式土器（第25図2、第19表）　土器片3.7g　P4　晩期土器（第25図3・4、第19表）　土器片42.4g　他に剥片4点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SA1029（第26図　図版5・6）	MF27～MF28	—	SKP1079	7.6m弧状平面　柱穴4基（P1直径0.42m深さ0.34m　P2直径0.32m深さ0.06m　P3直径0.32m深さ0.2m P4直径0.5m深さ0.64m）	Ⅻ層由来褐色土　埋め戻しか	—	縄文時代晩期
SA1038（第27・28・30図　図版6～8）	ML23～ML24	—	—	7m直線平面　柱穴3基（P1直径0.56m×0.42m深さ0.76m　P2直径1.22m×1.16m深さ1.18m柱アタリ P3直径1m×0.54m深さ0.35m）	Ⅻ層を母材とする黒色土　柱抜去後埋め戻し	P1　晩期土器（第27図4、第19表）　P2　晩期土器（第27図1～3、第19表）　土器片689.8g　他に剥片1点	縄文時代晩期 SQ1037・1039・1073・SK1074と同時に機能か
SA3030（第31・32・34・36・37図 図版9～11）	NF25～NF27・NG25～NG27	SKP3078	SA3031	9.10m×4.86m弧状平面　柱穴4基（P1　2.06m以上×1.90m不整楕円形平面　深さ0.94m　底面礫層露出のため凹凸著しい P2　1.46m×1.32m不整円形平面　深さ1.34m　底面礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　柱抜去　P3　2.48m×2.08m　不整台形平面　深さ1.00m P4　2.46m×1.56m不整台形平面　深さ1.56m）	P1　黒色土と礫で埋め戻し P2　黒色土と黄褐色土の互層と礫で埋め戻し　P1とP2で埋土異なる	P1　大洞BC式土器（第36図1～3、第19表）　大洞式土器（第36図4、第19表）　土器片94.9g　敲石（第36図5、第24表）　P2　大洞BC式土器（第36図8、第19表）　大洞C1式土器（第36図6・9、第19表）　土器片178.3g　晩期土器（第36図7、第19表）　削器（第36図10、第24表）　台石（第37図11、第24表）　他に折断石器1点、RF4点、剥片18点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　SN1をSA3031と共有か ウッド・サークルか

第４表　縄文時代遺構一覧（２）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SA3031（第31・33・34・38・39図 図版9～13）	NF25～NF27・NG25～NG27	SA3030 SKP3078 SKP3079	—	7.95m×6.00m不整円形平面　柱穴7基（P1 1.66m×1.30m不整形平面　深さ1.40m 柱抜去　P2 2.52m×1.88m不整形平面　深さ1.30m 柱抜去　P3 2.06m×1.66m不整楕円形平面　深さ1.32m 柱抜去 P4 0.70m×0.62m円形平面　深さ1.16m P5　1.46m×1.22m不整楕円形平面　深さ0.84m P6　2.02m×1.98m不整円形平面　深さ1.32m　柱抜去　P7 0.90m×0.70m　深さ0.46m）　SN1 0.6m×0.48m地床炉	柱穴埋め戻し P1　黒色土と礫　P2　黒色土と礫　P3 暗褐色土と礫 P4　暗褐色土 P5　暗褐色土 P6　暗褐色土と礫　P7　暗褐色土と礫	P1　大洞BC式土器（第38図1・4～8、第19表）　大洞C1式土器（第38図2・3・9～12、第19表）　晩期土器（第38図13～16、第19表）　土器片743.9g　剥片（第38図17、第24表）　削器（第38図18、第24表）石錐（第38図19、第24表）　異形石器（第38図20、第24表）　石核（第39図21、第24表）P2　大洞BC式（第39図22、第19表）　大洞C1式（第39図23、第19表）　土器片242.5g　P3　大洞BC式土器（第39図25、第19表）　晩期土器（第39図24・26～28、第19表）垂飾（第39図29、第27表）　土器片304.5g　石鏃（第39図30、第24表）磨製石斧（第39図31、第24表）　剥片（第39図32、第24表）円盤状石製品（第39図33、第24表）　P4　土器片13g　P5　大洞C1式（第39図34～36、第19表）　土器片64g　P6　大洞C1式（第39図37・38、第19表）　大洞BC式（第39図39～42、第19・20表）　大洞式（第39図43、第20表）　土器片324.9g　削器（第39図44、第24表）　P7　土器片30g SN1大洞式（第39図45、第20表）　土器片18.0g　他に削器3点、石核転用削器1点、折断石器3点、RF10点、UF6点、石核5点、剥片50点、チップ13点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　SN1をSA3030と共有か ウッド・サークルか
SR1067（第41図 図版13）	MJ27	—	—	0.18m円形平面　土器直径に密着　深さ0.1m　逆位埋設　削平のため底部欠損	土器内部堆積土はⅫ層由来暗褐色砂	大洞C1式鉢（第41図1、第20表）　晩期土器（第41図2・3、第20表）　土器片238.2g	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SR3081（第42図）	NG23	—	—	0.5mの範囲に土器片集中　1m不整円形平面の範囲に土器散布　水田耕作による削平と撹乱により掘り込みなし	Ⅻ層由来の礫混じり暗褐色土	晩期土器（第42図1～11、第20表）　土器片143.8g	縄文時代晩期　遺物集中地点か
SQ1005（第43図 図版14）	MF24～MF25	—	—	3.6m×3.3m円形平面　0.7mの礫が外形に配置　中央配石直径1.6m略石囲炉状　高さ0.16m　3d類	埋土なし　配石はⅫ層礫層上面に構築	—	縄文時代晩期
SQ1006（第44～46図 図版15）	MF25～MF26・MG25～MG26	—	—	直径0.7mの礫を配置して5.84m×4.7m楕円形平面の外形を造る　内側に3.6m円形平面に礫を配置　中央配石 0.75m×0.64m石囲炉状　中央配石を構成する礫は直径0.2mと0.1mのものが交互に配置される　高さ0.14m　3d類	埋土なし　配石はⅫ層礫層上面に構築	晩期土器（第46図1・2、第20表）　土器片18.5g　他にRF・UF・剥片1点	縄文時代晩期

第５表　縄文時代遺構一覧（３）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ1007（第47・48・51図　図版16）	MF26～MF27	－	SK1025 SKP1026 SKP1032	3.26m×2.68m楕円形平面　高さ0.18m　直径0.5～0.7mの礫を配置　1b類	埋土なし　X・XI層上に構築	晩期土器（第48図1、第20表）　土器片19.5g	縄文時代晩期 SQ1008・1009と外形構成礫を共有
SQ1008（第47・51図　図版16）	MF26～MF27	－	－	1.4m×1.32m円形平面　高さ0.2m　直径0.15mの円礫を円形配置　1b類	埋土なし　X・XI層上に構築	－	縄文時代晩期 SQ1007・1009と外形構成礫を共有　礫は立石状で内側に突き刺さるように配列
SQ1009（第49～51図　図版16・17）	MF27	SKP1079	SKP1026	2.6m×1.84m不整円形平面　高さ0.28m　直径0.5～0.7mの礫を円形配置　1b類	埋土なし　X・XI層上に構築	石核（第50図1、第24表）　他に折断石器1点　UF1点	縄文時代晩期 SQ1007・1008と外形構成礫を共有　内部から直径0.3m以上の大形礫を除去か
SQ1010（第52～54図　図版17）	MH23	－	－	4.76m×4.5m円形平面　高さ0.26m　中心配石1.4m円形平面　直径0.2mの礫を配置　1b類	埋土なし　XIII層上に構築	晩期土器（第54図1・2、第20表）　土器片7.9g　他に剥片2点	縄文時代晩期　内部から直径0.3m以上の大形礫を除去か
SQ1011（第55図　図版17）	MG24	－	－	4.2m×3.72m不整円形平面　高さ0.14m　中央部直径1mに礫が集中する　2b類	埋土なし　XIII層上に構築	－	縄文時代晩期　内部から直径0.3m以上の大形礫を除去か
SQ1012（第56図）	MG25～MH25	－	－	4.4m×3.34m不整楕円形平面　高さ0.18m　外周に直径0.7～1mの礫をまばらに配置　中心配石1.25m×1.2mに直径0.1～0.3mの円礫を配置　1b類	埋土なし　XIII層上に構築	－	縄文時代晩期　西側を暗渠で破壊
SQ1013（第57・58図　図版18）	MH25～MH26	－	SQ1031	4.12m×2.38m楕円形平面　高さ0.26m　中心配石2.2m×1.92m　直径0.3mの礫を配置　隣接して南側配石1.2m円形平面　1b類	埋土なし　IX・XIII層上に構築	大洞C1式土器浅鉢（第58図1・2、第20表）晩期土器（第58図3,第20表）土器片33.3g　他にRF1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　2基の円形配石が一体化　SQ1031も同一か　中心配石に利用される礫が他よりも大きい　大小が数個おきに配置される
SQ1014（第59・60図　図版2・3）	MH26～MH27	SKI1078 SK1051	－	1.68m×1.24m楕円形平面　高さ0.2m　外周に直径0.5mの礫をまばらに配置　中央に直径0.3mの礫を置き周辺に放射状に礫を配置　SK1　1.6m×1.3m円形平面　深さ0.42m　断面袋状　底面鍋底状　壁と底面との境は明瞭に屈曲　1a類	SK1　黒褐色土～黒色土埋積　円礫大量に含む　埋め戻し	大洞C1式土器（第60図1、第20表）　晩期土器（第60図2、第20表）　土器片139.9g　UF（第60図4、第24表）　削器（第60図3・5、第24表）　他に削器3点、折断石器4点、RF3点、UF1点、石核2点、剥片20点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　SK1を埋め戻し後、連続して構築
SQ1015（第61・62図　図版18・19）	MG28	－	SQ1023	配石2.48m×2.2m円形平面　高さ0.4m　下部土坑　1.06m×0.94m深さ0.96m　底面鍋底　礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　2a類	黒色土・礫で埋め戻し	大洞C1式深鉢（第62図1、第20表）　晩期土器（第62図2、第20表）　土器片591.1g　剥片（ベンガラ素材　第62図3、第24表）　他に剥片1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）

第６表　縄文時代遺構一覧（４）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ1016（第63・64図 図版19・20）	MH28	SKI1075 SKP1054	—	配石3m×2.64m円形 平面　高さ0.6m　下部土坑1.92m×1.44m 深さ0.96m　底面礫層露出で凹凸　底面との境は明瞭に屈曲 壁はやや外開き、直線的に立ち上がる 2a類	黒色土・礫で埋め戻し	晩期土器（第64図1～5　5は香炉形土器、第20表）　土器片93.9g　楔形石器（第64図6、第24表）石核（第64図7～9、第24表）　他にRF3点、削器3点、石核転用削器1点、敲石1点、折断石器2点、剥片5点	縄文時代晩期
SQ1017（第67・68図 図版20）	MI24	SQ1018P2	—	1.92m×1.14m楕円形 平面　高さ0.18m 1b類	黒褐色土　自然堆積か	剥片1点	縄文時代晩期 SQ1018P2埋め戻し後、連続して構築か　炭化物散布面上に構築される　SQ1018炭化物ラミナ面と共通
SQ1018（第65～74図 図版20～23・46）	MG23～MG26・MH22～MH26・MI22～MI26・MJ22～MJ26・MK23～MK26	SKP1070 SKP1071	SQ1017 SQ1019 SQ1047 SKP1060	環状配石　外帯外側直径20.5m×18.6m内側直径6m　ただし、中心配石から北東にN-0～90°-Wの弧状1/4、長さ12m幅5m高さ0.5mは人為的積み上げ、残りは自然地形を利用　中心配石1.96m×1.6m SB1 4.8m×4.26m （P1 0.94m×0.8m 深さ0.8m P2　1.38m×0.98m 深さ0.86m P3　0.8m×0.54m 深さ0.94m P4　0.55m×0.5m 深さ0.86m）　3a類	XⅢ層由来の礫を人為的に積む　堆積単位クラスタ1～18　中心配石は炭化物ラミナ上に構築しクラスタ8に埋められる中心配石とクラスタ2～7・11・12・14・18の新旧は確定できず SQ1019・1047との新旧も確定できず SB1の柱穴は黒色土と礫で埋める　P2周辺にも炭化物散布域あり	大洞BC式（第69図1・2・6、第20表）大洞C1式（第69図3～5、第20表）土器片1129.5g 石鏃（第69図7・8、第24表）土掘具（第69図9、第24表）　削器（第69図10～13、第24表）石核転用削器（第69図14～16、第24表）石箆（第69図17、第24表）礫石器（第70図18～21、第24表）　台石（第70図22～24、第24表）敲石（第70図25・26、第24表）石皿（第70図27～第71図29、第24表）　磨石（第71図30、第25表）　石棒（第71図31、第25表）円盤状石製品（第71図32、第25表）　RF（第71図33・35、第25表）　折断石器（第71図34・36、第25表）UF（第71図37、第25表）　剥片（第71図38・39、第25表）　石核（第71図40～第72図46、第25表）　有孔石製品（第72図47、第25表、図版46-8）　石刀（第72図48～57、第25表、図版46-7）P1　晩期土器（第73図58～70、第20表）　土器片229.9g　削器（第73図71、第25表）剥片（第73図72、第25表）　P2　十腰内4～5式（第74図73、第20表）　晩期土器（第74図74～78、第20表）　土器片78.7g　石核（第74図79、第25表）他に石鏃1点、削器4点、石核転用削器2点、折断石器6点、敲石2点、RF5点、UF7点、石核2点、剥片43点、チップ5点　P4　土器片27g	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期） 外帯内法に大形礫を配置し土留めとする　中心配石の北西側P4上面から石刀が折られて出土　SQ44・76・2007と共通　本来はP4上部に埋納か　環状配石を形成する
SQ1019（第75・76図 図版24）	MJ26	SQ1018 SQ1065	—	2.98m×2.2m楕円形 平面　高さ0.24m 1b類	SQ1018クラスタ2が崩落した砂礫層	晩期土器（第76図1、第20表）　土器片5.3g　他に剥片1点	縄文時代晩期 SQ1018外帯北側の礫を除去して構築　SQ1047と共通

第７表　縄文時代遺構一覧（５）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ1020（第77図 図版24）	MF25	SQ1021	－	1.44m×1.16m楕円形 平面　高さ0.22m 2b類	Ⅻ層由来の礫	－	縄文時代晩期　直径0.7mの礫が造る直径2.5～3mの円形範囲内部から直径0.3m以上の円礫を除去 SQ1021構築後連続して構築か
SQ1021（第77図 図版24・25）	MF25	－	SQ1021	1.18m×0.94m楕円形 平面　高さ0.18m 2b類	Ⅻ層由来の礫	－	縄文時代晩期　直径0.7mの礫が造る直径2.5～3mの円形範囲内部から直径0.3m以上の円礫を除去
SQ1022（第78図 図版24・25）	MF25	SQ1005	－	2.8m×2m楕円形平面 高さ0.18m　2b類	Ⅻ層由来の礫	－	縄文時代晩期　直径0.7mの礫が造る直径2.5～3mの円形範囲内部から直径0.3m以上の円礫を除去 SQ1005の外周を区画する礫の南側に作られる
SQ1023（第61図 図版25）	MG28	SQ1015 SKP1040	－	配石1.2m×1.06m楕円形平面　高さ0.2m 直径0.2～0.3mの礫が5点、赤い礫を中心に配置　下部土坑 0.66m×0.54m深さ0.22m　2a類	Ⅸ層由来の砂礫層で埋め戻し　SQ1015とは間層を挟まない	－	縄文時代晩期中葉 SQ1015と連続して構築か
SQ1024（第79～82図 図版25・26）	MI29～MJ29	SKP1063	－	4.52m×4.5m円形平面　高さ0.80m　3b類	Ⅻ層由来の礫を人為的に積む	大洞C1式土器（第81図1～3、第20表）　大洞式土器（第81図4～6、第21表）　晩期土器（第81図7～10、第21表）　土器片441.4g　石篦（第82図11、第25表）　敲石（第82図12、第25表）　剥片（第82図13、第25表）　石核（第82図14・15、第25表）　アスファルト（第82図16、第27表）　他に石核転用削器1点、折断石器2点、UF1点、剥片6点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SQ1031（第57図 図版17）	MH26	SQ1013	－	1.88m×1.6m楕円形 平面　高さ0.24m 直径0.07～0.1m礫を直径0.15～0.3mの円礫で囲まれた範囲に集石　2b類	埋土なし　Ⅸ・Ⅻ層上に構築	－	縄文時代晩期 SQ1013と一体化

第８表　縄文時代遺構一覧（６）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ1036（第83～85図 図版26・27）	MG28～MG29・MH28～MH29	SK1049 SKP1053	－	配石4.54m×3.22m楕円形平面　高さ0.4m 石皿2点を含む8点の大形礫が連続して弧状に立つ　直径0.5mの石皿の横には直径0.3mの石皿、次に0.4mの礫と大小の礫を交互に配置する 石皿・礫ともに長軸方向を上下とし、石皿は磨面を外へ向け、礫は扁平な面を内外に向ける　3d類	Ⅹ・Ⅺ層由来の礫	台石（第85図1、第25表） 石皿（第85図2、第25表） 石核（第85図3～4、第25表） 他に削器1点、RF1点、剥片2点	縄文時代晩期
SQ1037（第27～30図 図版7・8）	ML23	－	－	下部土坑1.2m×1.0m 不整円形平面　深さ0.63m　底面は礫層にあたり凹凸　壁は直線的に立ち上がる 立石0.58m×0.3mで0.33m地上に露出 3e類	Ⅻ層由来の砂礫混じり暗褐色砂質壌土で埋め戻し	晩期土器（第27図5、第19表）　土器片179.2g	縄文時代晩期 SA1038・SQ1039・1073・SK1074と同時に機能か　立石を持つ
SQ1039（第27～30図 図版7・9）	ML23	－	－	立石0.46m×0.34m 高さ0.3m　下部土坑1.08m×0.9m円形平面　深さ0.34m　底面礫層露出するが平坦　壁との境は明瞭に屈曲　壁は外開きに立ち上がる　3e類	黒褐色土～褐色土で埋め戻し	大洞C1式土器（第27図6、第19表）土器片6.0g　石核（第27図8、第24表）	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期） SA1038・SQ1037・1073・SK1074と同時に機能か　立石を持つ
SQ1047（第86図 図版24・27）	MJ26	SQ1018	SKP1060	2.18m×1.62m楕円形平面　高さ0.2m　直径0.2mの礫を不整円形に配置　1b類	SQ1018クラスタ3が崩落した砂礫層	－	縄文時代晩期 SQ1018外帯北側の礫を除去して構築 SQ1019と共通
SQ1065（第88・90・91図　図版27・28）	MI26～MJ26	－	SQ1019 SQ1066	配石　上面に石皿破損品を立てる　高さ0.12m　下部土坑1.65m×1.14m不整円形平面　深さ0.56m 底面に巨礫露出し凹凸著しい　壁との境は不明瞭　2a類	Ⅻ層由来の砂礫で埋め戻し	大洞C1式土器（第90図1～6、第21表） 晩期土器（第90図7～第91図35、第21表）　土器片1327.5g　石鏃（第91図36、第25表） 台石（第91図37、第25表）　石皿（第91図38、第25表）他に削器1点、敲石1点、石核3点、剥片14点、チップ6点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　上面に遺物集中

第９表　縄文時代遺構一覧（７）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ1066（第88・89・92図　図版27・28）	MJ26	SQ1065	－	配石　石皿と直径0.3mの礫を花弁状に0.66m×0.6mの範囲に配置　高さ0.08m 下部土坑 1.24m×0.7m楕円形平面　深さ0.62m 底面に礫層露出　凝灰岩の脆い岩盤をえぐり底面とする　掘りやすいところを選択しているため底面は段を持つ漏斗状 壁と底面の境は不明瞭　壁は外開きに緩いカーブを描きながら立ち上がり一部は袋状　1a類	Ⅻ層由来の砂礫で埋め戻し	大洞C1式土器（第92図1、第21表）　晩期土器（第92図2～18、第21表）　土器片144.3g　石鏃（第92図19、第25表）　削器（第92図20・21、第25表）　折断石器（第92図22・23、第25表） 石皿（第92図24、第25表）　他に礫石器1点、折断石器2点、RF2点、石核1点、剥片7点、チップ1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　下部土坑埋め戻し後上面に配石
SQ1073（第27～30図　図版7～9）	MK23～ML23	－	－	配石2.7m×2.48m円形平面　高さ0.24m 下部土坑 0.92m×0.84m円形平面　深さ0.46m　2a類	黒色土で埋め戻し	晩期土器（第27図7、第19表）　土器片10g　他にRF2点	縄文時代晩期 SA1038・SQ1037・1039・SK1074と同時に機能か　直径0.5～0.8mの大形礫（Ⅻ層由来）が上面に露出して直径3m程度の円形を造る地点を選択
SQ2007（第93・94図　図版28）	MP23～MQ23	SKP2006	－	配石1.72m×1.16mの範囲を4点の礫で囲む 中央に 0.38m×0.28mと 0.34m×0.12mの立石 下部土坑 0.62m×0.54m　深さ0.22m　丸底　底面のカーブから壁へ連続　3e類	黒褐色土で埋め戻し	土器片71.6g 石棒（第94図6、第25表）	縄文時代晩期　下部に幅2m深さ0.5mの埋没沢があり、旧地形が凹地となった地点を選択 配石の西から石棒出土 SQ44・76・1018中心配石と共通する SKP2006と連続して構築か　柱抜去後立石を据える
SQ2009（第95図　図版29）	MT29	－	－	1.18m×1.06m円形平面　高さ0.56m　1b類	黄褐色土～暗褐色土で埋め戻し	折断石器（第95図1、第25表）	縄文時代晩期
SQ3003（第96・97図　図版29）	NA25	SQ3005	－	配石2.32m×1.36m円形平面　高さ0.08m 下部土坑 0.86m×0.62m　深さ0.15m　丸底　壁との境は不明瞭　1a類	Ⅸ層由来暗褐色土と礫で埋め戻し	RF2点、剥片2点	縄文時代晩期 SQ3005の大形礫を外周に取り込んで構築
SQ3004（第96・97図　図版29）	NA26	SQ3005	－	配石1.1m×1.04m　高さ0.1m　下部土坑 0.82m×0.8m円形平面　深さ0.3m　丸底 壁との境はやや明瞭に屈曲　壁はやや外開きに立ち上がる　1a類	Ⅸ層由来暗褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期 SQ3005の大形礫を外周に取り込んで構築
SQ3005（第96・97図　図版30）	NA26	－	SQ3003 SQ3004	配石1.5m×1.47m円形平面　高さ0.1m 下部土坑 1.22m×0.88m　深さ0.26m　平底　壁との境は明瞭に屈曲 壁は外に開く　1a類	Ⅸ層由来黒褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期　下部土坑に粗割礫0.76mを入れる

第10表　縄文時代遺構一覧（８）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ3023（第98図 図版30）	ND26	SKP3047	－	配石1.2m×1.14m円形平面　高さ0.34m 直径0.75m×0.65m 高さ0.5mの円礫を入れ、周囲を直径0.2～0.3mの円礫で囲う下部土坑 1.4m×1.18m円形平面　深さ0.4m　丸底　底面のカーブから連続して立ち上がる 2a類	黒褐色土～にぶい黄褐色土で埋め戻し	大洞BC式土器（第98図1、第22表）　大洞式土器（第98図2、第22表）晩期土器（第98図3～6、第22表）　土器片35g　RF1点、剥片4点	縄文時代晩期中葉
SQ3049（第99・101図 図版31）	ND26～NE26	SKP3053 SKP3054 SKP3060 SKP3061	－	敷石3.85m×1.92m不整形平面　高さ0.16m　盛土上面に敷石　敷石を中心に直径約8mは礫分布稀薄、さらに外側直径16mまでは礫層が密に表れる　3c類	黒褐色土～にぶい黄褐色土で盛土	大洞式土器（第99図1～6、第22表）晩期土器（第99図7、第22表）　土器片60.2g　磨製石斧（第99図8、第25表）削器（第99図9、第25表）石皿（第99図10、第25表）他に剥片1点	縄文時代晩期　敷石に石皿が1点、凹みのある自然石が1点使われる　下部柱穴埋没と盛土形成には時間差あり敷石を中心として礫を抜き取り、礫分布が疎となる範囲と密になる範囲が同心円状となる環状配石様の景観を創出しており「西部環状配石」とする
SQ3055（第102図 図版30）	NC27～ND27	－	－	配石1.2m×1.06m円形平面　高さ0.42m 直径0.94m×0.6m 高さ0.7mの礫を入れ、周囲を直径0.2～0.3mの円礫で囲う下部土坑 1.32m×1.08m　深さ0.34m　鍋底　壁との境はやや明瞭に屈曲　2a類	黒色土～黒褐色土と礫で埋め戻し	土器片1g 礫石器（第102図1、第26表）	縄文時代晩期
SQ43（第103・104図　図版32）	MF23～MF24	SQ44	－	4.92m×4.7m楕円形平面　中心配石 0.77m×0.64m石囲炉状　中心配石を構成する礫は直径0.25～0.3m　高さ0.14m中心配石下部土坑 0.9m×0.88m円形平面　深さ0.16m　丸底　底面のカーブから連続して壁が立ち上がる　3d類	中心配石は平成13年調査済み　下部土坑は暗褐色土で埋め戻し	晩期土器（第104図1～4、第22表）　土器片19.4g	縄文時代晩期　外周はSQ44と共有　中心配石のみ造り替えか
SQ44（第103・104図　図版32）	MF23～MF24	－	SQ43	4.92m×4.7m楕円形平面　中心配石 0.74m×0.7m石囲炉状　中心配石を構成する礫は直径0.25～0.3m　高さ0.18m 中心配石下部土坑 1.08m×0.78m楕円形平面　深さ0.48m 丸底　底面のカーブから連続して壁が立ち上がる　3d類	中心配石は平成13年調査済み　下部土坑は暗褐色土で埋め戻し	－	縄文時代晩期　外周はSQ43と共有　中心配石のみ造り替えか

第11表　縄文時代遺構一覧（９）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SQ275（第105図 図版32）	MP23～MP24	－	－	1.46m×1.2m円形平面　深さ0.34m　2b類	地表に露出 Ⅻ層に直接構築	晩期土器（第105図1、第22表）　土器片12.9g　他にUF1点	縄文時代晩期　下部に幅2m深さ0.5mの埋没沢があり、旧地形が凹地となった地点を選択
SKF1027（第106図 図版33）	MI28	－	－	0.92m×0.8m円形平面　深さ0.5m　上端から0.15m下に狭窄部を持ち断面はフラスコ状を呈する　平底　底面に礫層が露出　壁との境界は明瞭に屈曲する	暗褐色土で埋め戻し　グライ化	－	縄文時代晩期
SK1025（第50・51図 図版33）	MF27	SQ1007	－	0.88m円形平面　深さ0.3m	黒色土～暗褐色土で埋め戻し	－	縄文時代晩期　中央に高さ0.4m礫を立石状に置く
SK1049（第84・85図 図版33）	MH28	－	SQ1036	0.98m×0.8m円形平面　深さ0.46m　丸底　壁との境不明瞭で底面のカーブから連続して立ち上がる壁は外開き	黒色土とX・XI層由来の礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SK1050（第106図 図版34）	MF26	－	－	0.94m×0.76m楕円形平面　深さ0.18m　底面皿状　礫層露出し凹凸　壁との境は不明瞭で、底面から連続して立ち上がる	黒色土で埋め戻し　中位に礫を入れる	－	縄文時代晩期 SQ1073・SK1074と同様直径0.4m程度の大形礫で囲まれた内部に土坑が造られる
SK1055（第106図 図版34）	MH28	SKI1075	SKP1045	0.92m×0.8m以上不整楕円形平面　深さ0.16m	暗褐色土～褐色土埋積 XII層由来の砂礫層で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SK1074（第28～30図 図版7・9）	MK23	－	－	1.34m×1.16m円形平面　深さ0.26m	黒色土埋積 自然堆積か	－	縄文時代晩期 SA1038・SQ1037・1039・1073と同時に機能か　直径0.4mの大きい石で囲まれた範囲あり内側に土坑を構築する SQ1073・SK1050と似る
SK2010（第108図 図版34）	MR29～MS29	－	－	2.00m×1.84m円形平面　深さ0.56m　丸底　壁との境は不明瞭　底面のカーブから連続して立ち上がる	暗褐色土で埋め戻し	大洞C1式土器（第108図1、第22表）　晩期土器（第108図2、第22表）土器片38.5g他にUF1点、剥片2点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SK2012（第109図 図版34）	MS24～MT25	－	－	1.1m×0.74m楕円形平面　深さ0.42m　鍋底　壁との境はやや不明瞭	暗褐色土で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SK3010（第109図 図版35）	NB25	－	－	0.94m×0.72m楕円形平面　深さ0.18m	暗褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期

第12表　縄文時代遺構一覧（10）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SK3015（第109図 図版35）	NC25	—	—	1.5m×0.86m不整楕円形平面　深さ0.14m　平底　壁との境はやや不明瞭　内部に0.6m×0.5mの扁平礫を埋める	暗褐色土埋積埋め戻しか	—	縄文時代晩期
SK3037（第109図 図版35）	NA24	—	—	0.88m×0.86m円形平面　深さ0.52m　平底　底面に礫層露出	黒色土で埋め戻し	剥片2点	縄文時代晩期か
SKP1026（第49・51図）	MF27	SQ1009	—	0.26m円形平面　深さ0.28m　5b類	黒褐色土～黒色土で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1032（第47・48・51図　図版16・35）	MF27	SQ1007	—	0.6m不整円形平面　深さ0.72m　底面礫層露出のため凹凸　壁との境は明瞭に屈曲　壁はほぼ垂直に立ち上がる　3a類	黒色土～暗褐色土で埋め戻し　X・XI層由来の礫含む	石鏃（第48図2、第24表）	縄文時代晩期　上面に直径0.7mの礫が乗る
SKP1040（第61図 図版35）	MG28	—	SQ1023	0.94m×0.86m不整円形平面　深さ0.62m　底面丸底礫層露出のため凹凸　壁との境は明瞭に屈曲　柱痕跡直径0.26m　2a類	IX層由来の砂礫層で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1041（第110・111図　図版36）	MG28	—	—	1.24m×0.98m楕円形平面　深さ1.1m　平底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁はほぼ垂直に立ち上がる　柱抜去　1a類	黒色土・黄色土ブロックと礫で埋め戻し	晩期土器（第111図1～5、第22表）土器片74.9g　他に剥片1点	縄文時代晩期
SKP1043（第112図 図版36）	MG26	—	—	0.96m×0.76m楕円形平面　深さ0.74m　底面に礫層露出　壁との境は不明瞭　柱抜去　2b類	暗褐色土と礫で埋め戻し　グライ化	大洞B2式土器（第112図1・2、第22表）　晩期土器（第112図3・4、第22表）　土器片58.4g	縄文時代晩期前葉（大洞B2式期）
SKP1045（第106・107図　図版36・37）	MH28	SKI1075　SK1055	SKP1057	1.58m×1.12m円形平面　深さ1.12m　平底　底面礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁はほぼ直線的に立ち上がる　柱抜去　1a類	黒色土～黒褐色土と礫で埋め戻し　5・6層は柱痕跡	大洞BC式（第107図1・2、第22表）　大洞C1式（第107図3、第22表）　晩期土器（第107図4～13、第22表）　土器片165.9g	縄文時代晩期中葉（大洞BC式期）
SKP1052（第113図 図版37）	MH27	SKI1078	—	1.20m×0.84m楕円形平面　深さ0.70m　底面に礫層露出し凹凸　壁との境は明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　柱痕跡直径0.20m　2b類	暗褐色土と礫で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1053（第84・85図 図版37）	MG29	—	SQ1036	0.52m円形平面　深さ0.28m　丸底　底面に礫層露出　壁との境は不明瞭　底面から壁へ連続する　3a類	IX層由来の砂礫層で埋め戻し	—	縄文時代晩期

第13表　縄文時代遺構一覧（11）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP1054（第18・19図 図版37）	MH28	SKI1075	SQ1016	0.78m×0.70m不整形 平面　深さ0.55m 底面礫層露出し凹凸が激しい　壁は直線的に立ち上がる　礫の隙間を掘り込む 3a類	埋め戻し　Ⅻ～ⅩⅢ層を由来とする砂礫層	晩期土器（アスファルト付着　第19図4、第19表）　磨製石斧（第19図5、第24表）土器片9g　他にUF1点、剥片6点	縄文時代晩期　底面に巨礫露出
SKP1057（第106図 図版37）	MH27	SKI1075 SKP1045	—	0.32m×0.3m円形平面　深さ0.3m　丸底 底面のカーブから連続して壁が垂直に立ち上がる　4b類	ⅩⅢａ層で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1058（第67・68図 図版38）	MH24	—	SQ1017	0.4m×0.3m不整楕円形平面　深さ0.22m 底面に礫層露出　丸底　底面のカーブから壁へ連続し外開きに立ち上がる　4a類	Ⅸ層由来の礫と黒褐色土で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1059（第67・68図 図版38）	MJ25	SQ1018	—	0.62m×0.44m楕円形 平面　深さ0.52m 鍋底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　3b類	Ⅻ層由来の褐色砂で埋め戻し　腐植含まず	—	縄文時代晩期
SKP1060（第86・87図 図版38）	MJ26	SQ1018 SQ1047	—	0.86m×0.72m円形平面　深さ0.46m　鍋底　壁との境は明瞭に屈曲　壁はやや外開きに直線的に立ち上がる　柱痕跡直径0.2m　3b類	Ⅻ層由来の褐色砂で埋め戻し　腐植含まず	土掘具（第87図1、第25表）	縄文時代晩期
SKP1061（第113図 図版38）	MJ25	SQ1018	—	0.3m円形平面　深さ0.22m　平底　壁との境は明瞭に屈曲 5a類	SQ1018の砂礫土で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1062（第114図 図版39）	MK25～MJ25	SQ1018	—	1.68m×1.44m楕円形 平面　深さ0.6m　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁は外開きに直線的に立ち上がる　柱抜去　1b類	Ⅻ層由来の褐色砂で埋め戻し　腐植含まず	—	縄文時代晩期
SKP1063（第114図 図版39）	MI29	—	SQ1024	0.36m×0.32m円形平面　深さ0.24m　平底　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　4a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	—	縄文時代晩期
SKP1064（第114図 図版39）	MG27	—	—	0.80m×0.56m円形平面　深さ0.48m　中位に狭窄部　平底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　柱痕跡直径0.2m　柱抜去　3a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	晩期土器（第114図1、第22表）　土器片8.4g　剥片（第114図2、第26表）	縄文時代晩期

第14表　縄文時代遺構一覧（12）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP1070（第115図 図版39）	MI25	－	SQ1018	0.35m×0.28m楕円形 平面　深さ0.12m 平底　壁との境は明瞭に屈曲　4a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP1071（第115図 図版39・40）	MI25	－	SQ1018中心配石	0.52m×0.5m円形平面　深さ0.31m　丸底　底面に礫層露出 壁との境は明瞭に屈曲　3a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP1079（第49・51図 図版17）	MF27	SA1029P4	SQ1009	0.78m×0.68m不整円形平面　深さ0.46m 丸底　壁との境は明瞭に屈曲　壁はほぼ垂直に立ち上がる 3a類	黒褐色土～褐色土で埋め戻し	RF1点、剥片1点	縄文時代晩期
SKP2001（第116図 図版40）	MK29～ ML29	－	－	1.2m×1.07m楕円形 平面　深さ0.44m 平底　壁との境は明瞭に屈曲　柱痕跡直径0.34m　柱抜去 片側を斜めに掘り込む　2a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞BC式注口土器（第116図1、第22表） 土器片17ｇ	縄文時代晩期中葉（大洞BC式期）
SKP2002（第117図 図版40）	MK28～ ML28	－	－	0.94m×0.8m円形平面　深さ0.8m　柱抜去　2a類	黒褐色土で埋め戻し	晩期土器（第117図1・2、第22表）　土器片8.5ｇ 他に剥片2点	縄文時代晩期
SKP2003（第117図）	MK28～ ML28	－	－	0.30m×0.28m円形平面　深さ0.48m　丸底　壁は垂直に立ち上がる　杭か　5a類	黒色土	晩期土器（第117図3、第22表）　土器片14.8ｇ	縄文時代（江戸時代か）
SKP2005（第118図 図版40）	MP23	－	－	0.74m×0.7m円形平面　深さ0.62m　平底　底面に礫層露出 壁との境は明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　3b類	暗褐色土と礫で埋め戻し	削器（第118図1、第26表）	縄文時代晩期　下部に幅2m深さ0.5mの埋没沢があり、旧地形が凹地となった地点を選択 SKP2006・2008と組み合うか
SKP2006（第93・94図 図版41）	MP23	－	SQ2007	1.42m×0.98m楕円形 平面　深さ0.56m 柱痕跡0.58m×0.46m 深さ0.64m　1a類	黒褐色土～暗褐色土と礫で埋め戻し	晩期土器（第94図1～5、第21表）　土器片10ｇ	縄文時代晩期 SQ2007と連続して構築か　下部に幅2m深さ0.5mの埋没沢があり、旧地形が凹地となった地点を選択SKP2005・2008と組み合うか
SKP2008（第119図 図版41）	MQ23	－	－	0.78m×0.70m楕円形 平面　深さ0.41m 底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲 壁はややオーバーハング　3b類	暗褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期　下部に幅2m深さ0.5mの埋没沢があり、旧地形が凹地となった地点を選択 SKP2005・2006と組み合うか
SKP2011（第120図）	MR28	－	－	0.61m×0.50m円形平面　深さ0.38m　柱抜去　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞C1式鉢（第120図1、第22表）　晩期土器（第120図2・3、第22表）　土器片54.4ｇ	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）

第15表　縄文時代遺構一覧（13）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP3002（第121図 図版41）	NA25	－	－	0.42m×0.31m円形平面　深さ0.62m　鍋底　壁との境はやや明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　4a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞Ｃ１式鉢（第121図1、第22表）　土器片13.3ｇ　石核転用削器（第121図2、第26表）　石核（第121図3、第26表）　他に剥片2点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SKP3008（第122図 図版41）	NA25	－	SKP3048	0.68m×0.60m円形平面　深さ0.74m　平底　壁との境は明瞭に屈曲　北壁は垂直、南壁は上端から0.4mで段を作る　柱抜去　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	剥片2点	縄文時代晩期
SKP3013（第122図 図版41）	NB26	－	－	0.60m×0.48m楕円形平面　深さ0.2m　鍋底　底面に礫層露出　壁との境はやや明瞭に屈曲　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	剥片2点	縄文時代晩期
SKP3018（第122・123図　図版42）	NC27	－	－	0.95m×0.86m円形平面　深さ0.66m　鍋底　底面に礫層露出　壁との境はやや明瞭に屈曲　壁は外開きに立ち上がる　柱抜去　2a類	黒褐色土～暗褐色土と礫で埋め戻し	大洞式台付鉢（第123図1、第22表）　土器片21.1ｇ　礫石器（第123図2、第26表）　剥片1点	縄文時代晩期
SKP3026（第122図 図版42）	ND27	－	－	0.94m×0.77m楕円形平面　深さ0.62m　丸底　東側の壁との境は明瞭に屈曲　柱抜去　2a類	黒褐色土～暗褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3028（第124図 図版42）	ND27	－	－	0.45m×0.34m円形平面　深さ0.23m　丸底　4a類	黒褐色土で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3034（第124・125図　図版42）	NA24	－	－	0.84m×0.81m円形平面　深さ0.80m　底面に礫層露出し凹凸　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　柱抜去　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞Ｃ１式鉢（第125図1、第23表）　大洞式土器浅鉢（第125図4、第23表）　大洞式土器壺（第125図5、第23表）　晩期土器（第125図2・3、第23表）　土器片58.7ｇ　石錐（第125図6、第26表）　UF（第125図7、第26表）　剥片（第125図8、第26表）　他に石核転用削器1点、剥片1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SKP3035（第124図 図版42）	NE28	－	－	0.56m×0.46m円形平面　深さ0.42m　丸底　壁との境は不明瞭　底面のカーブから連続して壁となる　柱抜去　3b類	褐色土と礫で埋め戻し	剥片1点	縄文時代晩期
SKP3036（第126図 図版43）	NB23	－	－	0.62m×0.59m不整円形平面　深さ0.43m　丸底　壁との境は不明瞭　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	チップ1点	縄文時代晩期

第16表　縄文時代遺構一覧（14）

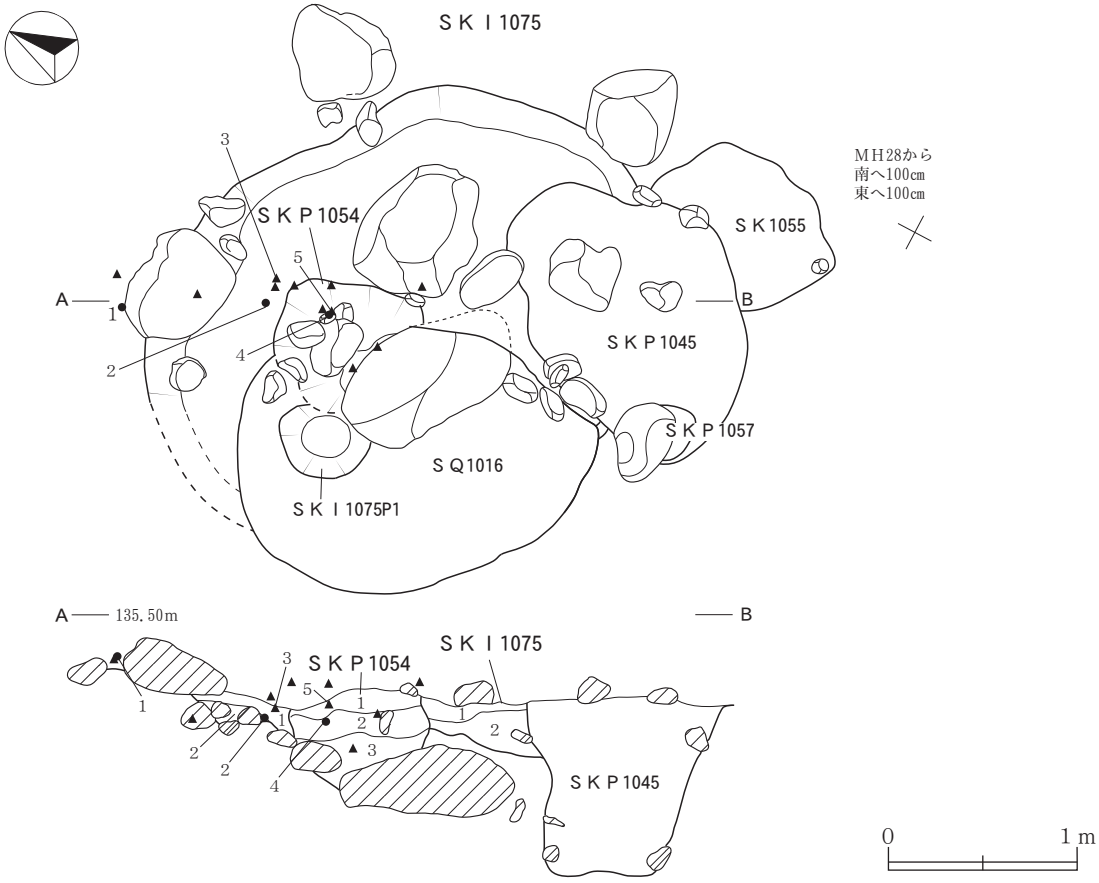
遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP3038（第126図 図版43）	NA24～NB24	－	－	0.62m×0.47m楕円形 平面　深さ0.43m 鍋底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞式土器壺（第126図1、第23表）　土器片9.9ｇ	縄文時代晩期
SKP3039（第126図 図版43）	NA25	－	－	0.65m×0.48m楕円形 平面　深さ0.35m 鍋底　底面に礫層露出　北壁との境は明瞭に屈曲　3a類	黒色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3040（第127・128図　図版43）	NA24	－	－	0.96m×0.94m円形平面　深さ1.07m　平底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　柱抜去　2b類	暗褐色土で埋め戻し	大洞式土器鉢（第127図1、第23表）　大洞式土器壺（第127図4、第23表）　晩期土器（第127図2・3・5～12、第23表）　土器片76.6ｇ　削器（第128図13・14、第26表）他に削器1点、剥片1点	縄文時代晩期
SKP3041（第129・130図　図版44）	NA24	－	－	1.15m×1.05m円形平面　深さ0.66m　平底　壁との境は明瞭に屈曲　柱抜去　2a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	大洞式土器壺（第129図8・第130図14、第23表）　晩期土器（第129図1～7・第130図9～13・15、第23表）　土器片1625.6ｇ　他に削器1点、剥片1点	縄文時代晩期
SKP3042（第131図 図版44）	NB26	－	－	0.93m×0.73m楕円形 平面　深さ0.47m 丸底　底面に礫層露出　壁との境は不明瞭　底面のカーブが連続して壁となる 2b類	褐色土と礫で埋め戻し	晩期土器（第131図1、第23表）　土器片5.1ｇ　他に剥片1点	縄文時代晩期
SKP3043（第131図 図版44）	NB28	－	－	0.82m×0.76m不整円形平面　深さ0.34m 底面に礫層露出し凹凸　壁との境は不明瞭　3b類	褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3044（第131・132図　図版44）	NC26	－	－	0.62m×0.46m楕円形 平面　深さ0.98m 鍋底　壁との境は明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　3b類	暗褐色土で埋め戻し	大洞式土器壺（第132図1・2、第23表）晩期土器（第132図3～6、第23表）　土器片71.6ｇ　削器（第132図7、第26表）　石核転用削器（第132図8・9、第26表）　楔形石器（第132図10、第26表）　他に削器3点、折断石器1点、剥片1点	縄文時代晩期
SKP3045（第133図 図版45）	NC29	－	－	1.10m×0.85m不整楕円形平面　深さ0.9m 平底　壁との境は明瞭に屈曲　柱抜去 柱痕跡直径0.26m 2b類	暗褐色土と礫で埋め戻し	折断石器（第133図1、第26表）　他にRF1点、石核1点、剥片3点	縄文時代晩期

第17表　縄文時代遺構一覧（15）

遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP3046（第134図 図版45）	NA24	－	－	0.56m×0.45m円形平面　深さ0.63m　平底　壁との境は明瞭に屈曲　壁は垂直に立ち上がる　柱抜去柱痕跡直径0.1m杭状3a類	黒色土と礫で埋め戻し	晩期土器（第134図1～5、第23表）　土器片62.1ｇ他に剥片1点	縄文時代晩期
SKP3047（第98図 図版45）	ND27	－	SQ3023	0.77m×0.62m楕円形平面　深さ0.32m　平底　壁との境は明瞭に屈曲　壁はやや外開き　3b類	Ⅻ層由来の褐色土で埋め戻し	晩期土器（第98図7～9、第22表）　土器片44.2ｇ　他に石核1点、剥片1点	縄文時代晩期
SKP3048（第135・136図　図版45）	NA25	SKP3008	－	0.37m×0.28m円形平面　深さ0.47m　底面はSKP3008を埋める礫にあたり凹凸が著しい　4a類	黒色土と礫で埋め戻し	大洞C1式土器（第136図1、第23表）　土器片5.3ｇ他にRF1点、剥片1点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）
SKP3051（第135・136図　図版45）	NB25	－	－	0.91m×0.70m楕円形平面　深さ0.55m　平底　2b類	暗褐色土で埋め戻し	大洞BC式浅鉢（第136図2、第23表）　土器片34.9ｇ他にUF1点、剥片1点	縄文時代晩期中葉（大洞BC式期）
SKP3053（第100・101図　図版31）	ND26～NE26	－	SKP3008	1.08m×1.04m円形平面　深さ0.78m　平底　礫層露出のため凹凸あり　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　柱抜去　2b類	黄褐色土で埋め戻し	大洞B2式土器（第100図1、第22表）　大洞C1式土器（第100図2・3、第22表）　土器片121.7ｇ　他にUF1点、剥片3点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　SQ3049と関連か　本遺構埋め戻しとSQ3049構築には時間差あり
SKP3054（第100・101図　図版32）	NE26	SKP3060 SKP3061	SQ3049	1.32m×0.86m楕円形平面　深さ0.78m　平底　礫層露出のため凹凸あり　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　柱抜去　1b類	黄褐色土と礫で埋め戻し	大洞C1式土器（第100図4～6、第22表）　大洞式土器（第100図7、第22表）　晩期土器（第100図8～11、第22表）　土器片226.9ｇ　削器（第100図12、第25表）　他にRF2点、剥片12点、チップ4点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）　SQ3049と関連か　本遺構埋め戻しとSQ3049構築には時間差あり
SKP3057（第137図 図版46）	NE27	－	－	1.14m×1.04m円形平面　深さ0.76m　鍋底　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　柱抜去　2a類	黒褐色土と礫で埋め戻し	晩期土器片3点、石核1点、剥片2点	縄文時代晩期
SKP3058（第137図 図版46）	NE27	－	－	1.04m×1.04m円形平面　深さ0.80m　鍋底　東壁は垂直に立ち上がる　柱痕跡直径0.35m　柱抜去　2a類	黒色土と礫で埋め戻し	晩期土器片3点、剥片3点	縄文時代晩期

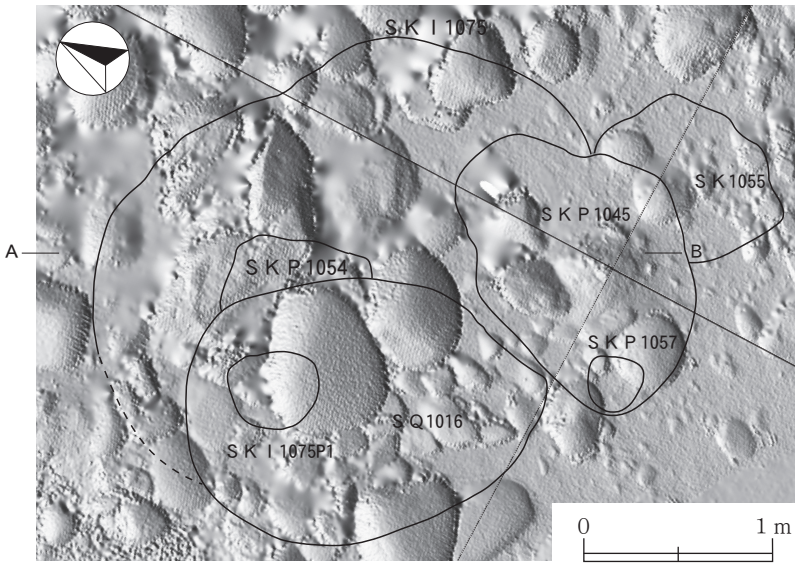
第18表　縄文時代遺構一覧（16）

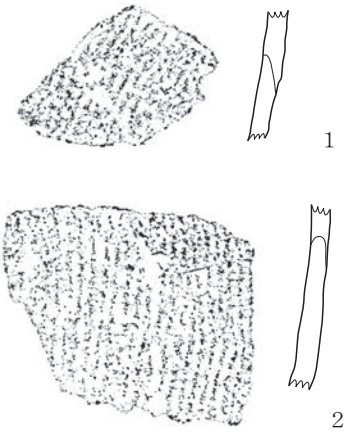
遺構（図）	位置	重複		規模・形態	埋土	遺物	所見・備考
		旧（切る）	新（切られる）				
SKP3060（第100・101図）	NE25～NE26	－	SQ3049 SKP3054	0.94m×0.74m楕円形 平面　深さ0.28m 丸底　礫層露出のため凹凸あり　壁との境は不明瞭　2b類	暗褐色土と礫層由来の礫で埋め戻し	大洞C1式土器（第100図13・14、第22表）晩期土器（第100図15、第22表）　土器片33.5ｇ　他にRF1点、剥片4点	縄文時代晩期中葉（大洞C1式期）SQ3049と関連か　本遺構埋め戻しとSQ3049構築には時間差あり
SKP3061（第100・101図）	NE26	－	SQ3049 SKP3054	0.94m×0.7m楕円形 平面　深さ0.76m 平底　礫層露出のため凹凸あり　壁との境は明瞭に屈曲　壁は直線的に立ち上がる　柱抜去　2b類	暗褐色土と礫層由来の礫で埋め戻し	折断石器（第100図16、第25表）　他に晩期土器片1点14g、剥片6点	縄文時代晩期 SQ3049と関連か　本遺構埋め戻しとSQ3049構築には時間差あり
SKP3062（第137図 図版46）	ND28	－	－	0.47m×0.35m楕円形 平面　深さ0.40m 柱痕跡杭状　4b類	暗褐色土で埋め戻し	－	縄文時代晩期　上面に直径0.1mの礫が3個置かれる
SKP3069（第137図 図版46）	NG27	－	－	0.61m×0.55m円形平面　深さ0.33m　底面に礫層露出　壁との境は明瞭に屈曲　3b類	暗褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3072（第137図）	NG27～NH27	－	－	0.70m×0.52m楕円形 平面　深さ0.22m 丸底　壁との境は不明瞭　3b類	暗褐色土で埋め戻し	礫石器（第137図1、第26表）他に剥片1点	縄文時代晩期
SKP3078（第35図）	MG71～MH71	－	SA3030P1 SA3031P1 SKP3079 SKP3080	2.00m以上×1.20m以上楕円形平面　深さ0.8m　底面に礫層露出し凹凸が著しい　壁との境は不明瞭　1b類	Ⅻ層由来の礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期
SKP3079（第35・40図）	MG71～MH71	SKP3078 SKP3080	－	1.70m×1.32m楕円形 平面　深さ0.56m 鍋底　底面に礫層露出　壁との境は不明瞭　柱抜去後、直径1.1mの円礫を入れる　1b類	褐色土と礫で埋め戻し	大洞BC式土器（第40図1～3、第20表）　土器片22.2g	縄文時代晩期中葉（大洞BC式期）SQ3023・3055と似る
SKP3080（第35図）	MG71～MH71	SKP3078	SKP3079	1.10m×0.9m以上円形平面　深さ0.42m 丸底　底面に礫層露出　壁との境は不明瞭　柱抜去後、直径0.78mの円礫を入れる　2b類	褐色土と礫で埋め戻し	－	縄文時代晩期中葉 SQ3023・3055と似る



ＳＫＩ1075
1（色)10YR2/2（構)亜角塊状（性)L（緻)+（塑)±～+（混)礫φ10～700㎜+++
2（色)10YR2/1～2.5Y2/1（構)亜角塊状φ5㎜（性)SL（緻)+～±（塑)±～+（混)礫φ10～700㎜50%
凝灰岩の風化した白色粒子+

ＳＫＰ1054
1（色)10YR2/2（構)亜角塊状～団粒状（性)L（緻)+（塑)±～+（混)礫φ100～200㎜+（備)礫層から離れた下部砂層が土壌化
2（色)10YR3/1～10YR3/2　7.5YR3/1～7.5YR3/2（構)亜角塊状φ5～7㎜（性)SL～Sと礫 4層よりS+（緻)+～++（塑)－
（混)礫φ5～700㎜+++ φ10㎜大+（備)グライ化
3（色)2.5Y2/1 2.5Y3/2　2.5Y4/3（構)亜角塊状φ7㎜（性)S（緻)++（塑)±～－
（混)礫φ10～20㎜10%（備)疑似グライ斑

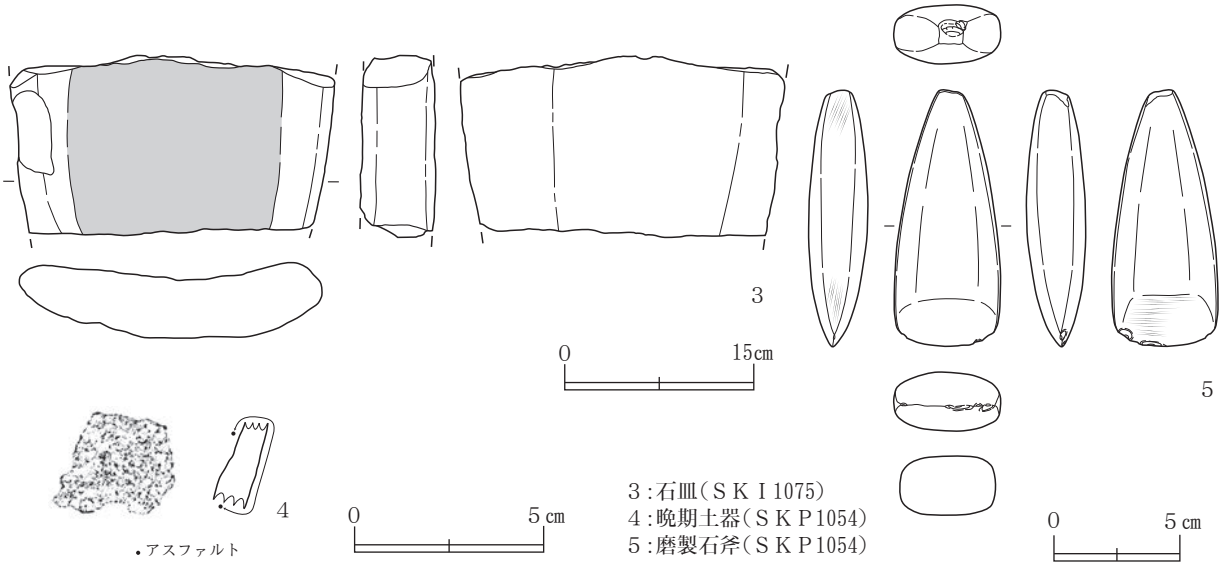




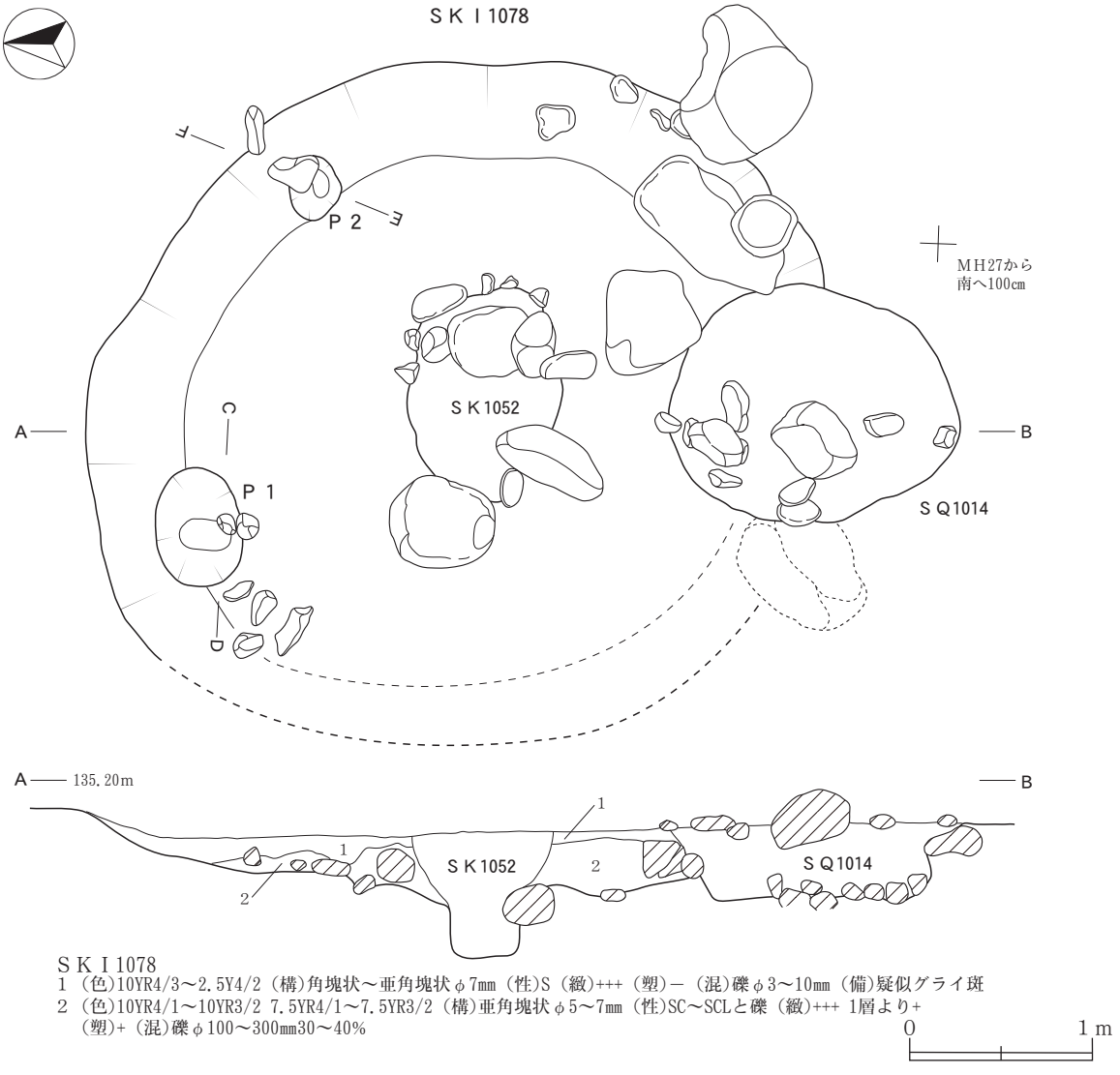
1・2：晩期土器（ＳＫＩ1075）

0　5㎝

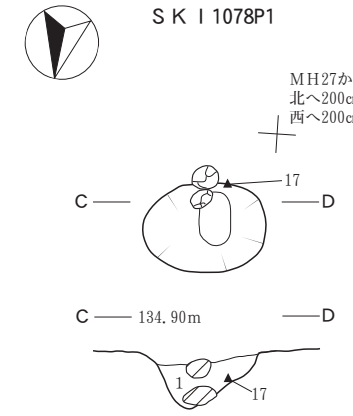
第18図　ＳＫＩ1075竪穴状遺構・ＳＫＰ1054柱穴、レリーフ図、出土土器



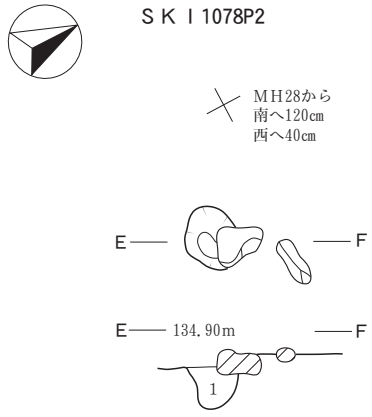
第19図　ＳＫＩ1075竪穴状遺構・ＳＫＰ1054柱穴出土土器・石器



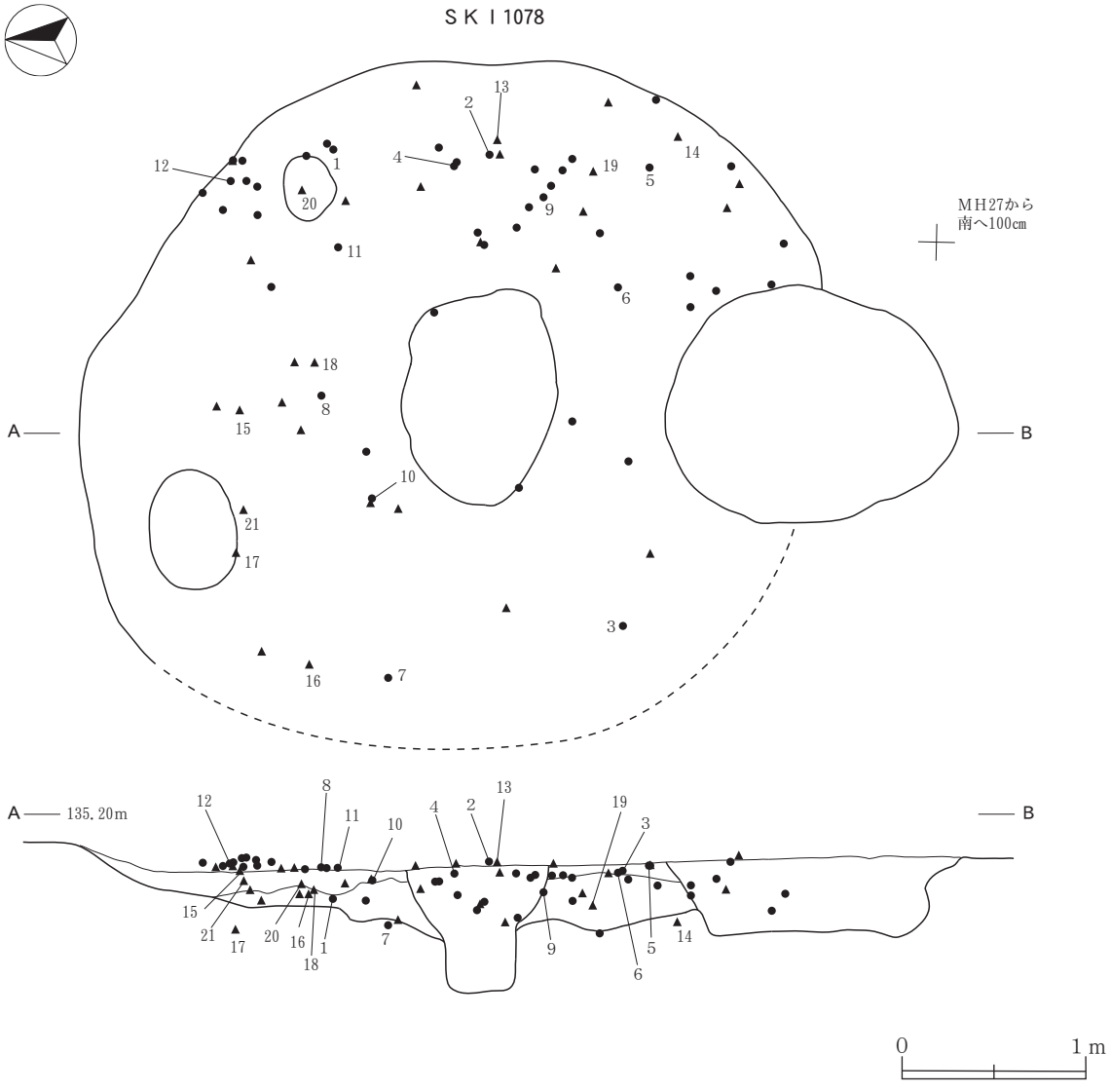
第20図　ＳＫＩ1078竪穴状遺構



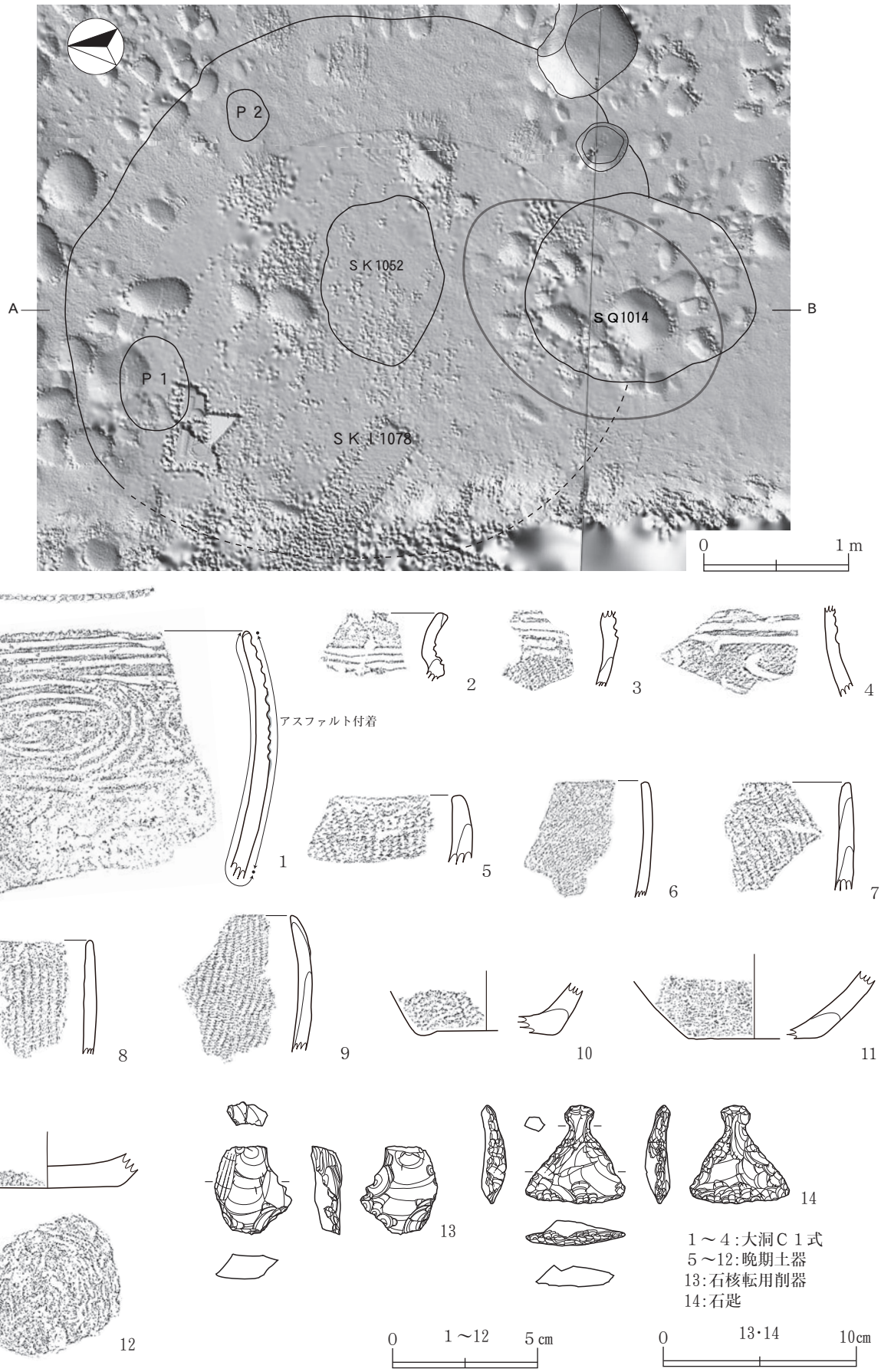
ＳＫＩ1078P1
1 （色)10YR3/1 10YR3/2斑状（構)亜角塊状φ7㎜
（性)SL(S++)（緻)+（塑)±～－（混)礫φ100㎜+
（備)グライ化 疑似グライ斑褐鉄鉱φ5～7㎜++



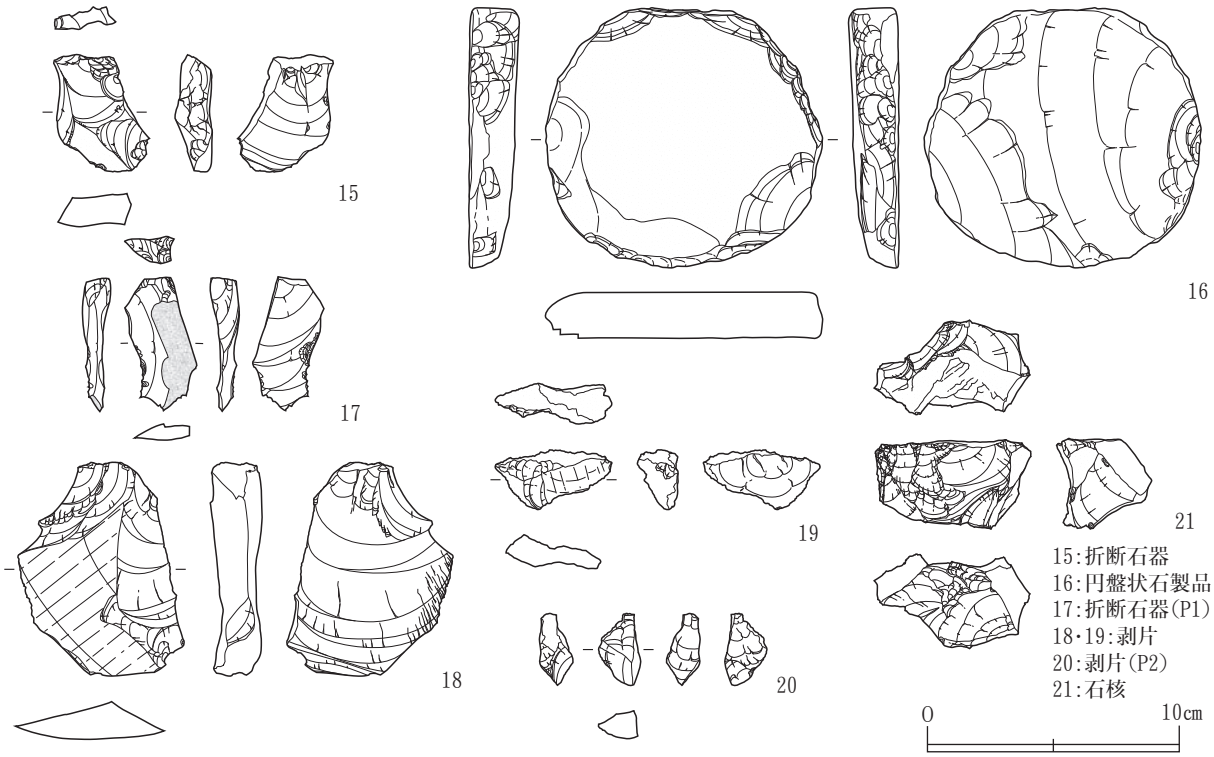
ＳＫＩ1078P2
1 （色)10YR3/1 10YR3/2斑状（構)亜角塊状φ7㎜
（性)SL(S++)（緻)+（塑)±～－（混)礫φ100㎜+
（備)グライ化 疑似グライ斑褐鉄鉱φ5～7㎜++



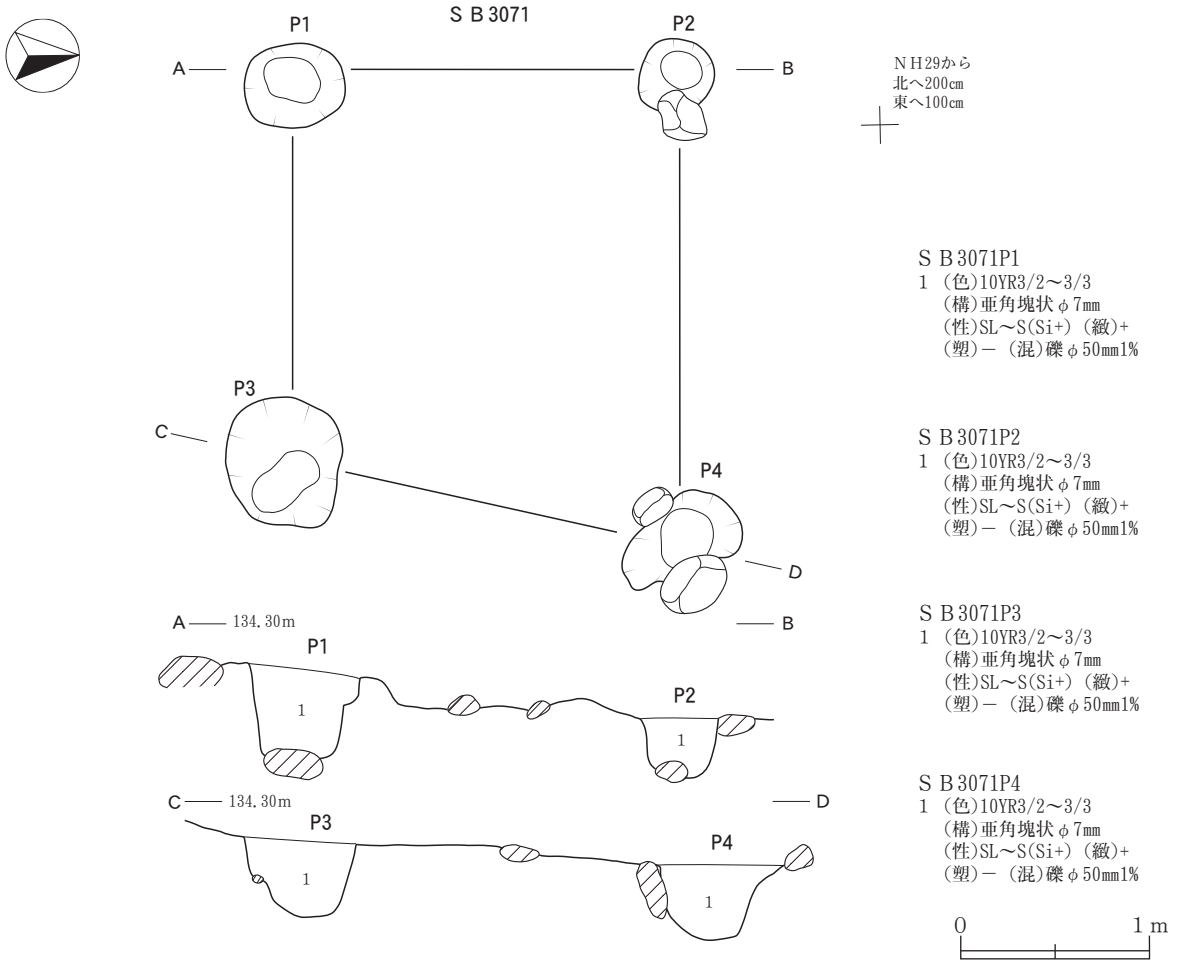
第21図　ＳＫＩ1078竪穴状遺構遺物分布図



第22図　ＳＫＩ1078竪穴状遺構レリーフ図、出土土器・石器



第23図　ＳＫＩ1078竪穴状遺構出土石器



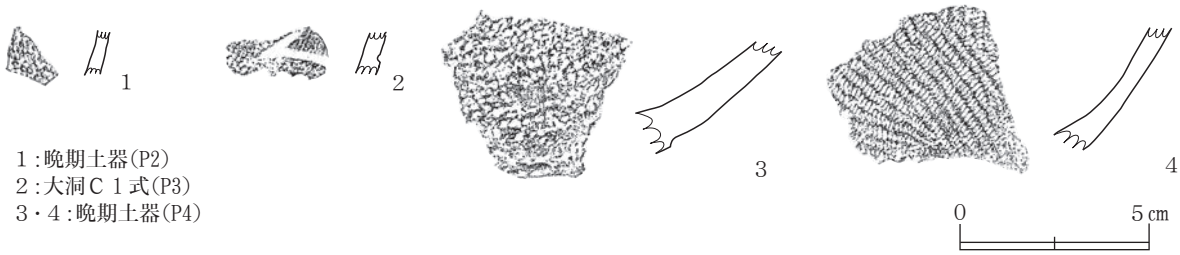
ＳＢ3071P1
1 (色)10YR3/2～3/3
(構)亜角塊状 φ7㎜
(性)SL～S(Si+) (緻)+
(塑)－ (混)礫 φ50㎜1%

ＳＢ3071P2
1 (色)10YR3/2～3/3
(構)亜角塊状 φ7㎜
(性)SL～S(Si+) (緻)+
(塑)－ (混)礫 φ50㎜1%

ＳＢ3071P3
1 (色)10YR3/2～3/3
(構)亜角塊状 φ7㎜
(性)SL～S(Si+) (緻)+
(塑)－ (混)礫 φ50㎜1%

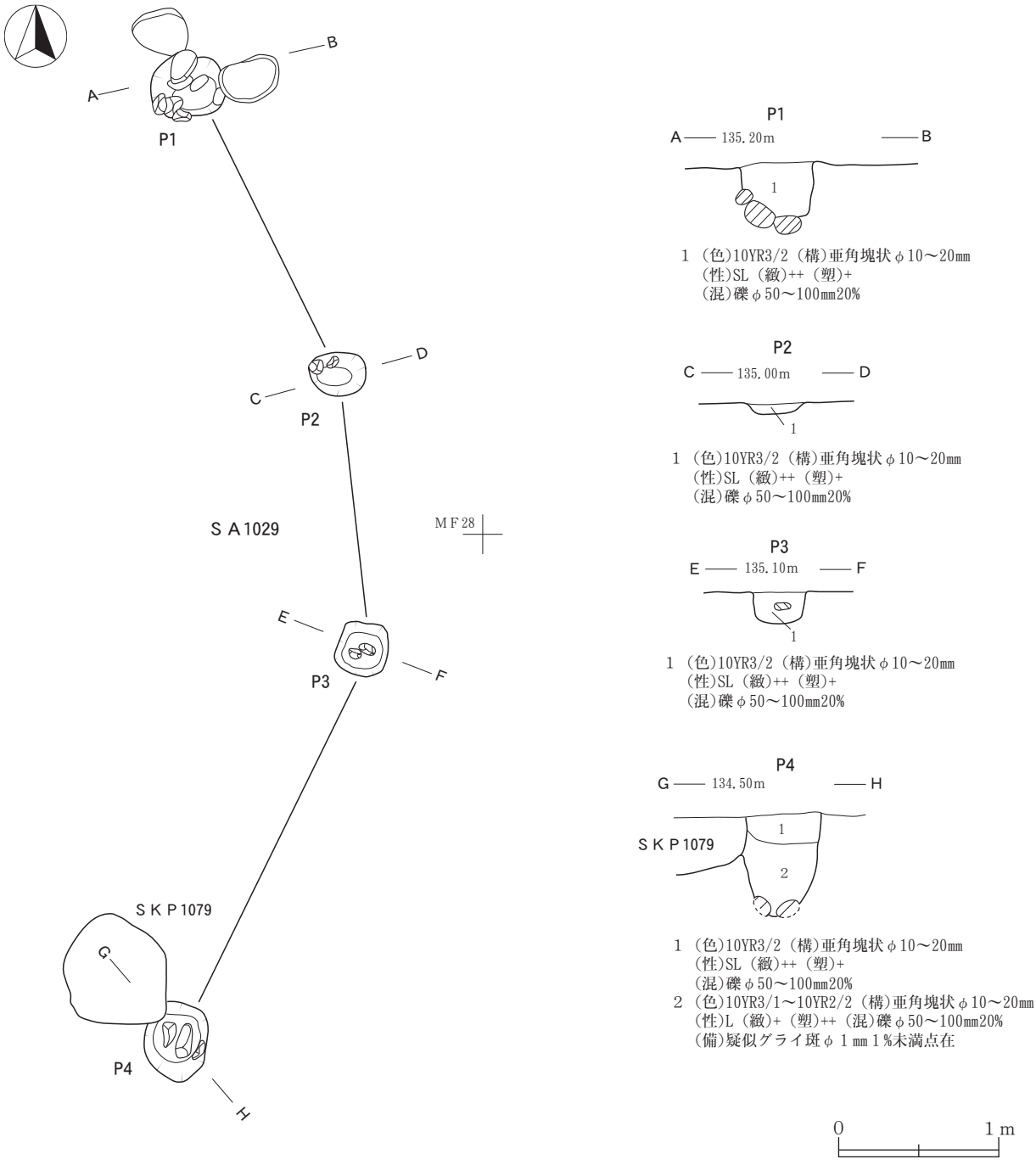
ＳＢ3071P4
1 (色)10YR3/2～3/3
(構)亜角塊状 φ7㎜
(性)SL～S(Si+) (緻)+
(塑)－ (混)礫 φ50㎜1%

第24図　ＳＢ3071掘立柱建物跡

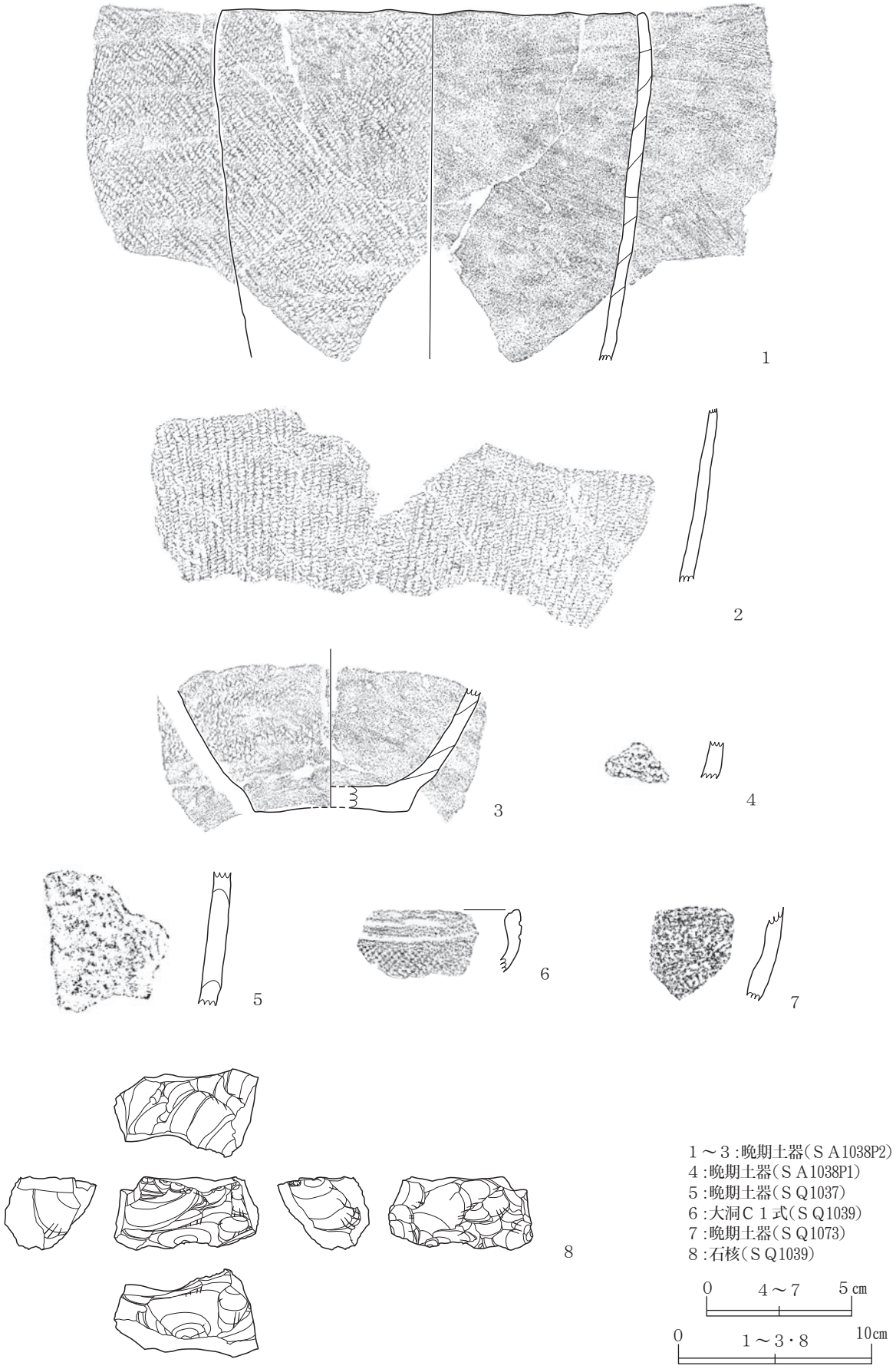


1：晩期土器(P2)
2：大洞Ｃ１式(P3)
3・4：晩期土器(P4)

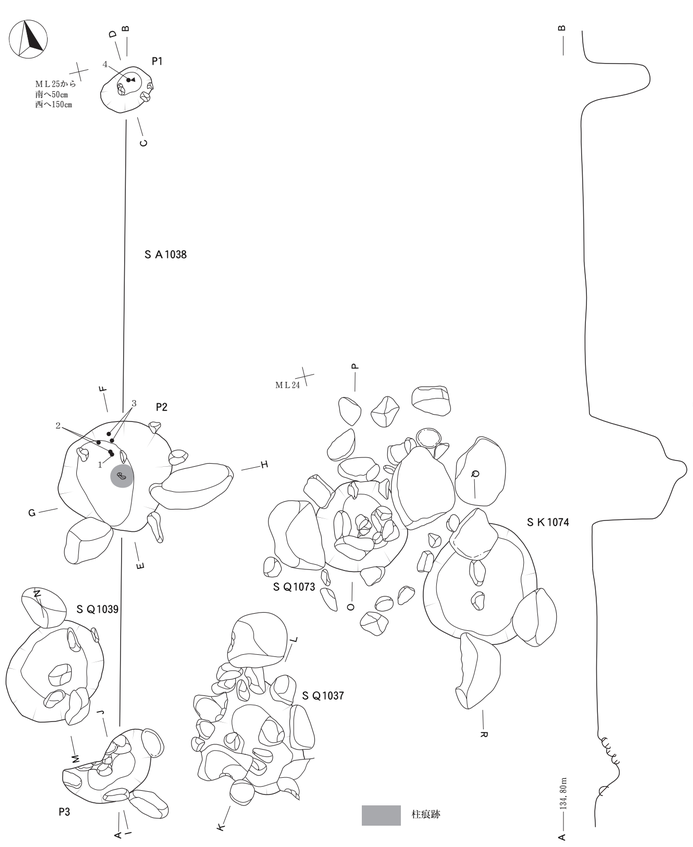
第25図　ＳＢ3071掘立柱建物跡出土土器

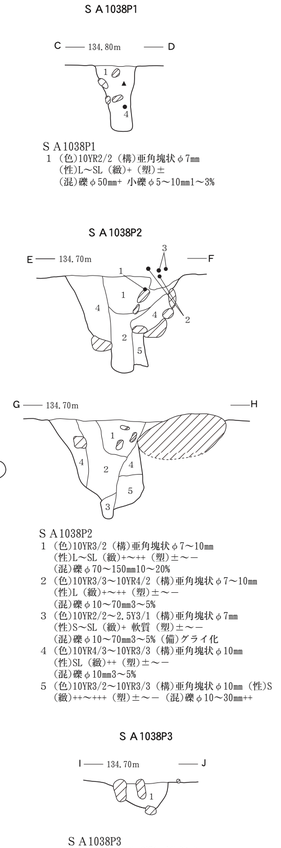


第26図　ＳＡ1029柱列跡

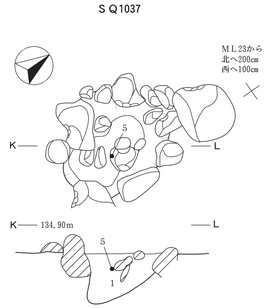


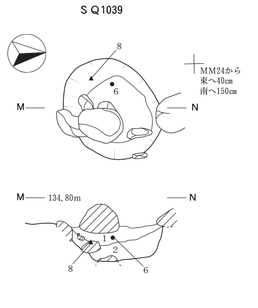
第27図　ＳＡ1038柱列跡・ＳＱ1037・1039・1073配石遺構出土土器・石器

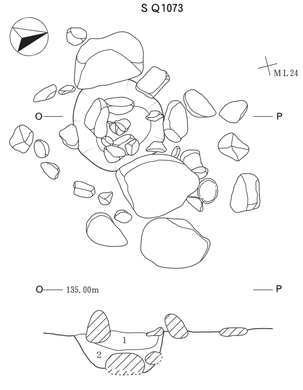


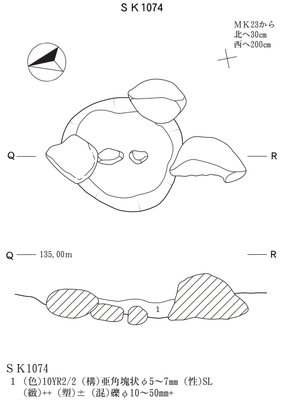


第28図　ＳＡ1038柱列跡・ＳＱ1037・1039・1073配石遺構・ＳＫ1074土坑

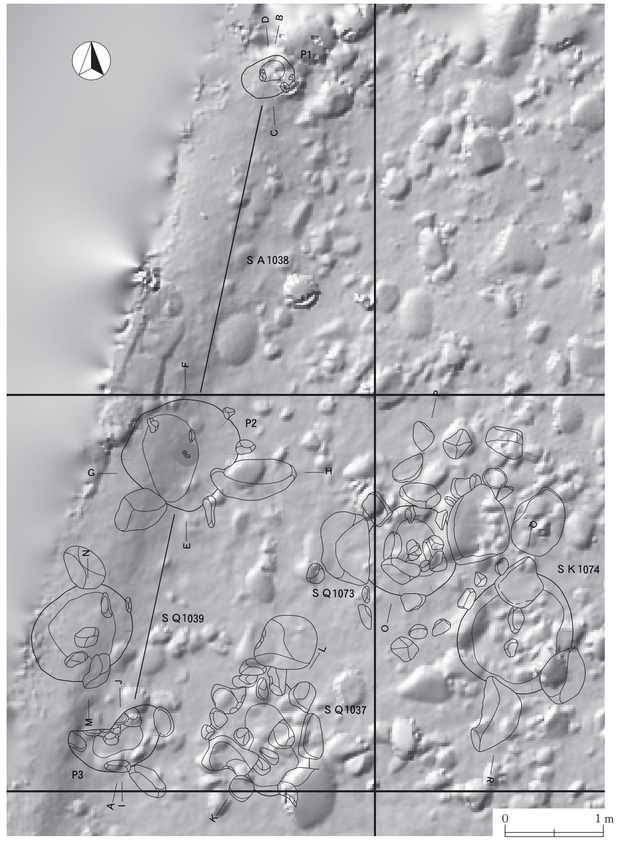




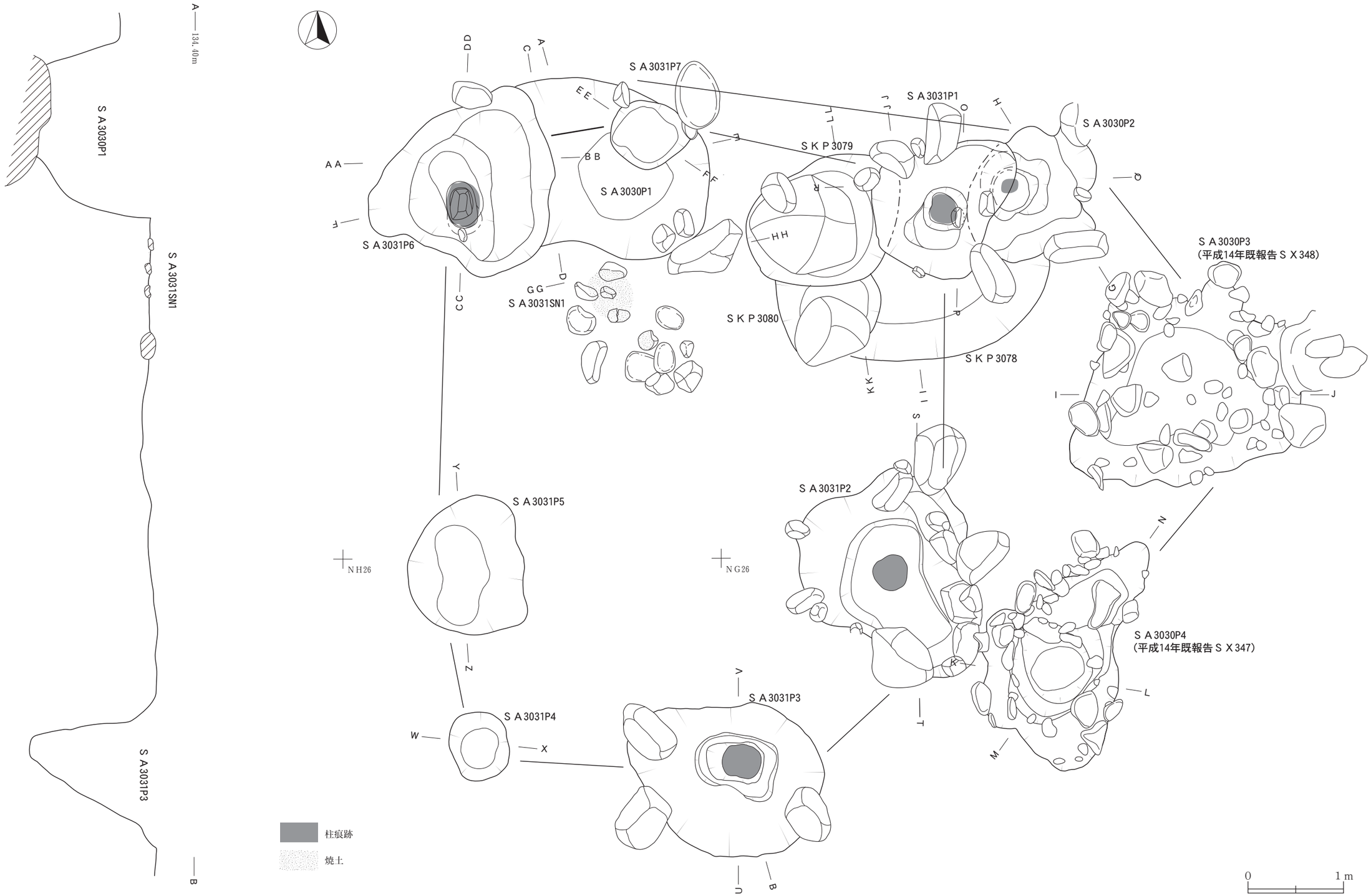




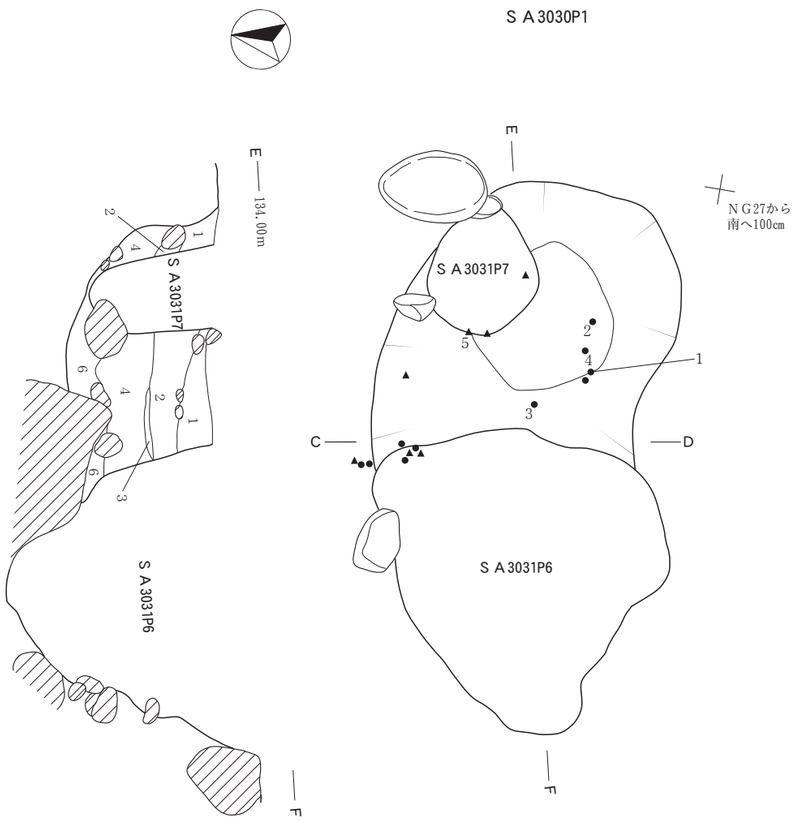
第29図　ＳＱ1037・1039・1073配石遺構・ＳＫ1074土坑



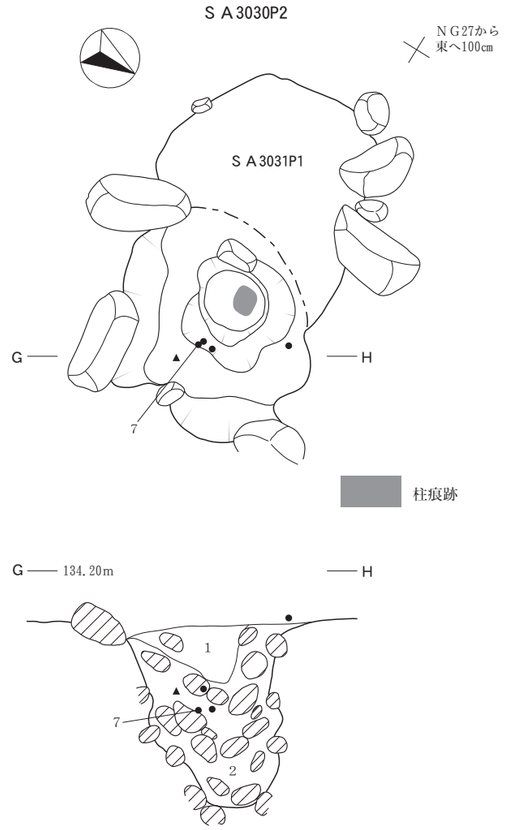
第30図　ＳＡ1038柱列跡・ＳＱ1037・1039・1073配石遺構・ＳＫ1074土坑レリーフ図



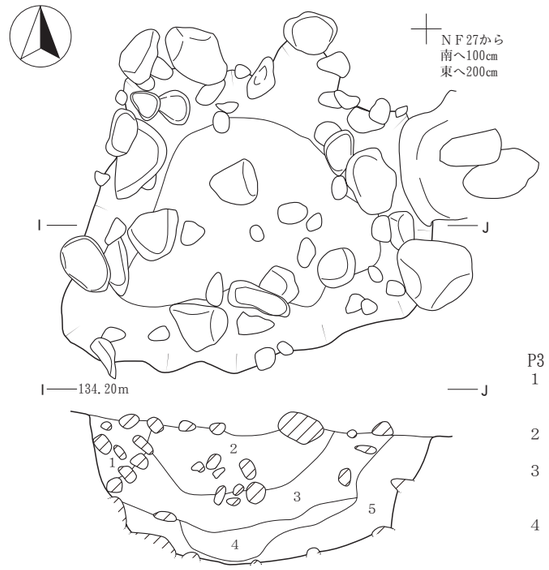
第31図　ＳＡ3030・3031柱列跡・ＳＫＰ3078・3079・3080柱穴



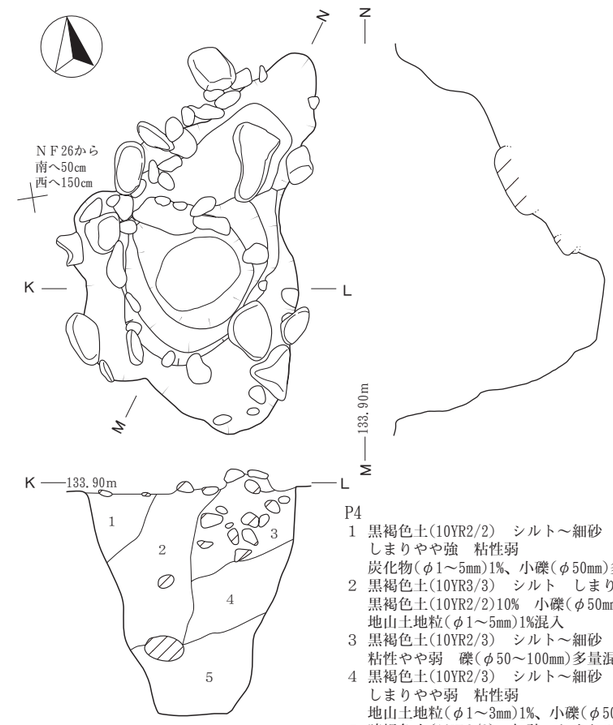
P1
1 （色)10YR3/2（構)亜角塊状φ7mm（性)SL～S（緻)++（塑)±～－（混)礫φ70～100mm10%
2 （色)10YR4/3（構)亜角塊状φ7mm（性)Sと礫（緻)++（塑)－（混)礫φ50～150mm30%
3 （色)10YR4/3～10YR4/4（構)亜角塊状φ7mm（性)Sと礫（緻)+++（塑)－（混)礫φ10～50mm10%
4 （色)10YR3/2（構)亜角塊状φ7mm（性)SL～S（緻)++（塑)±～－（混)礫１層より少
5 （色)10YR4/4（構)亜角塊状φ7～10mm（性)S（緻)++（塑)－（混)砂ブロックφ50mm
6 （色)10YR3/2～4/3（構)亜角塊状φ7～10mm（性)Sと礫（緻)+++（塑)－（混)礫φ10～30mm30～40%



P2
1 （色)10YR2/1～2.5Y2/1（構)亜角塊状φ7mm
（性)SL～L（緻)+（塑)+（混)礫φ50～200mm5%
（混)Ⅻ層由来土粒子φ3mm1% 礫φ50～200mm5%
2 （色)10YR2/1～2.5Y2/1（構)亜角塊状φ7mm
（性)SL～L（緻)+（塑)+（混)礫φ50～200mm30%



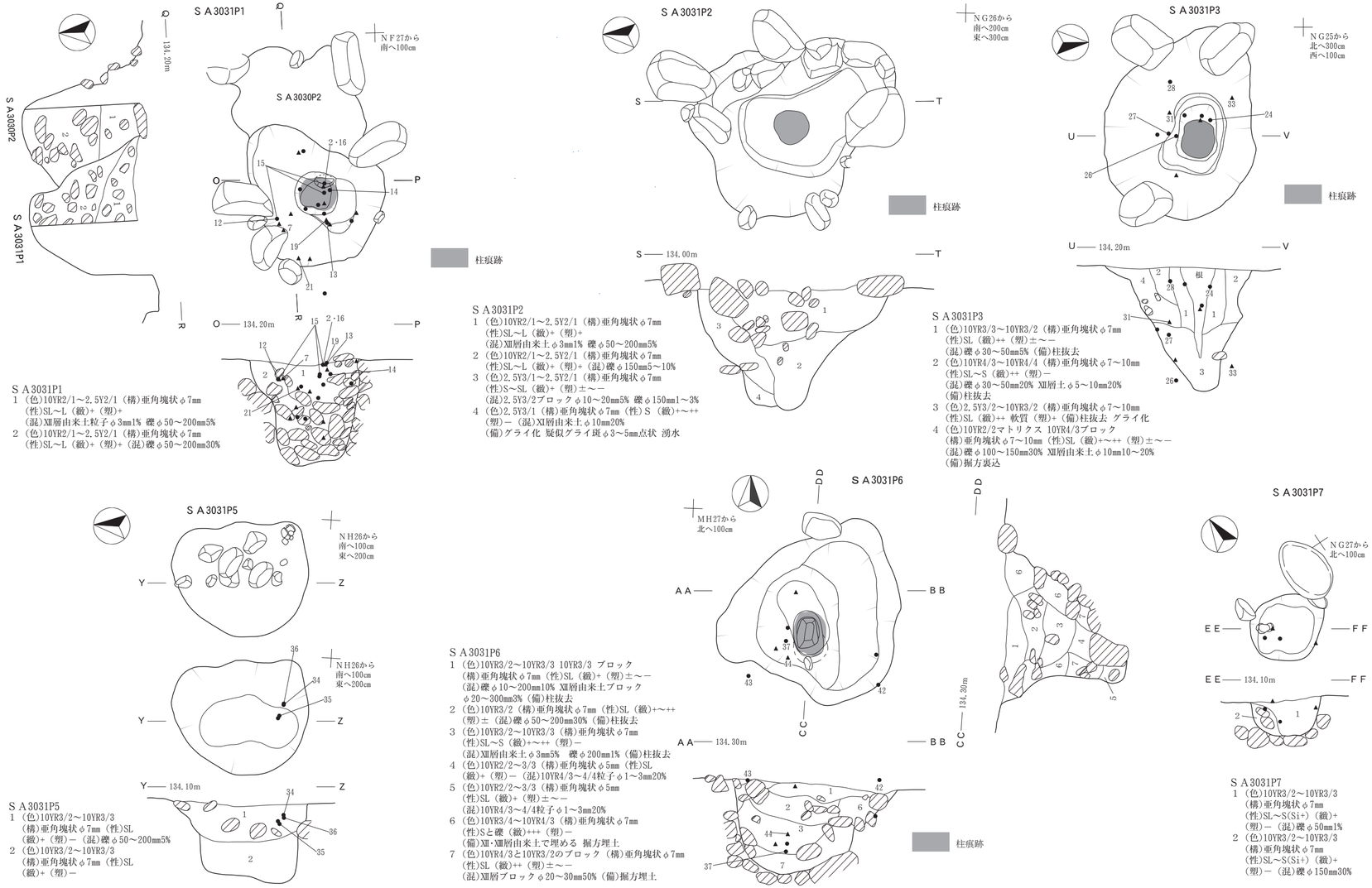
P3
1 黒褐色土(10YR2/2)シルト　しまりやや弱　粘性普通
炭化物(φ1mm)1%、礫(φ50～100mm)多量、
地山土地粒(φ1～3mm)2%混入
2 暗褐色土(10YR3/3)シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
炭化物(φ1mm)1%、礫(φ50～100mm)多量混入
3 黒褐色土(10YR2/3)シルト～細砂　しまりやや弱　粘性弱
炭化物(φ1mm)1%、礫(φ50～100mm)多量、
地山土地粒(φ3mm)1%混入
4 暗褐色土(10YR3/3)シルト～細砂　しまりやや弱　粘性弱
炭化物(φ1～3mm)1%、礫(φ50～100mm)多量、
地山土地粒(φ1～5mm)3%混入
5 暗褐色土(10YR3/4)細砂～粗砂　しまりやや弱　粘性弱
礫(φ50～100mm)多量混入



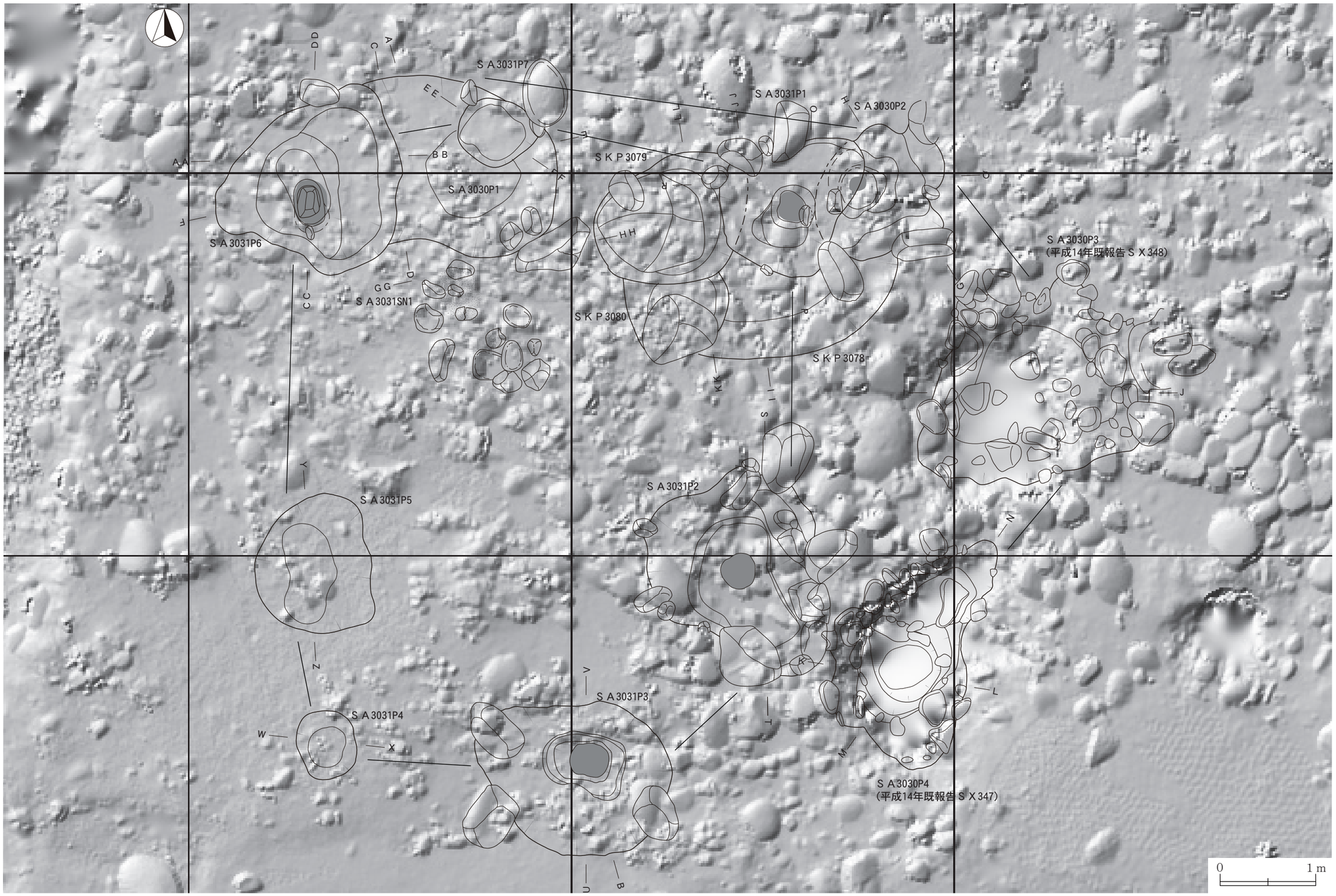
P4
1 黒褐色土(10YR2/2)　シルト～細砂
しまりやや強　粘性弱
炭化物(φ1～5mm)1%、小礫(φ50mm)多量混入
2 黒褐色土(10YR3/3)　シルト　しまりやや強　粘性弱
黒褐色土(10YR2/2)10%　小礫(φ50mm)多量、
地山土地粒(φ1～5mm)1%混入
3 黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂　しまり普通
粘性やや弱　礫(φ50～100mm)多量混入
4 黒褐色土(10YR2/3)　シルト～細砂
しまりやや弱　粘性弱
地山土地粒(φ1～3mm)1%、小礫(φ50mm)多量混入
5 暗褐色土(10YR3/3)　細砂　しまりやや弱　粘性弱
炭化物多量混入、礫(φ50～100mm)多量混入

0　1m

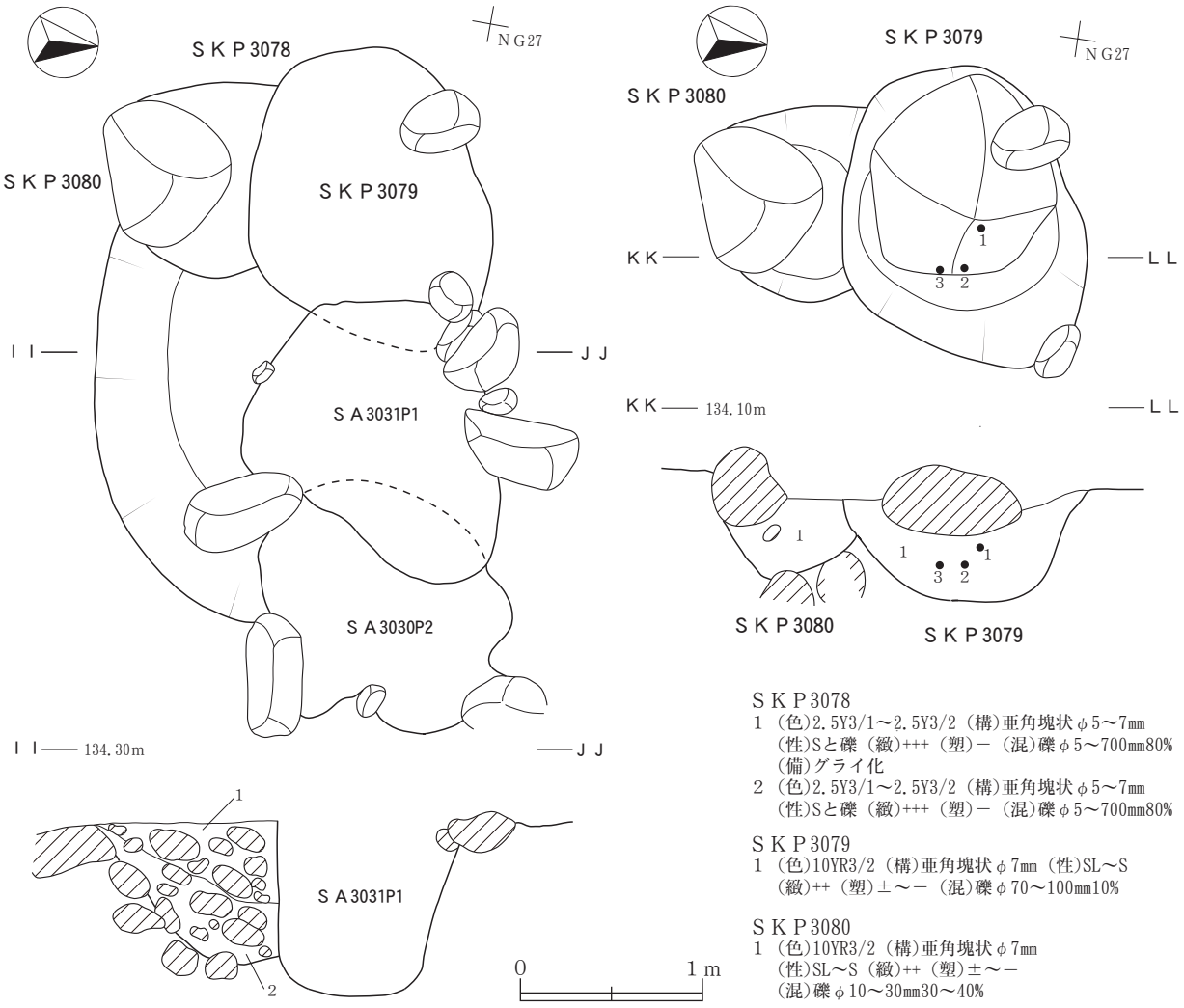
第32図　ＳＡ3030柱列跡P1～P4



第33図　ＳＡ3031柱列跡P1～P7・SN1



第34図　ＳＡ3030・3031柱列跡・ＳＫＰ3078・3079・3080柱穴レリーフ図

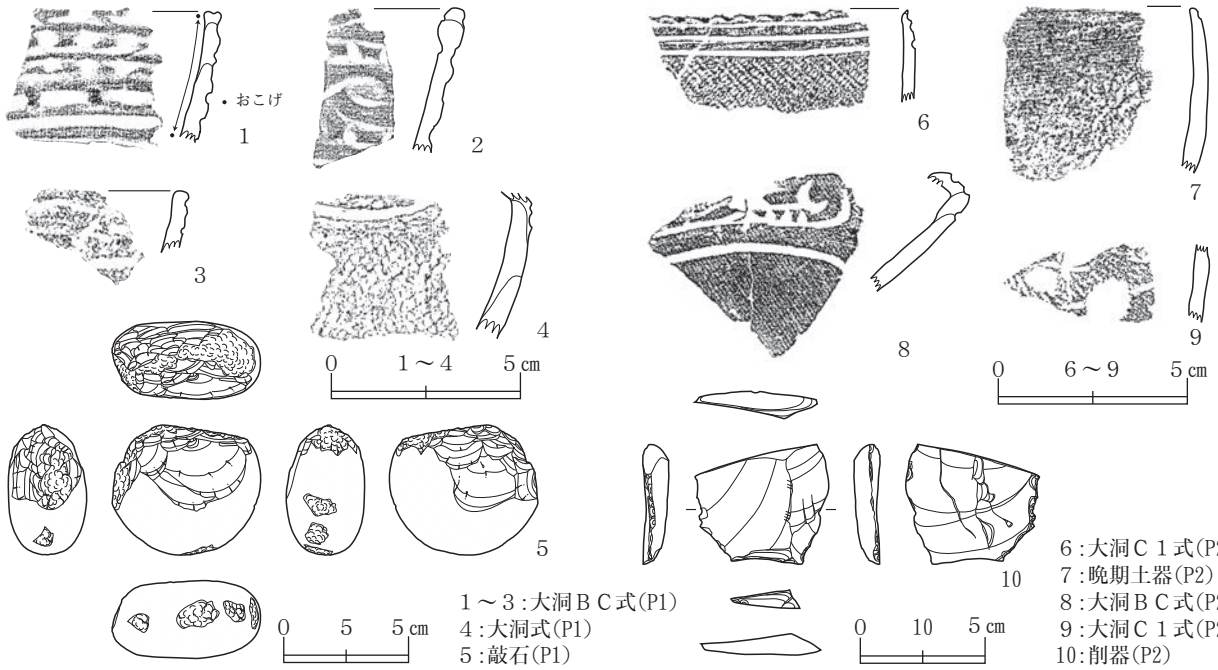


ＳＫＰ3078
1（色）2.5Y3/1～2.5Y3/2（構）亜角塊状φ5～7㎜
（性）Sと礫（緻）+++（塑）－（混）礫φ5～700㎜80%
（備）グライ化
2（色）2.5Y3/1～2.5Y3/2（構）亜角塊状φ5～7㎜
（性）Sと礫（緻）+++（塑）－（混）礫φ5～700㎜80%

ＳＫＰ3079
1（色）10YR3/2（構）亜角塊状φ7㎜（性）SL～S
（緻）++（塑）±～－（混）礫φ70～100㎜10%

ＳＫＰ3080
1（色）10YR3/2（構）亜角塊状φ7㎜
（性）SL～S（緻）++（塑）±～－
（混）礫φ10～30㎜30～40%

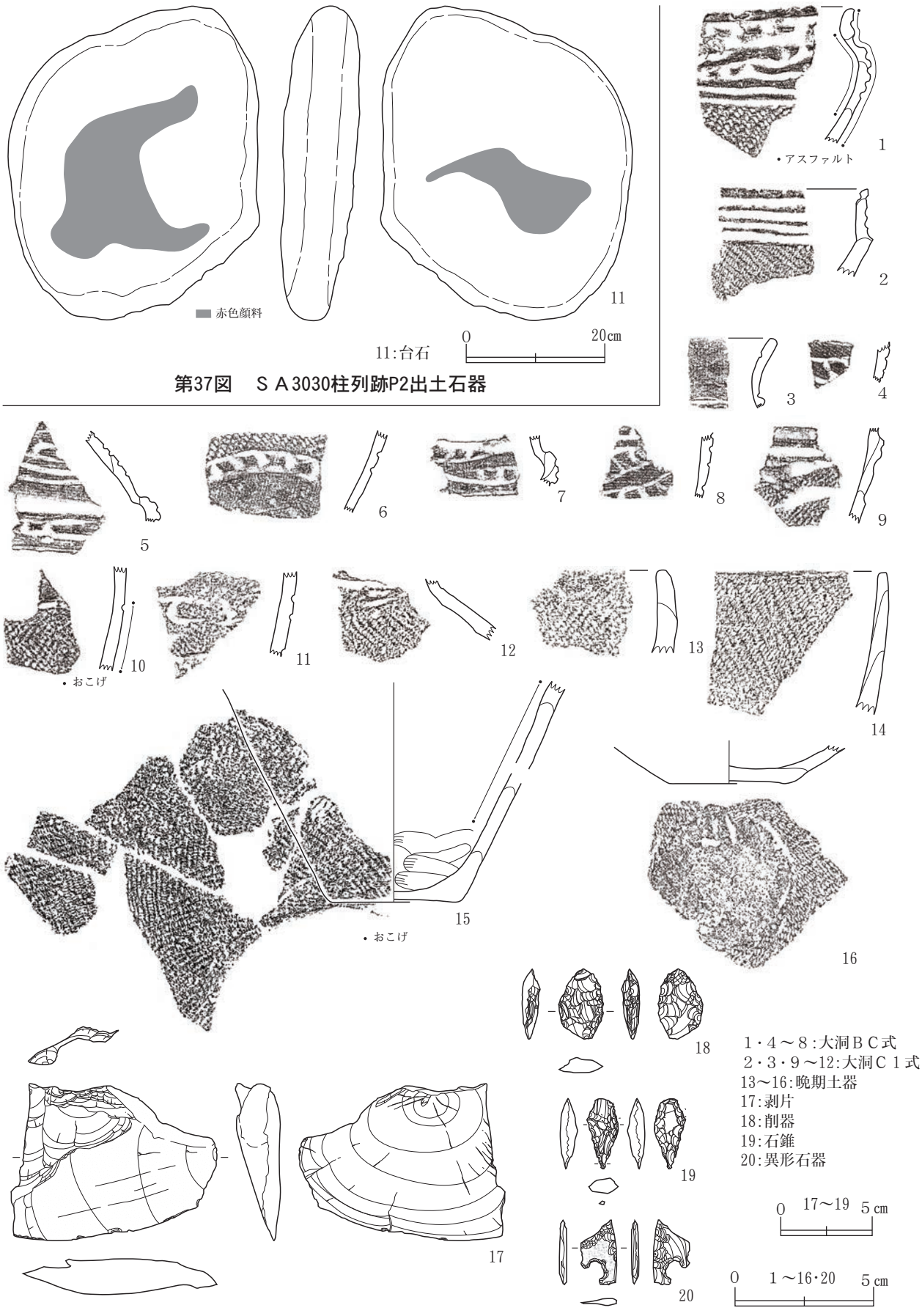
第35図　ＳＫＰ3078・3079・3080柱穴



1～3：大洞ＢＣ式(P1)
4：大洞式(P1)
5：敲石(P1)
6：大洞Ｃ１式(P2)
7：晩期土器(P2)
8：大洞ＢＣ式(P2)
9：大洞Ｃ１式(P2)
10：削器(P2)

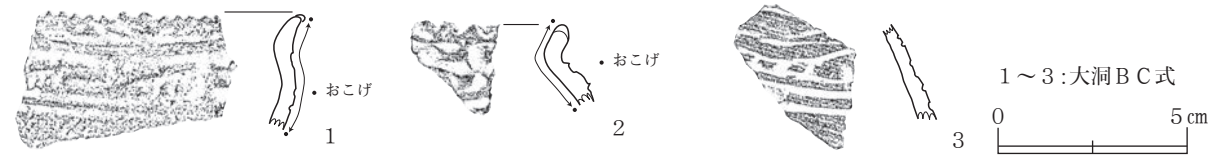
第36図　ＳＡ3030柱列跡出土土器・石器

第37図　ＳＡ3030柱列跡P2出土石器

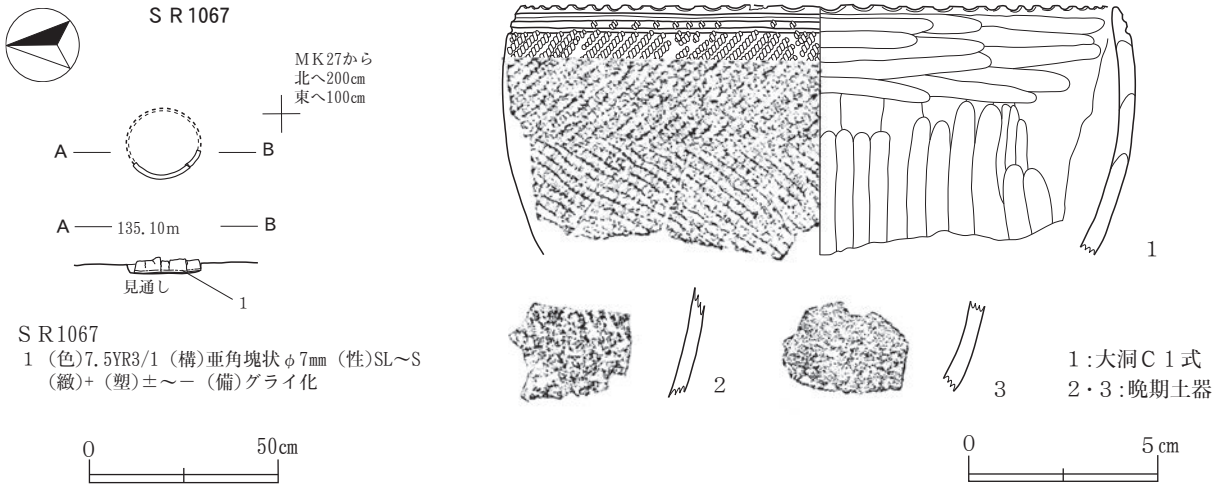


第38図　ＳＡ3031柱列跡P1出土土器・石器

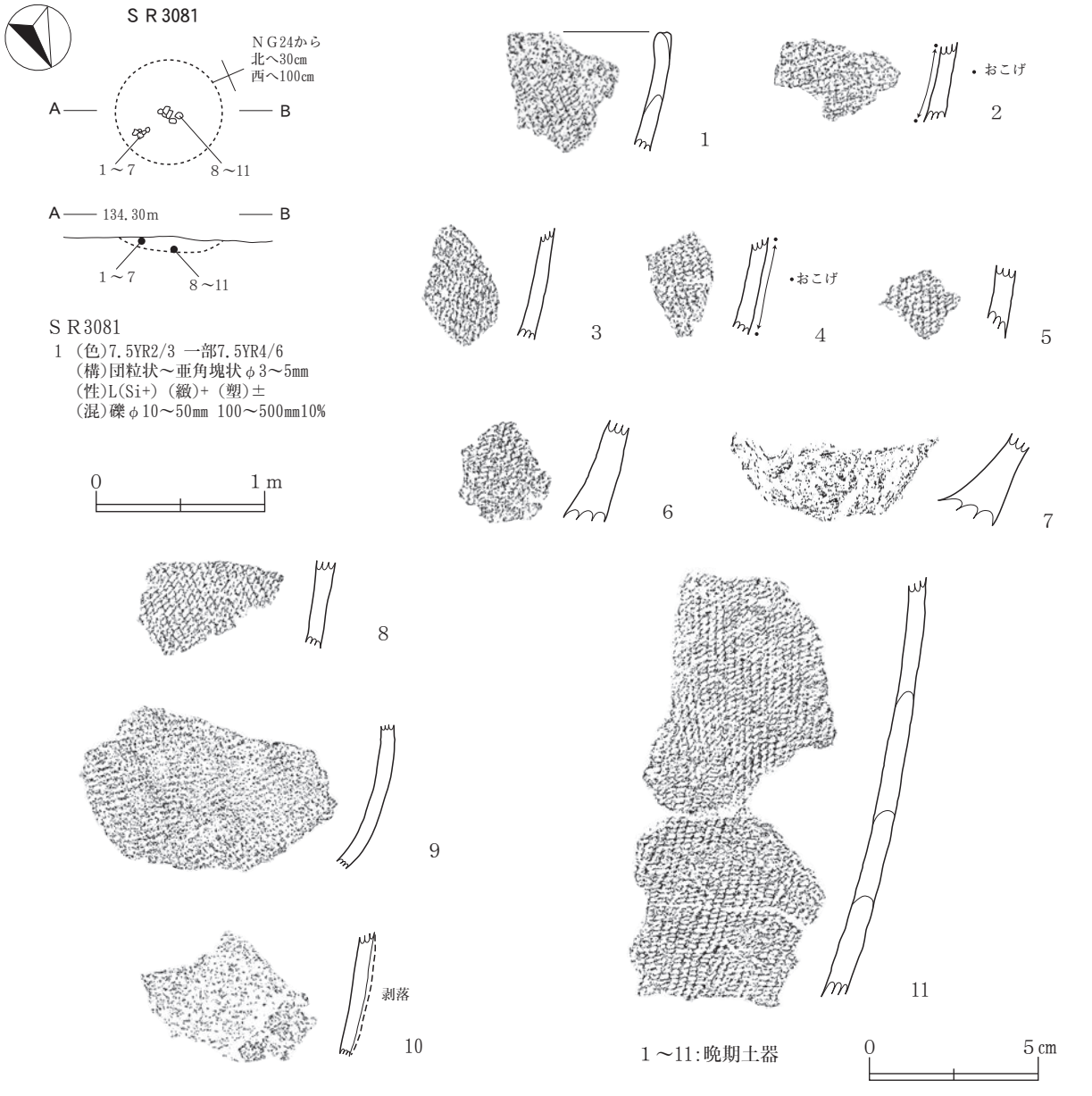
第39図　ＳＡ3031柱列跡P1～P3・P5・P6・SN1出土土器・石器



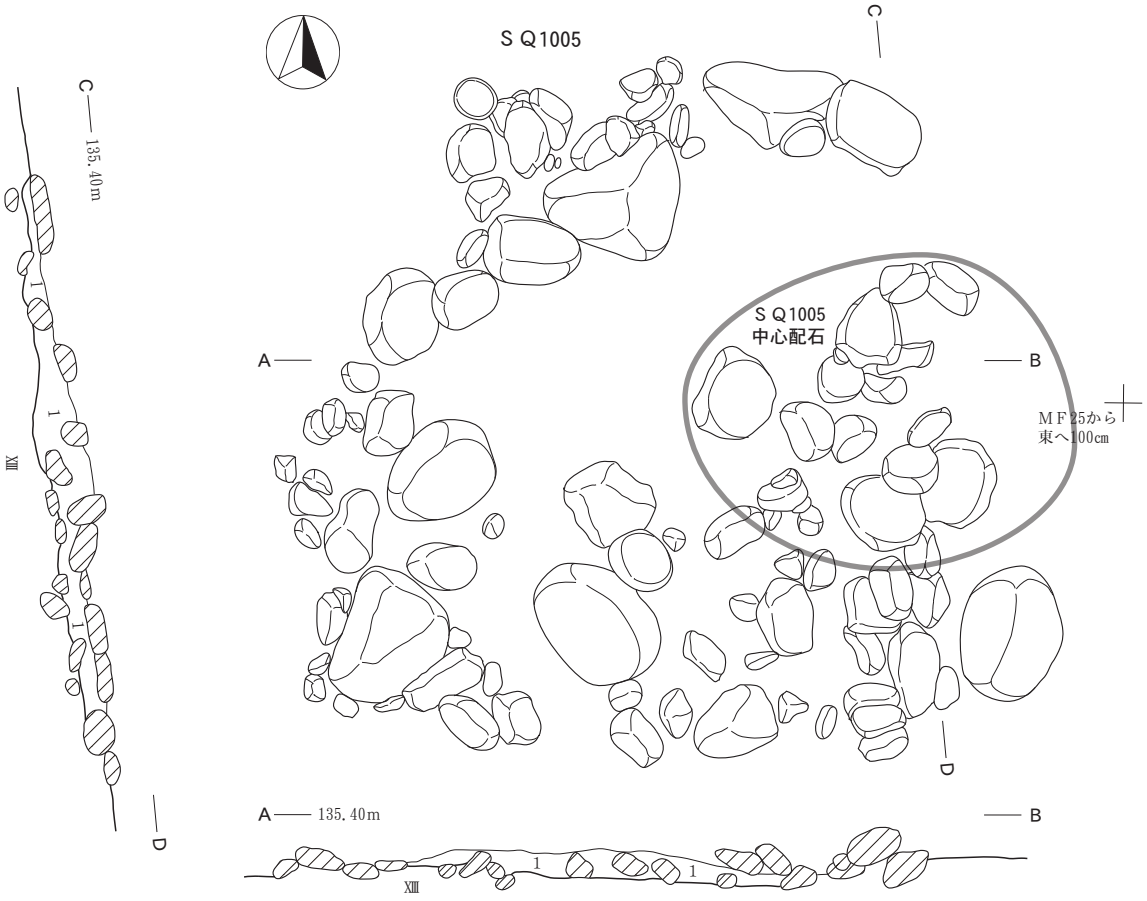
第40図　ＳＫＰ3079柱穴出土土器



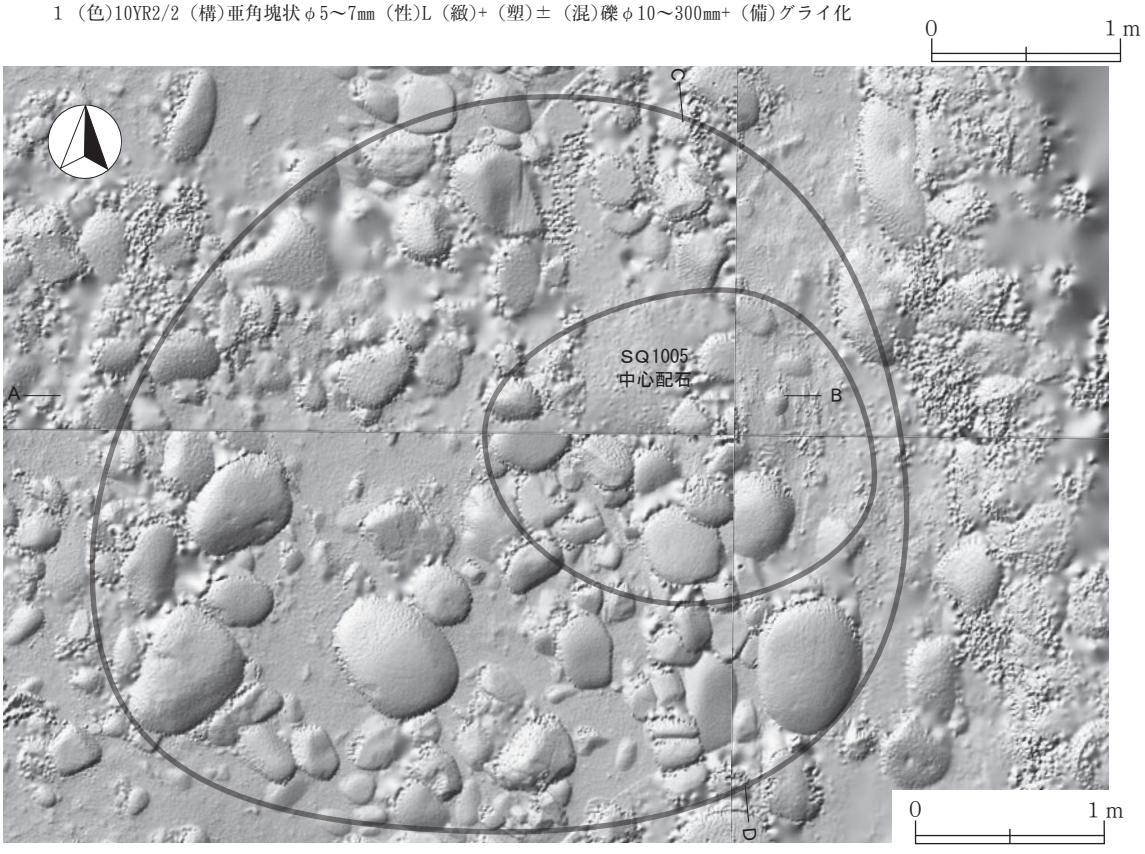
第41図　ＳＲ1067土器埋設遺構、出土土器



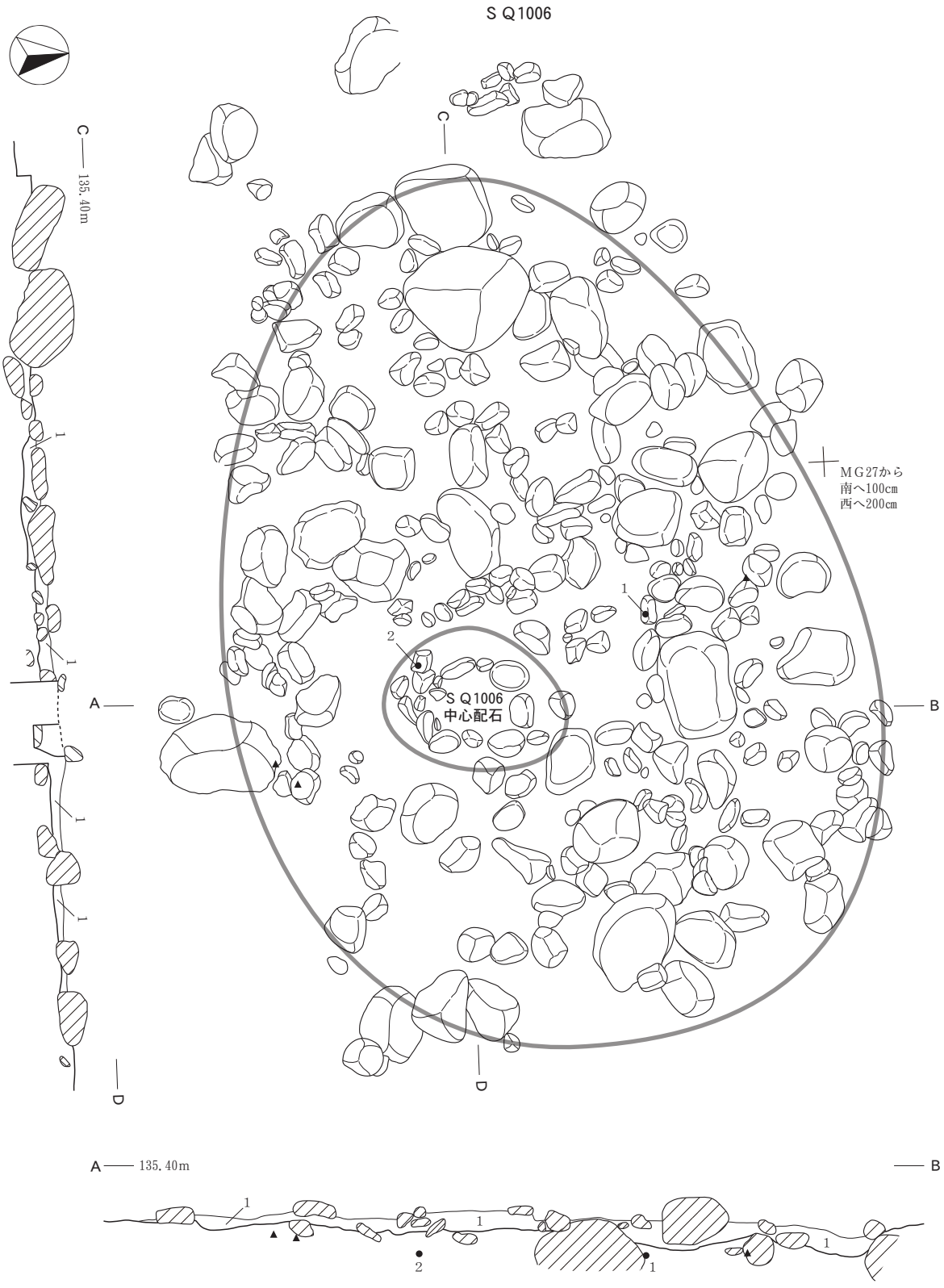
第42図　ＳＲ3081土器埋設遺構、出土土器



ＳＱ1005
1 （色）10YR2/2 （構）亜角塊状 φ5～7mm （性）L （緻）+ （塑）± （混）礫 φ10～300mm+ （備）グライ化



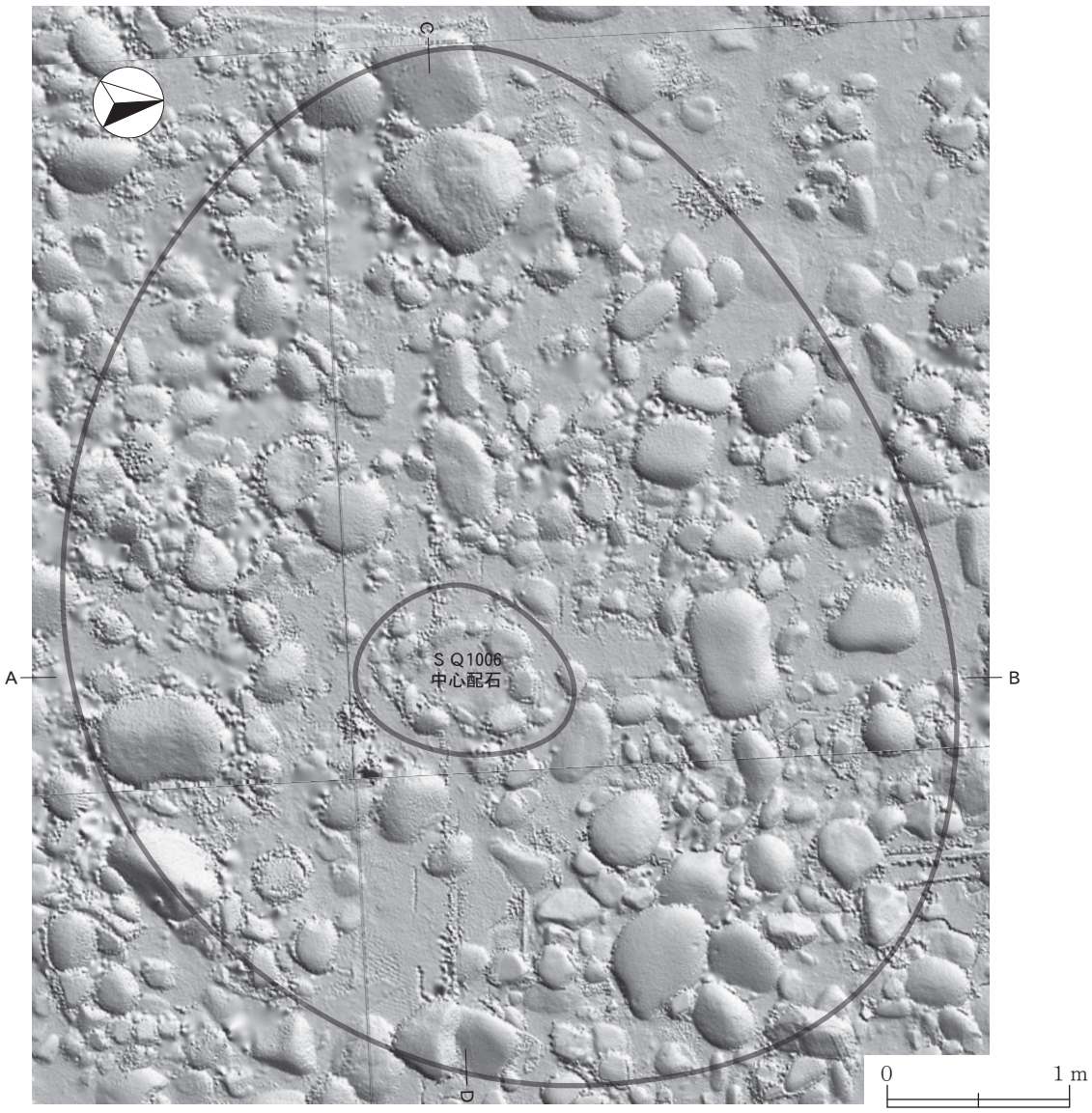
第43図　ＳＱ1005配石遺構、レリーフ図



ＳＱ1006
1 (色)10YR2/2～3/1 2.5Y3/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)S～SL (緻)+ (塑)± (混)礫φ10～300mm++ 褐鉄鉱φ1～3mm+ 遺物極少
(備)Ⅷ層が風化して腐殖化 グライ化

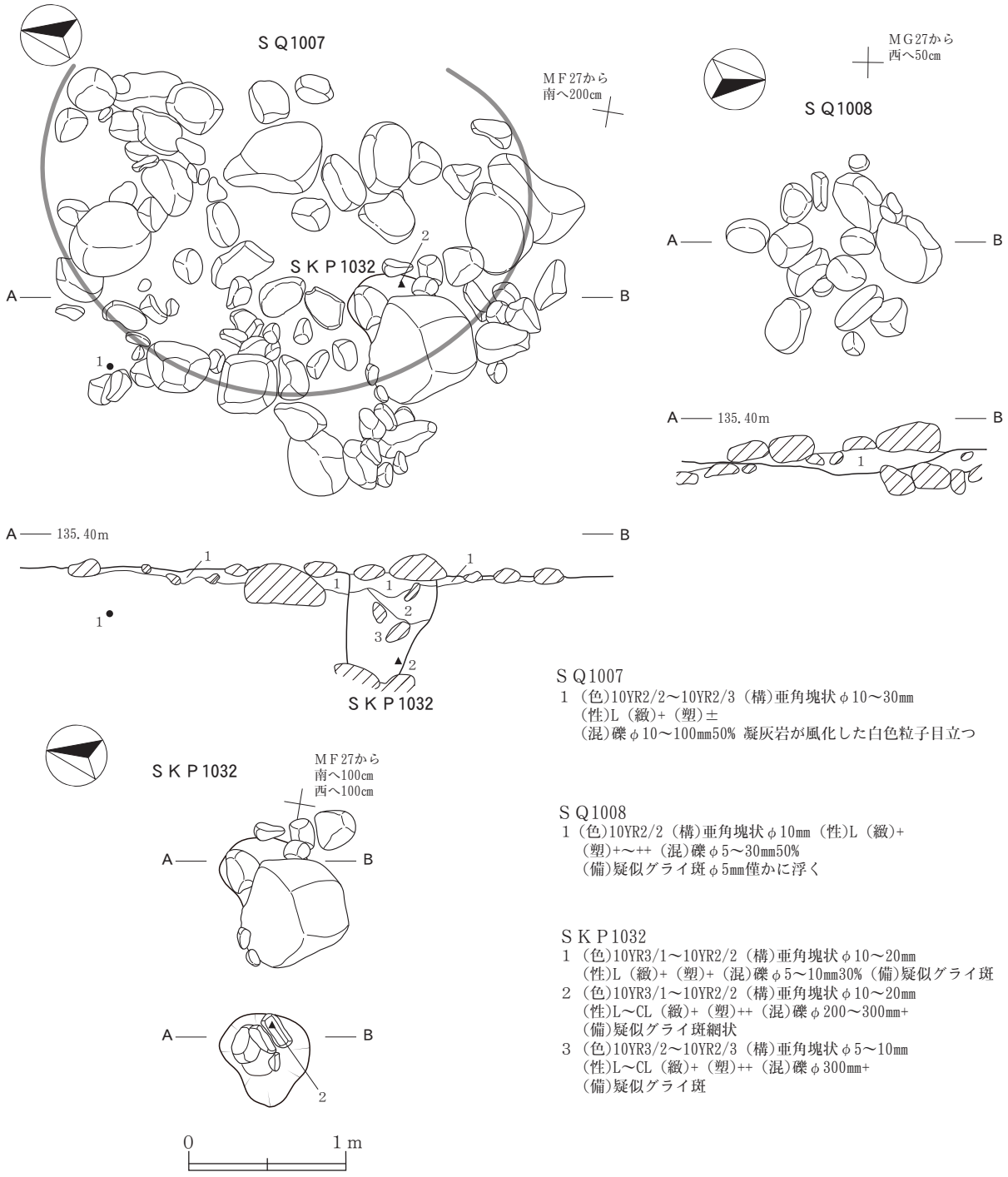
0　1m

第44図　ＳＱ1006配石遺構



第45図　ＳＱ1006配石遺構レリーフ図

第46図　ＳＱ1006配石遺構出土土器

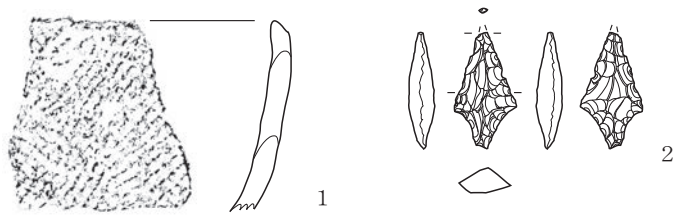


ＳＱ1007
1（色)10YR2/2～10YR2/3（構)亜角塊状φ10～30㎜
（性)L（緻)+（塑)±
（混)礫φ10～100㎜50% 凝灰岩が風化した白色粒子目立つ

ＳＱ1008
1（色)10YR2/2（構)亜角塊状φ10㎜（性)L（緻)+
（塑)+～++（混)礫φ5～30㎜50%
（備)疑似グライ斑φ5㎜僅かに浮く

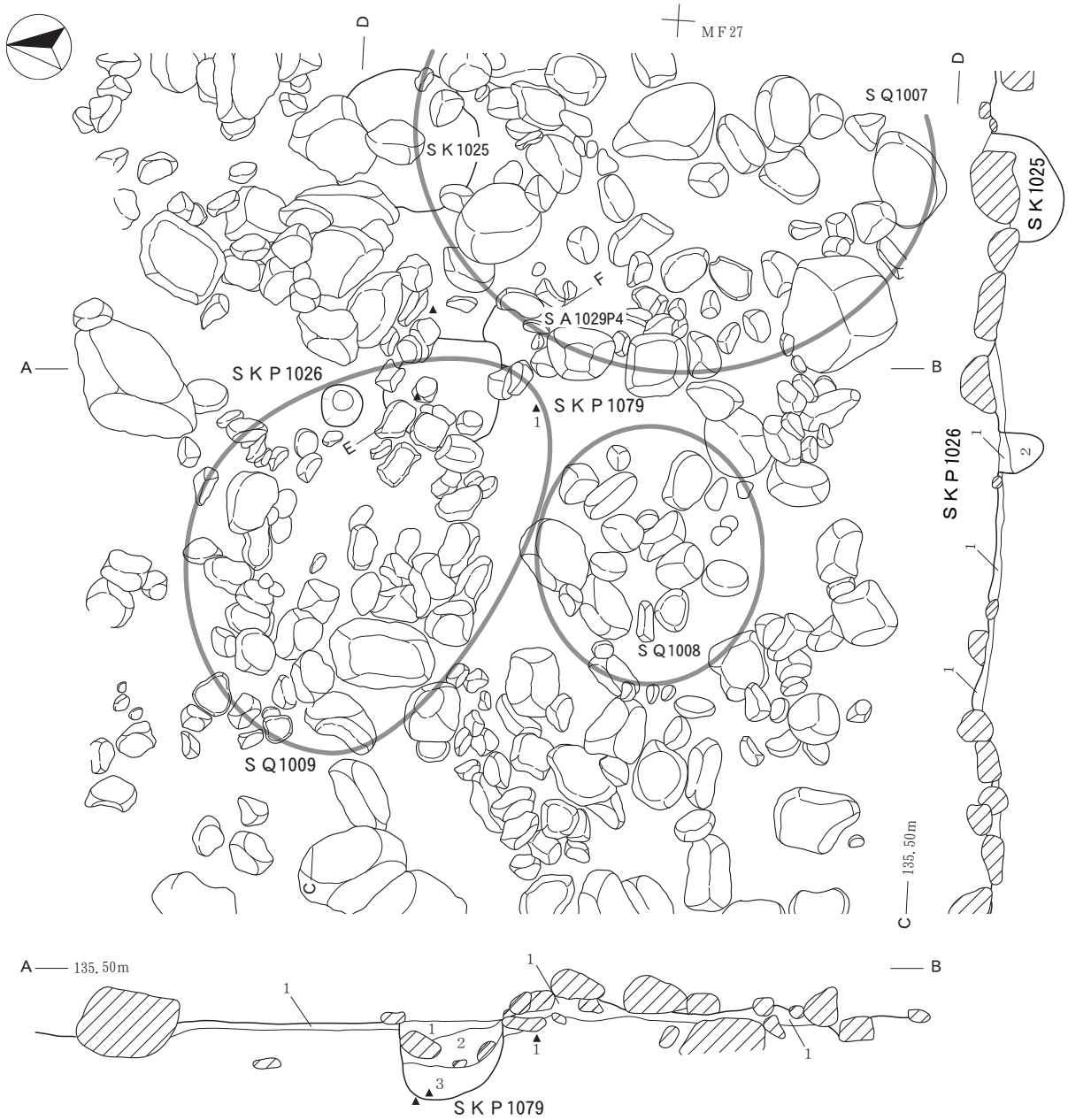
ＳＫＰ1032
1（色)10YR3/1～10YR2/2（構)亜角塊状φ10～20㎜
（性)L（緻)+（塑)+（混)礫φ5～10㎜30%（備)疑似グライ斑
2（色)10YR3/1～10YR2/2（構)亜角塊状φ10～20㎜
（性)L～CL（緻)+（塑)++（混)礫φ200～300㎜+
（備)疑似グライ斑網状
3（色)10YR3/2～10YR2/3（構)亜角塊状φ5～10㎜
（性)L～CL（緻)+（塑)++（混)礫φ300㎜+
（備)疑似グライ斑

第47図　ＳＱ1007・1008配石遺構・ＳＫＰ1032柱穴



1：晩期土器（ＳＱ1007）
2：石鏃（ＳＫＰ1032）

第48図　ＳＱ1007配石遺構・ＳＫＰ1032柱穴出土土器・石器



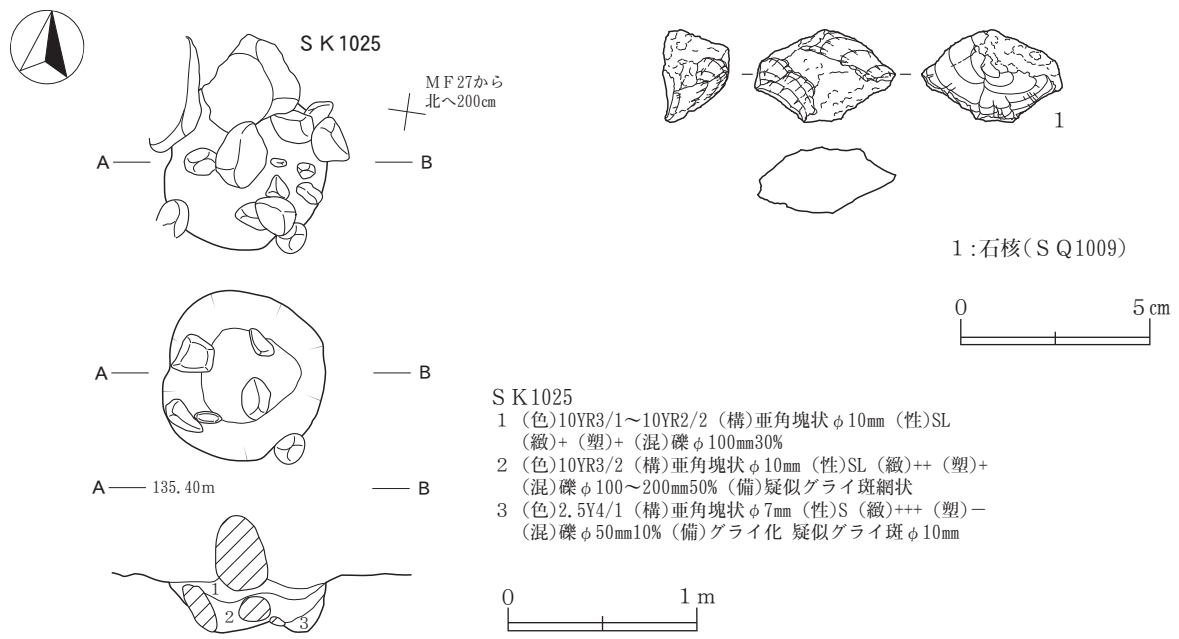
SQ1009
1 (色)10YR3/1～10YR2/1 (構)亜角塊状φ5～10mm (性)CL (緻)++ (塑)++
(混)礫φ50～100mm30% (備)Ⅸ層が風化したもの 遺構の構築面

SKP1026
1 (色)10YR3/2～10YR2/3 (構)亜角塊状φ10～20mm (性)SL (緻)+
(塑)－ (混)礫φ10～15mm++
2 (色)10YR3/1～10YR3/2 (構)亜角塊状φ7～10mm (性)CL (緻)+
(塑)+ (混)礫φ10～15mm±

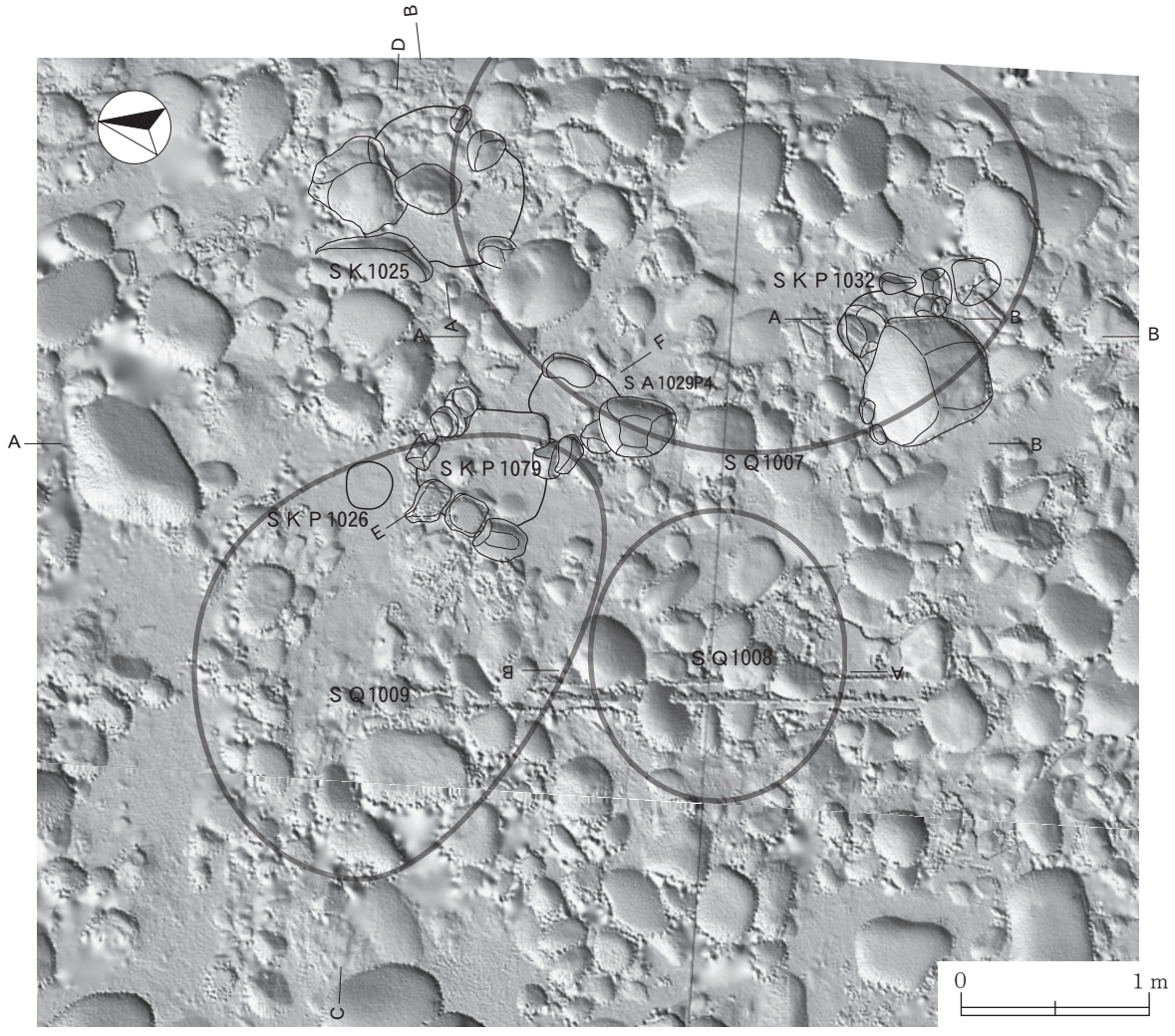
SKP1079
1 (色)10YR3/1～10YR2/2 (構)亜角塊状φ7～10mm (性)SL (緻)+ (塑)+
(混)小礫φ10～20mm7% 凝灰岩が風化した白色粒が非常に目立つ
2 (色)10YR3/2～10YR2/2 (構)亜角塊状φ7～10mm (性)SL (緻)++
(塑)+ (備)疑似グライ斑網状に浮く
3 (色)5Y3/1 (構)亜角塊状φ5～10mm (性)SL (緻)+ (塑)++ (備)グライ化

0　1m

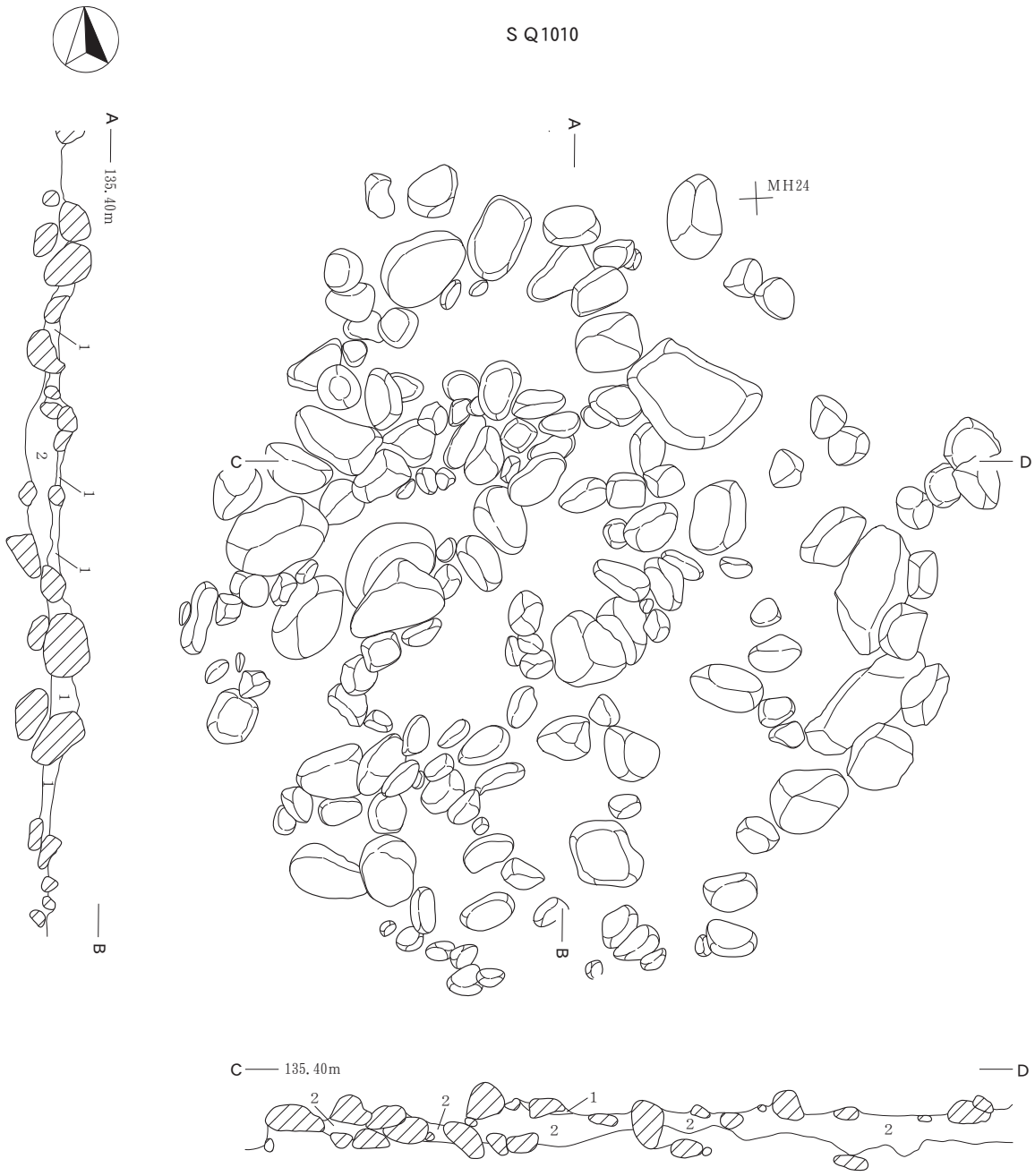
第49図　ＳＱ1009配石遺構・ＳＫＰ1026・1079柱穴



第50図　ＳＫ1025土坑、ＳＱ1009配石遺構出土石器



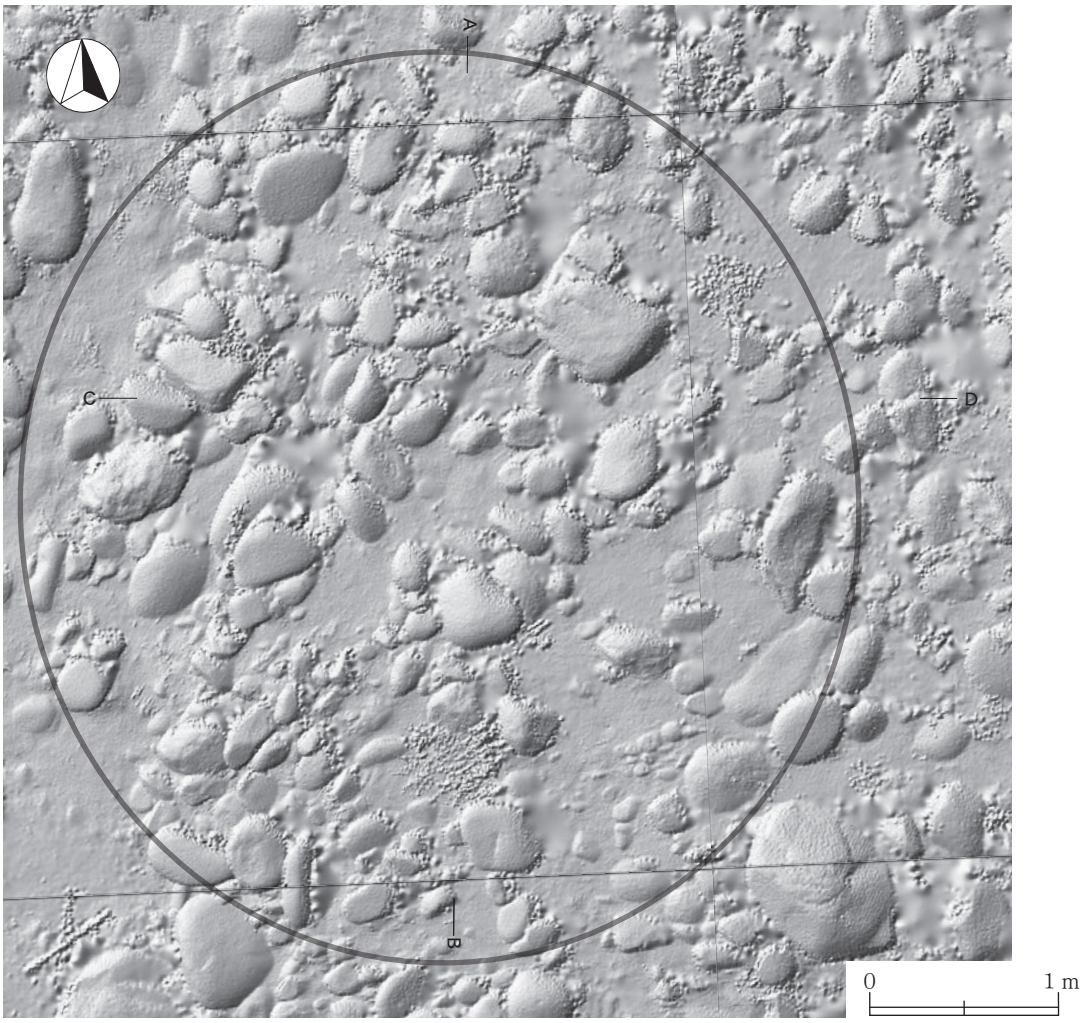
第51図　ＳＱ1007・1008・1009配石遺構・ＳＫ1025土坑・ＳＫＰ1026・1032・1079柱穴レリーフ図



ＳＱ1010
1 （色）10YR2/2 （構）亜角塊状～僅かに団粒φ5㎜ （性）L(S+) （緻）+ （塑）±～－ （混）礫φ10～500㎜++ 炭化物φ3～5㎜1%
2 （色）10YR3/1～2.5Y3/1 僅かに10YR3/3～10YR3/4の斑文あり （構）亜角塊状φ7㎜ （性）SL （緻）+～++ （塑）－
（混）礫φ10～500㎜++ 炭化物φ3～5㎜1% （備）グライ化 褐鉄鉱φ0.5～1㎜浮く

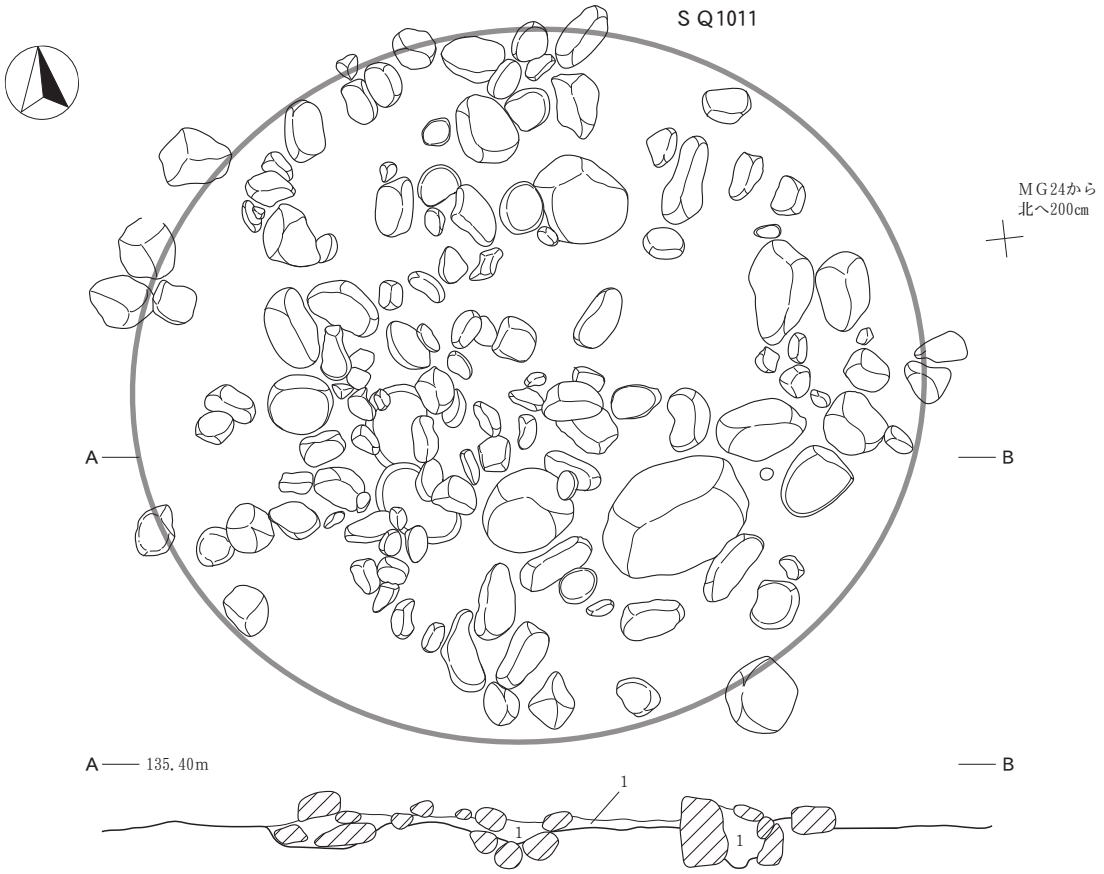
0　1m

第52図　ＳＱ1010配石遺構

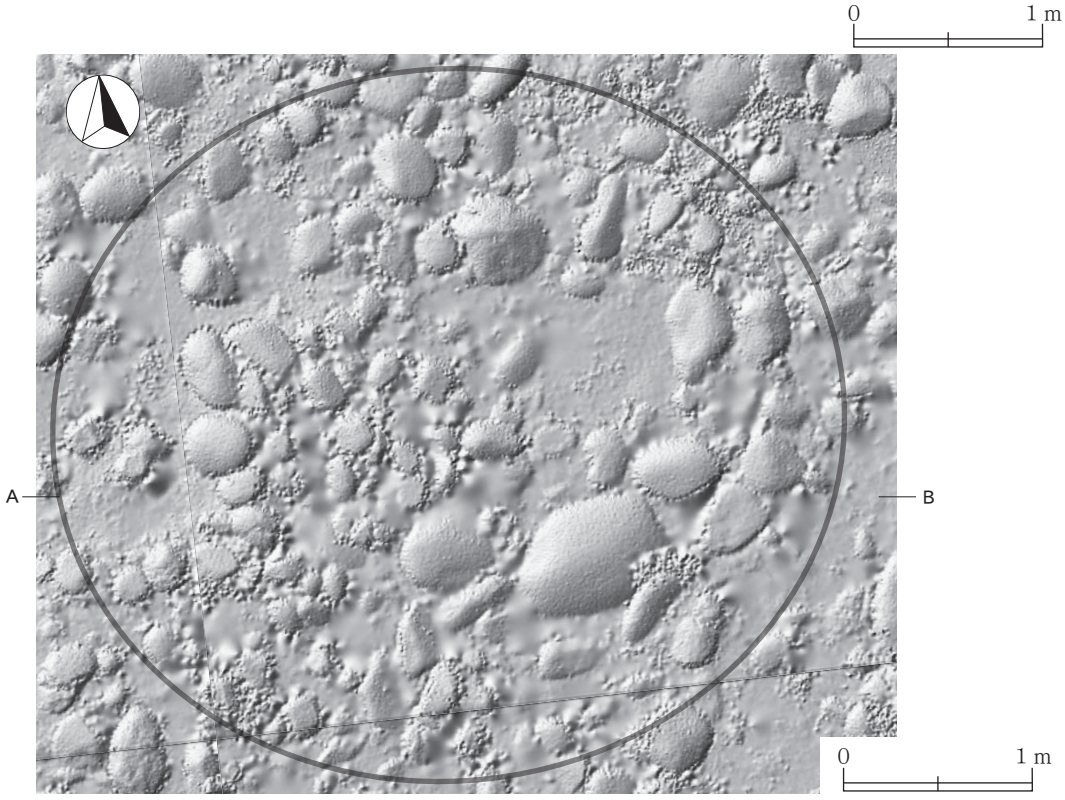


第53図　ＳＱ1010配石遺構レリーフ図

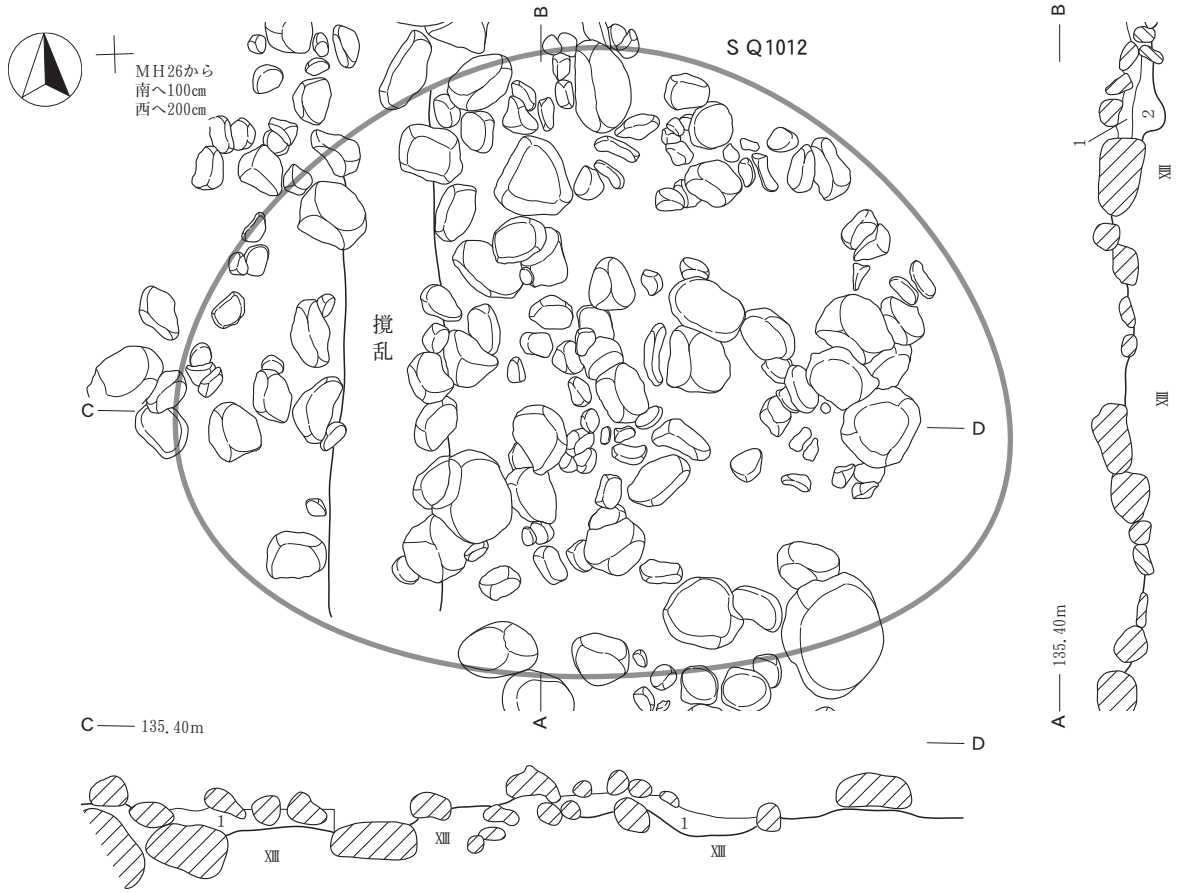
第54図　ＳＱ1010配石遺構出土土器



ＳＱ1011
1 （色）10YR3/1～2.5Y3/1（構）亜角塊状φ7㎜（性）SL～L（緻）+（塑）±（混）礫φ10～300㎜50% 凝灰岩の風化した白色粒子目立つ
（備）疑似グライ斑浮く 褐鉄鉱の結核φ5㎜+



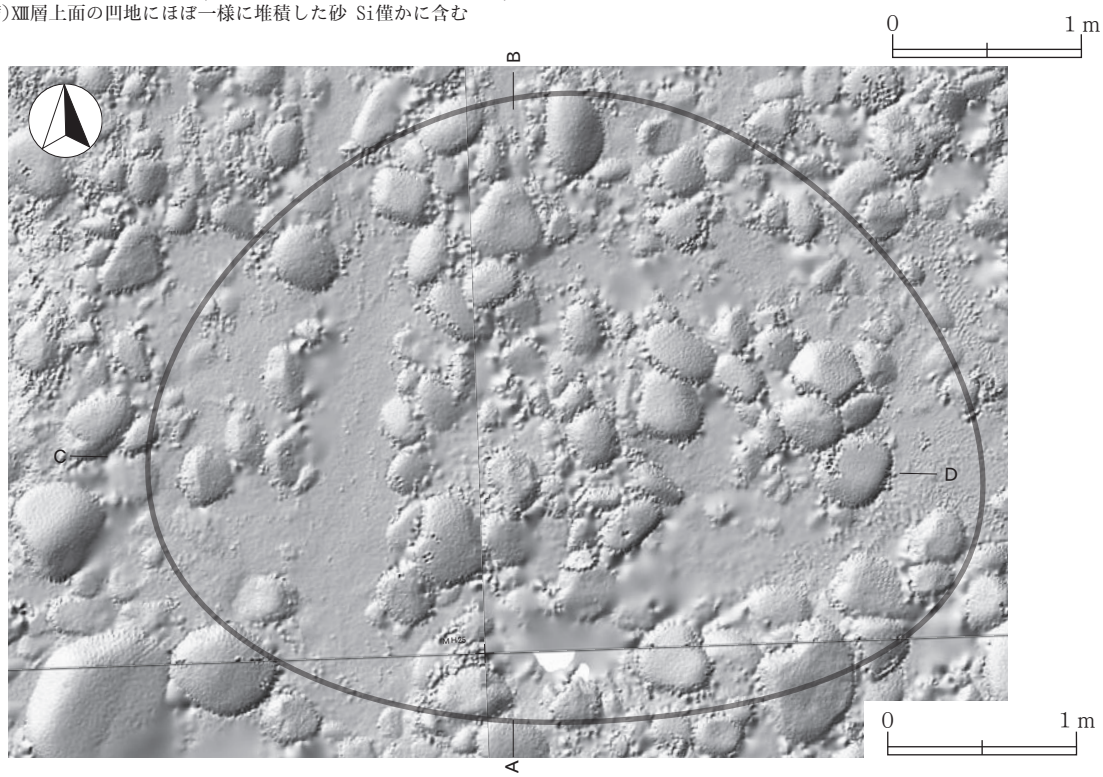
第55図　ＳＱ1011配石遺構、レリーフ図



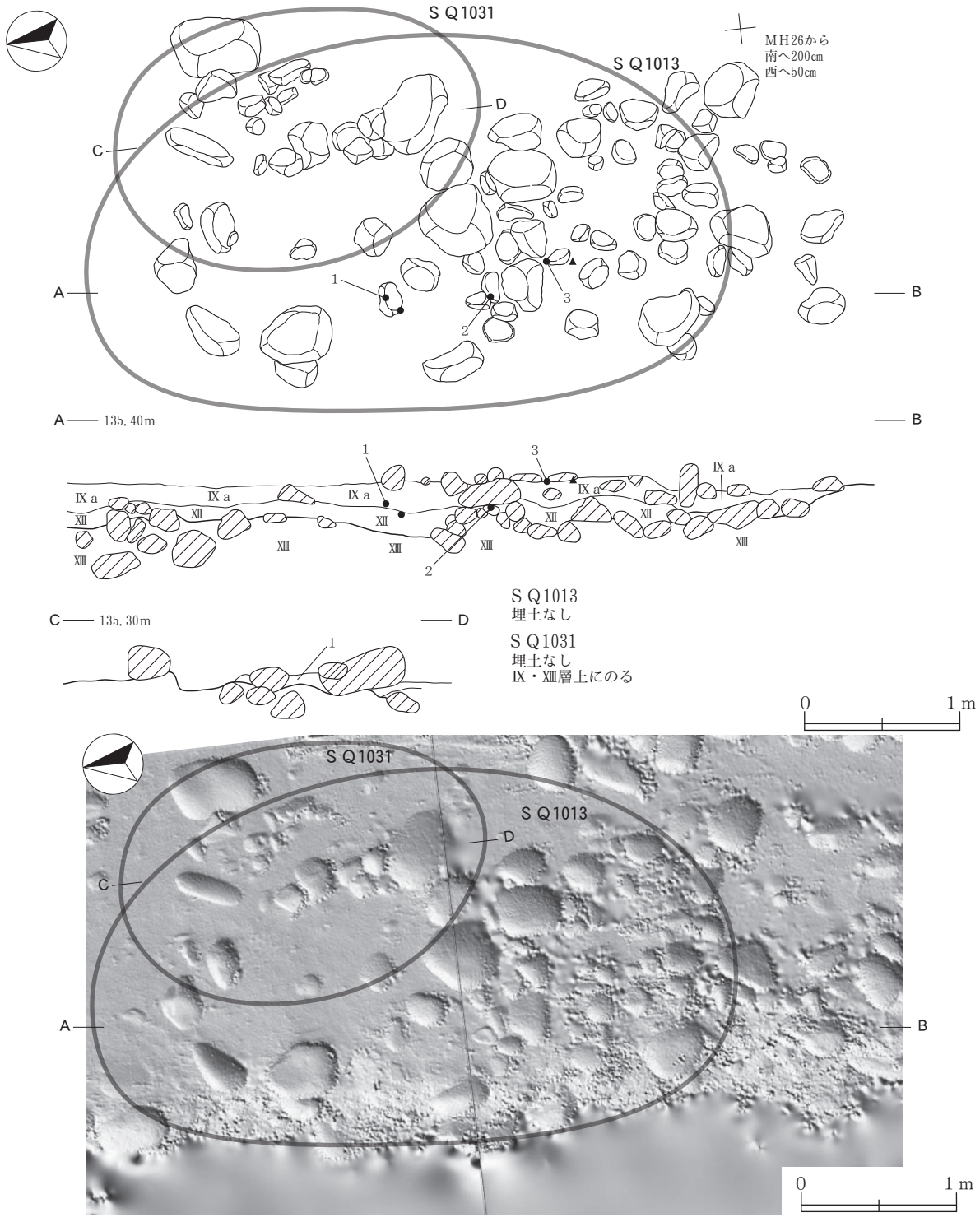
S Q1012

1 (色)10YR3/1～2.5Y3/1 (構)亜角塊状 φ7mm (性)SL (緻)+ (塑)± (混)礫 φ10～300mm50% 凝灰岩が風化した白色粒子目立つ
(備)疑似グライ斑浮く 褐鉄鉱の結核 φ5mm+

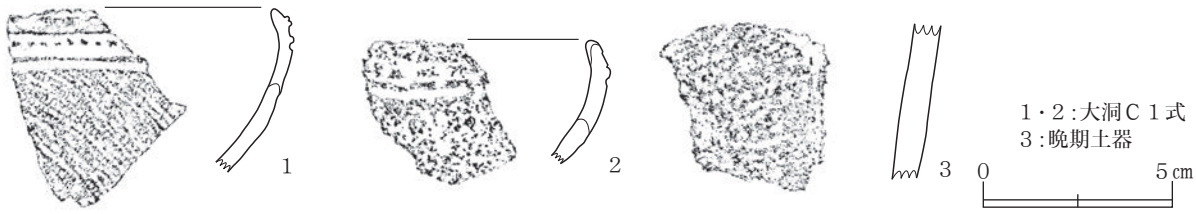
2 (色)2.5Y3/1 (構)亜角塊状 φ7mm (性)S (緻)+ (塑)- (混)円礫 φ100～300mm1%
(備)Ⅻ層上面の凹地にほぼ一様に堆積した砂 Si僅かに含む



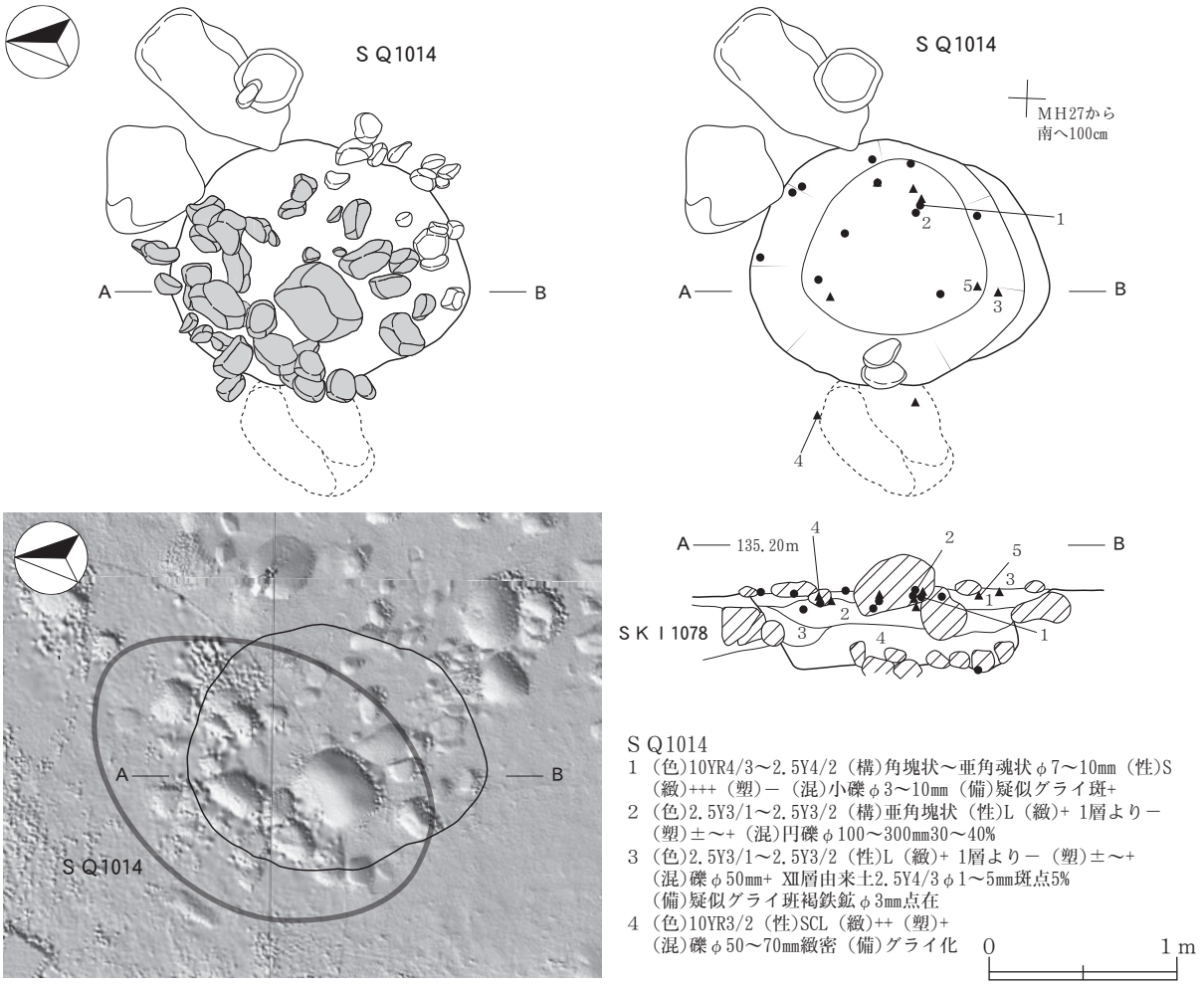
第56図　S Q1012配石遺構、レリーフ図



第57図　ＳＱ1013・1031配石遺構、レリーフ図

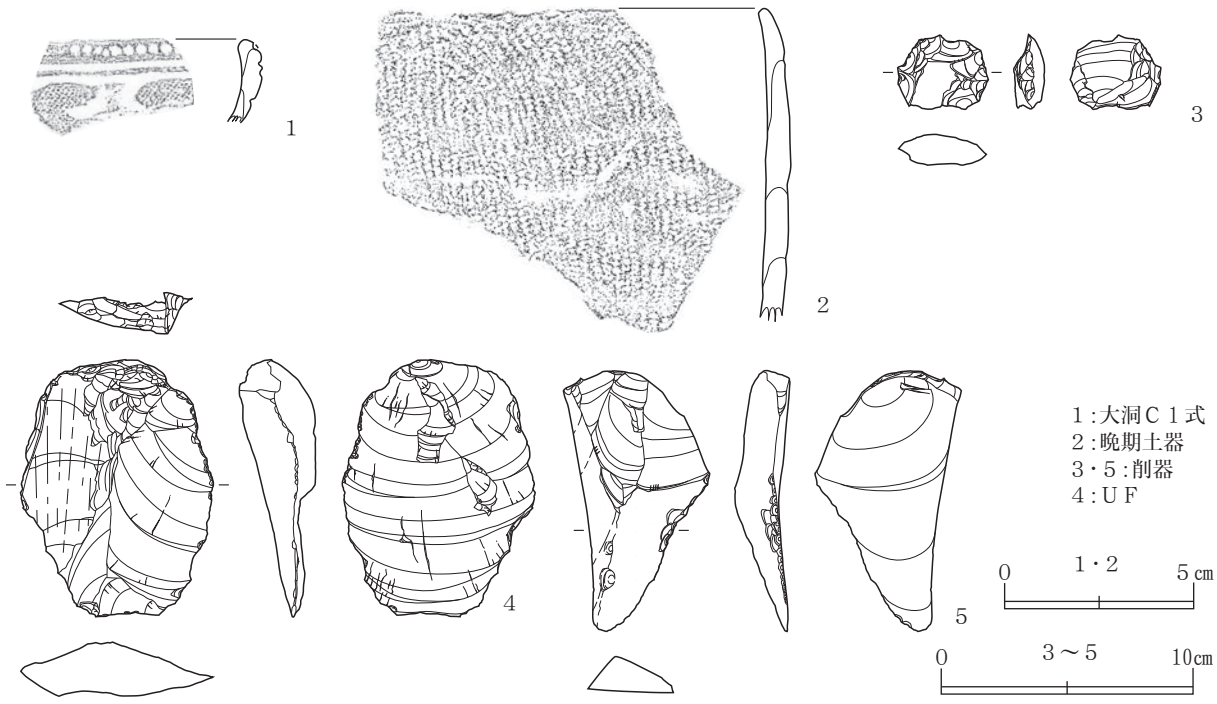


第58図　ＳＱ1013配石遺構出土土器

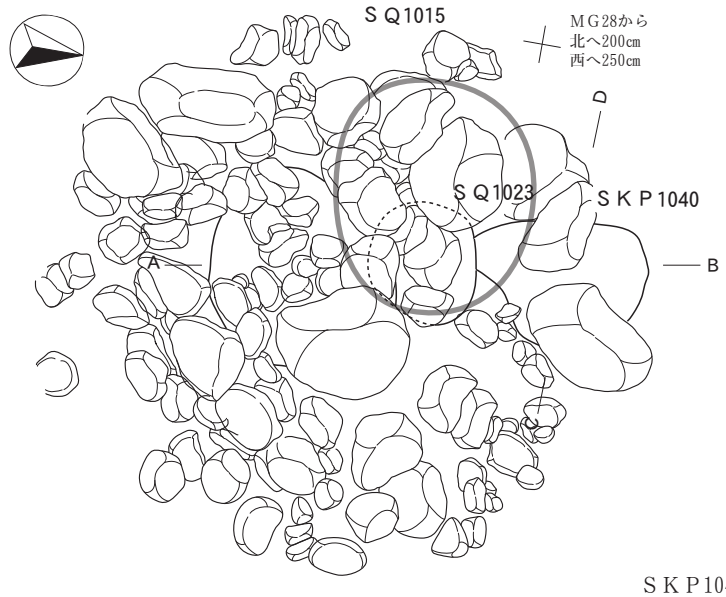


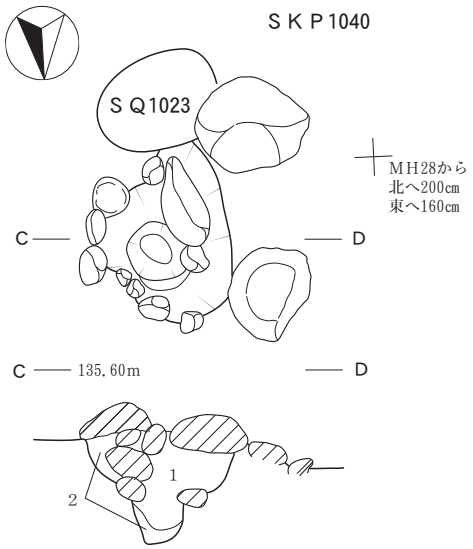
ＳＱ1014
1（色)10YR4/3～2.5Y4/2（構)角塊状～亜角塊状φ7～10㎜（性)S
（緻)+++（塑)－（混)小礫φ3～10㎜（備)疑似グライ斑+
2（色)2.5Y3/1～2.5Y3/2（構)亜角塊状（性)L（緻)+ 1層より－
（塑)±～+（混)円礫φ100～300㎜30～40%
3（色)2.5Y3/1～2.5Y3/2（性)L（緻)+ 1層より－（塑)±～+
（混)礫φ50㎜+ Ⅻ層由来土2.5Y4/3φ1～5㎜斑点5%
（備)疑似グライ斑褐鉄鉱φ3㎜点在
4（色)10YR3/2（性)SCL（緻)++（塑)+
（混)礫φ50～70㎜緻密（備)グライ化

第59図　ＳＱ1014配石遺構、レリーフ図

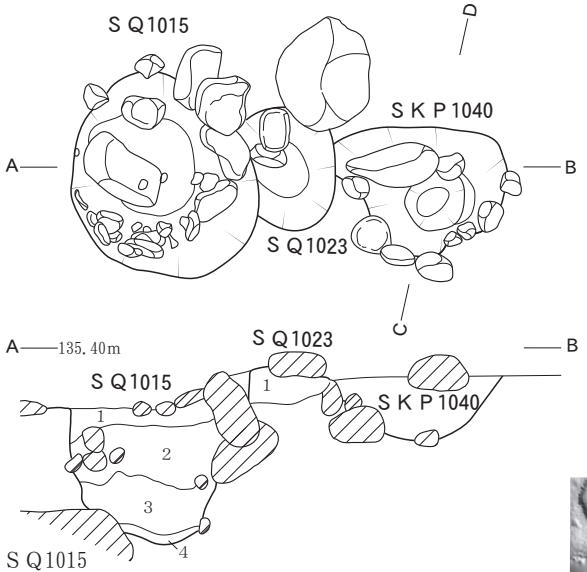


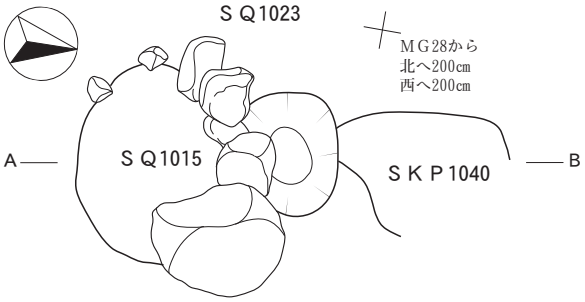
第60図　ＳＱ1014配石遺構出土土器・石器





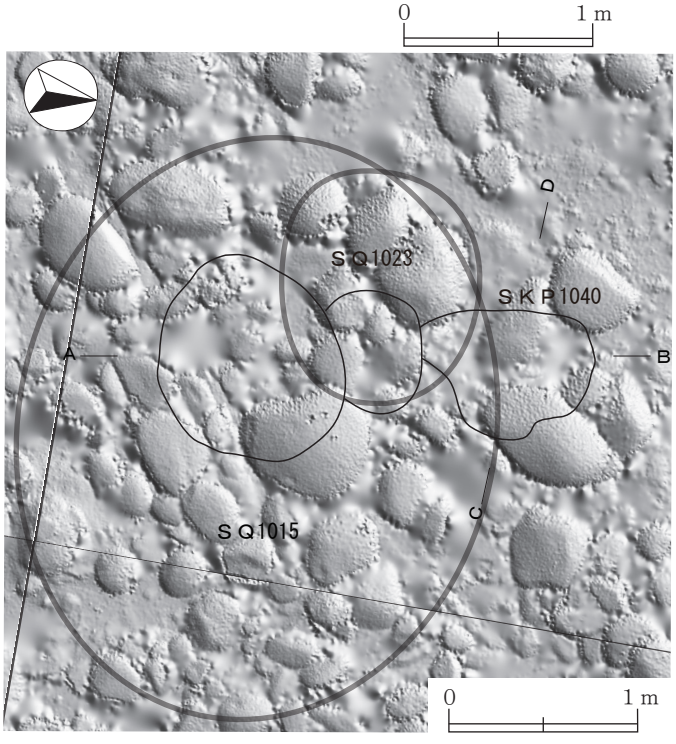
ＳＫＰ1040
1 （色）2.5YR2/1 （性）CL （緻）++ （塑）++
2 （色）2.5Y4/3～10YR4/3 （構）角塊状～亜角塊状 （性）LiC （緻）+
（塑）+++ （混）礫φ10～30mm10% （備）グライ化 褐鉄鉱φ5%点在



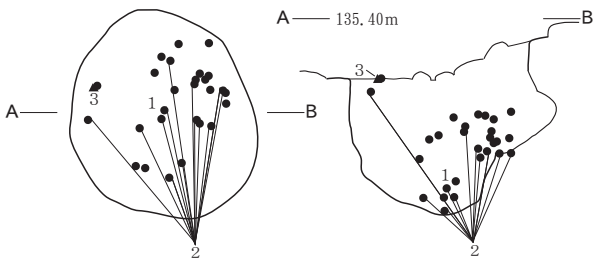


ＳＱ1015
1 （色）2.5Y2/1 （構）亜角塊状φ10mm
（性）L～CL （緻）+～++ （塑）+
2 （色）2.5Y2/1 （構）亜角塊状φ7mm （性）L～SiL （緻）+ （塑）+
（混）礫φ10～50mm1～3% 凝灰岩の風化した白色粒子
（備）腐殖を含みⅪ層を母材とした土壌
疑似グライ斑点状φ5mm 凝灰岩の風化した白色粒+
3 （色）10YR2/1 （構）亜角塊状φ7mm （性）CL （緻）+ 1・2層より軟
（塑）+～++ （混）礫φ10～50mm1% （備）グライ化 人為堆積
4 （色）N2/1～10YR1.7/1 （構）亜角塊状φ5～7mm
（性）SCL～LiC （緻）+ 1～3層より軟 （塑）++～+++
（混）礫φ5～7mm1～3% （備）グライ化 自然堆積

ＳＱ1023
1 （色）2.5Y2/1 （構）亜角塊状φ7mm

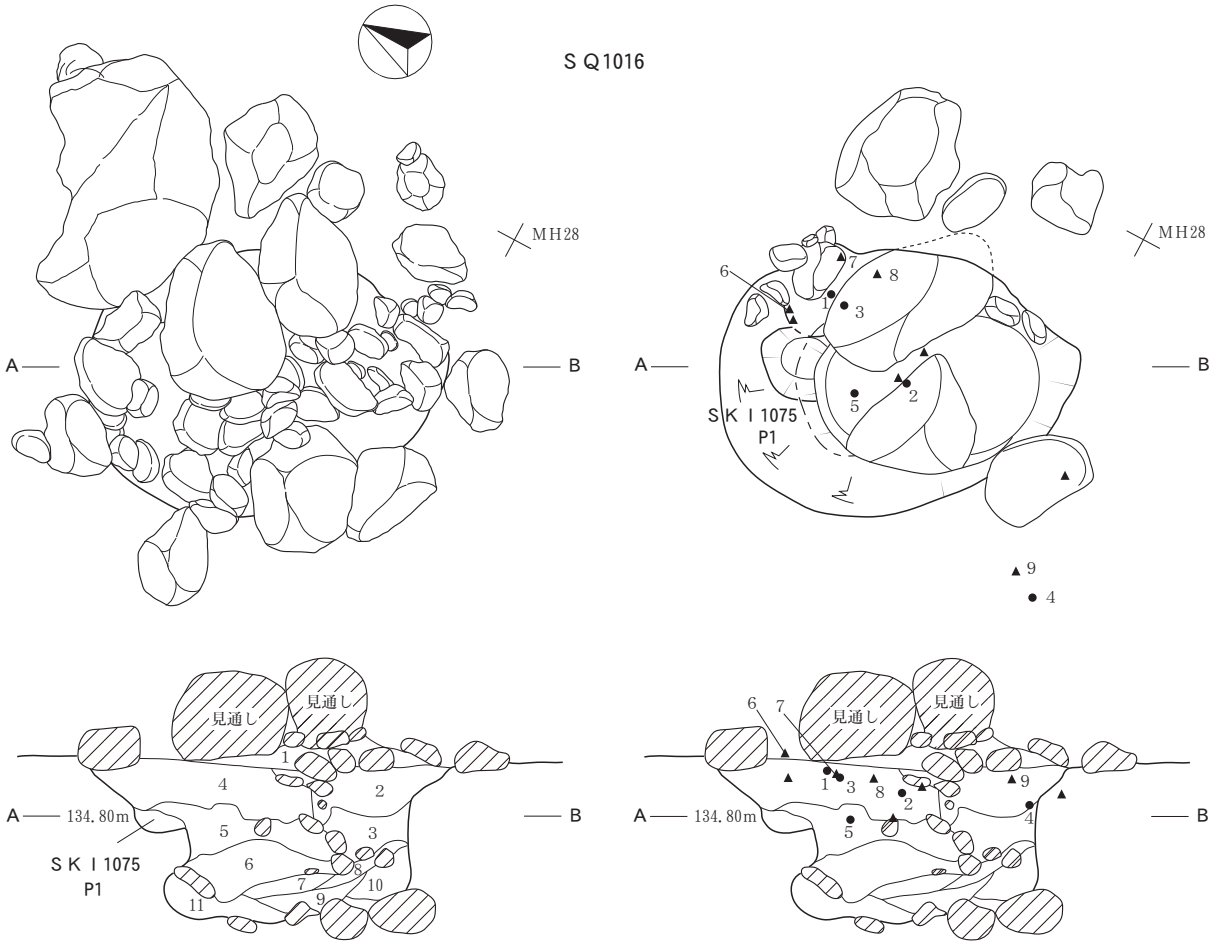


ＳＱ1015遺物分布



第61図　ＳＱ1015・1023配石遺構・ＳＫＰ1040柱穴、レリーフ図

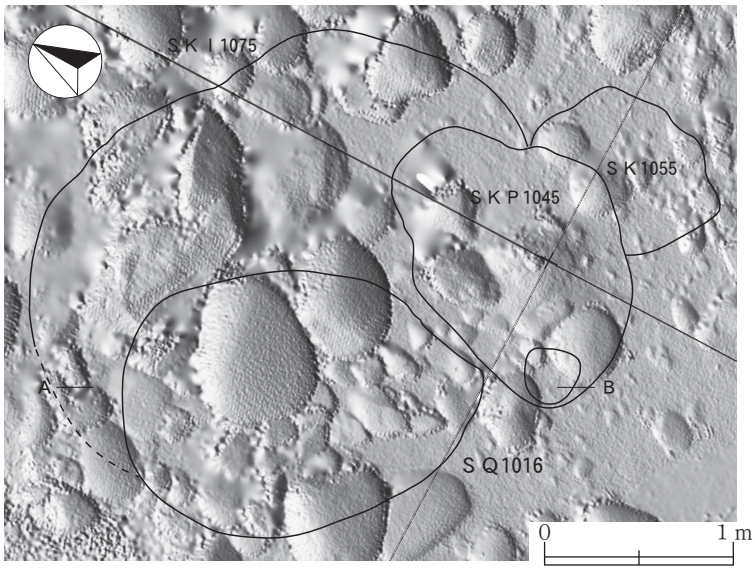
第62図　ＳＱ1015配石遺構出土土器・石器



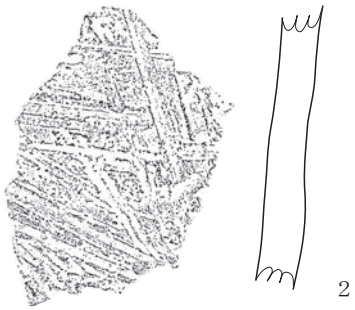
ＳＱ1016
1 (色)10YR2/1～2.5Y2/1 (構)亜角塊状φ5mm (性)SL (緻)+～± (塑)±～+ (混)礫φ10～700mm50%　凝灰岩の風化した白色粒子+
2 (色)10YR3/1　2.5Y2/1～2.5Y3/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)L (緻)+ (塑)+ 1層より+ (混)礫φ100～200mm20% (備)人為堆積
3 (色)2.5Y2/1～2.5Y3/1 10YR2/3 (構)亜角塊状φ7mm (性)L(Si+) (緻)+ 2・4層より+ (塑)+ (混)礫φ100～200mm20%
(備)グライ化　疑似グライ斑φ5mm点在～網状
4 (色)10YR3/1　2.5Y2/1～2.5Y3/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)L (緻)+ (塑)+ 1層より+ (混)凝灰岩の風化した白色粒子目立つ
5 (色)2.5Y2/1～2.5Y3/1 10YR2/3 (構)亜角塊状φ7mm (性)L(Si+) (緻)+ 2・4層より+ (塑)+ (混)礫
(備)グライ化　疑似グライ斑φ5mm点状～網状
6 (色)10YR3/1～10YR2/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)SiL (緻)+ 4・5層より軟 (塑)+ 3層より+
7 (色)10YR2/1～10YR1.7/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)SiC (緻)+ 6層より軟 (塑)++～+++ (備)グライ化 人為埋没
8 (色)2.5Y3/1～2.5Y3/2 (構)亜角塊状φ7mm (性)S (緻)+ 7層より粗 (塑)－
9 (色)10YR2/1～10YR1.7/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)SiC (緻)+ 6層より軟 (塑)++～+++ (混)黒色粘土
10 (色)2.5Y3/1～2.5Y3/2 (構)亜角塊状φ7mm (性)S (緻)+ 7層より粗 (塑)－
11 (色)10YR3/1～10YR2/1 2.5Y3/1～2.5Y2/1 (構)亜角塊状φ7mm (性)SCL (緻)+ (塑)+
(混)黒味の強いブロックと黄色味の強いブロックφ30mm混在 (備)人為堆積

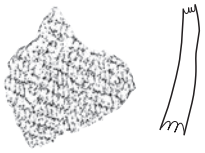
0 1m

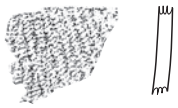
第63図　ＳＱ1016配石遺構

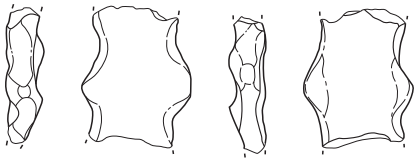


1

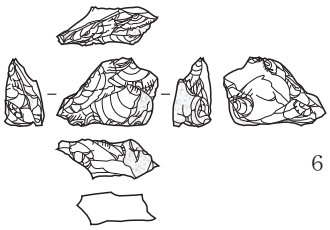

2

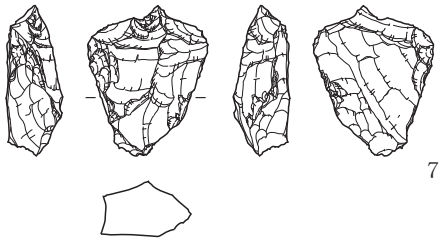

3

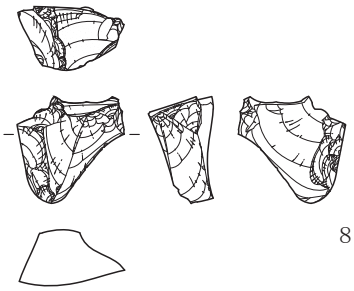

4

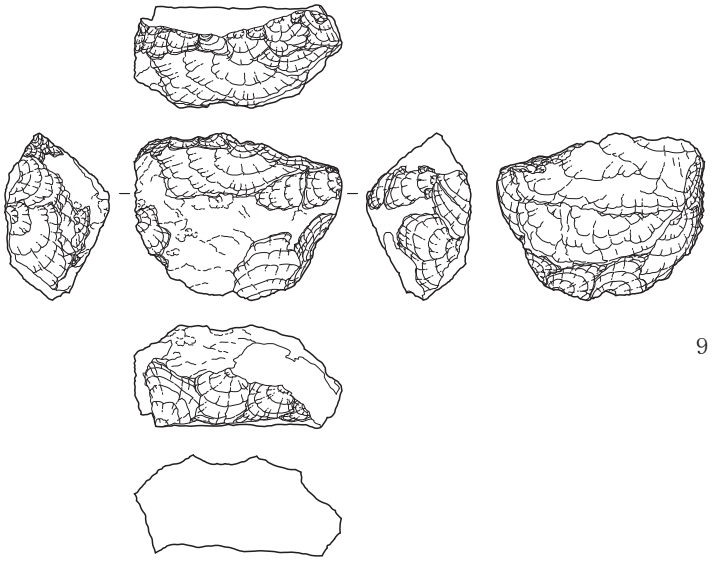

5

0　1～5　5㎝


6


7

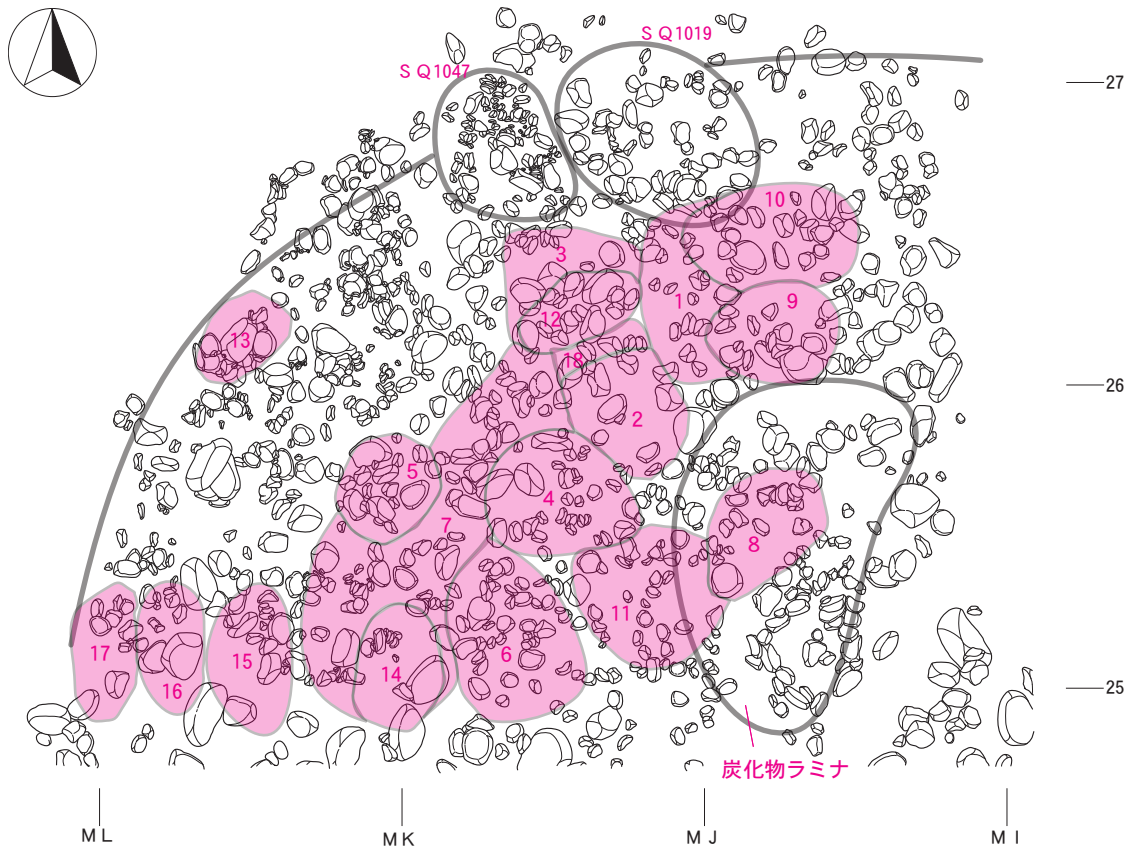

8


9

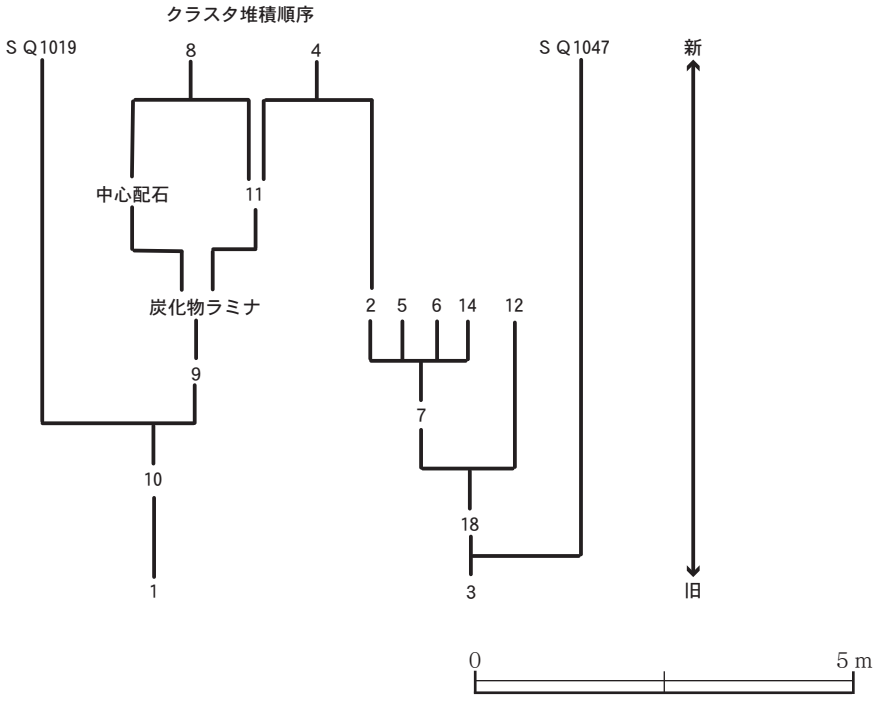
1～5：晩期土器
6：楔形石器
7～9：石核

0　6～9　10㎝

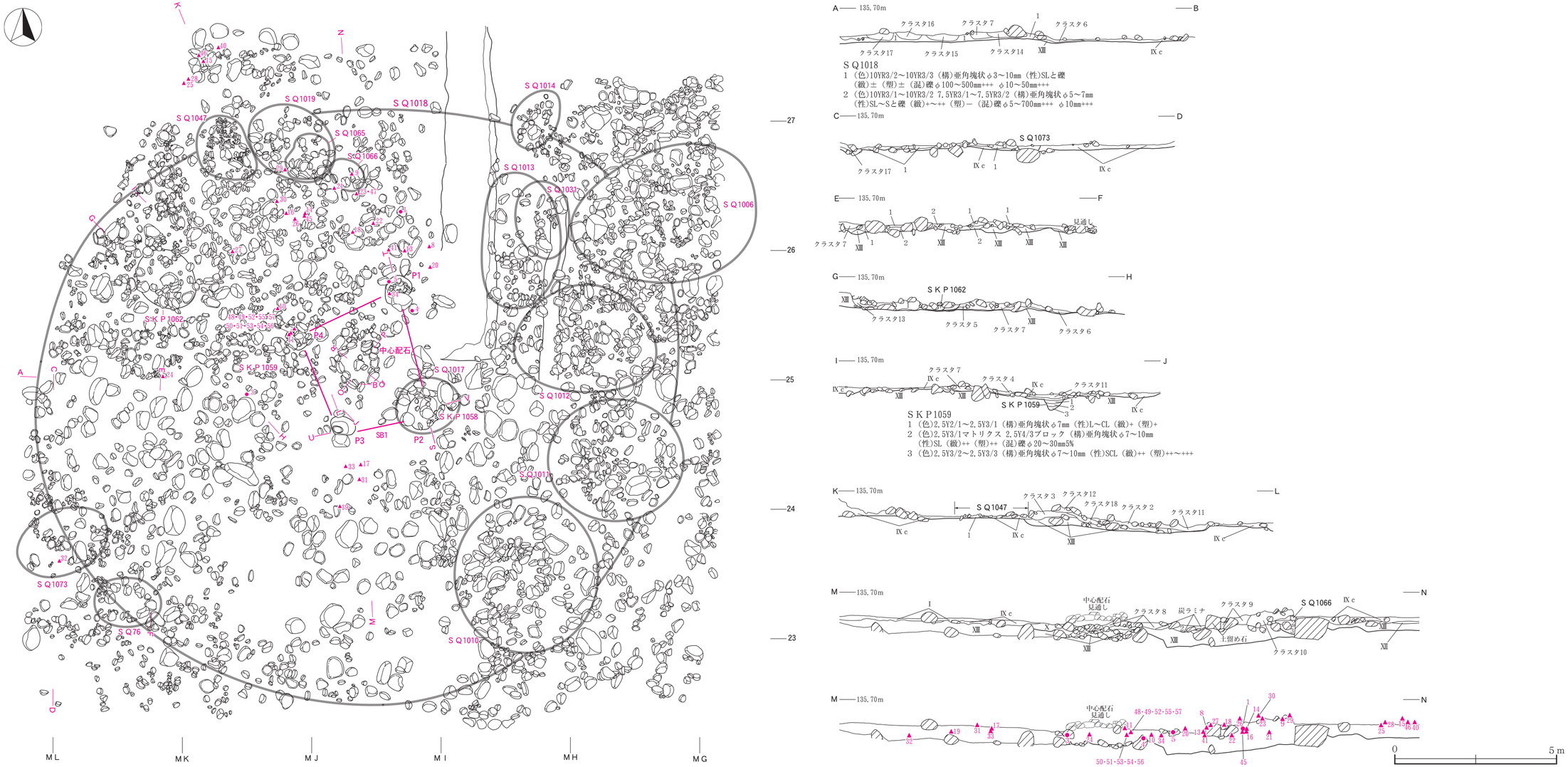
第64図　ＳＱ1016配石遺構レリーフ図、出土土器・石器



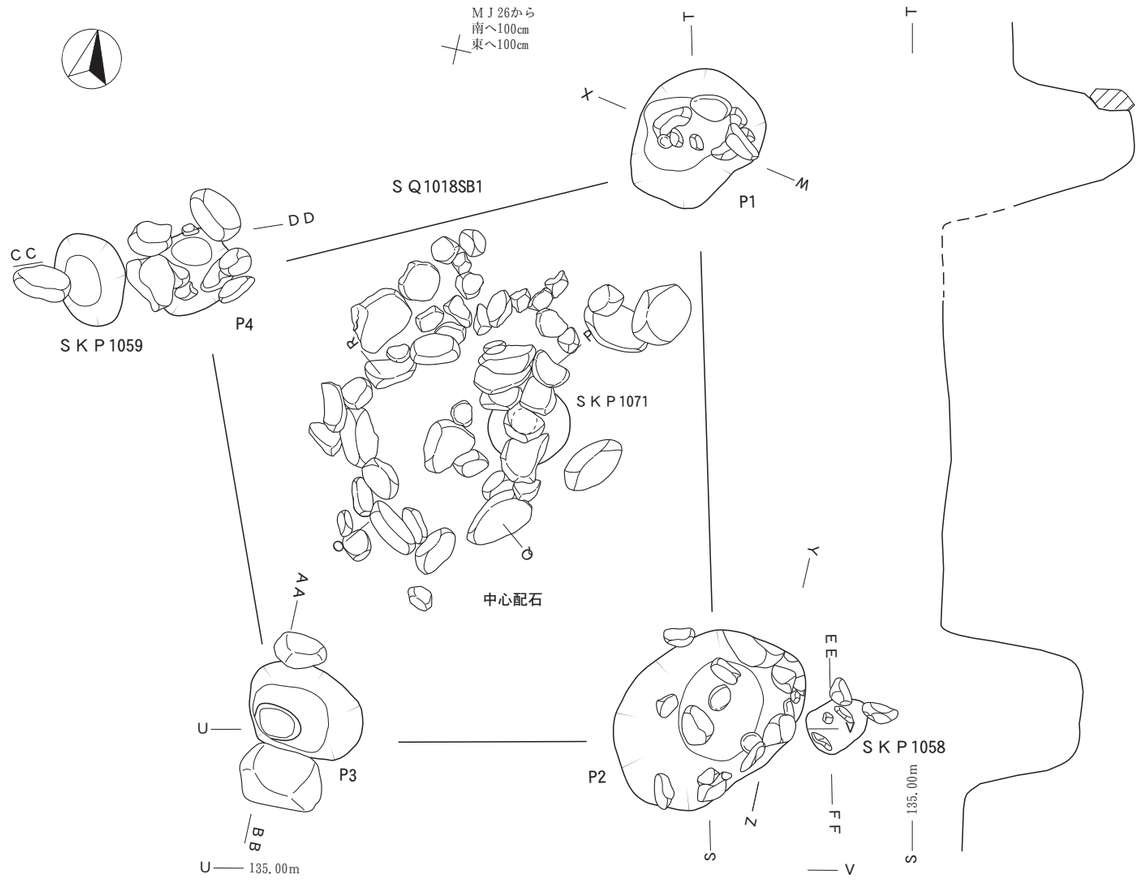
S Q1018礫堆積単位（クラスタ）分布図

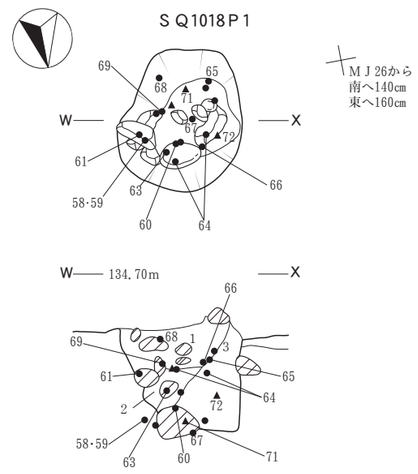


第65図　S Q1018配石遺構礫堆積順序

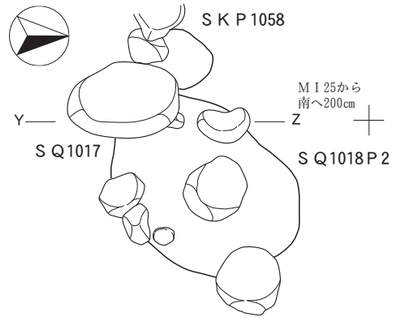


第66図　ＳＱ1018配石遺構

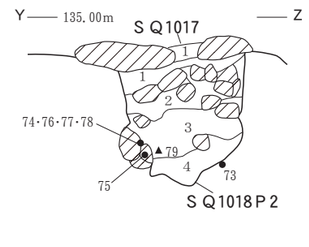




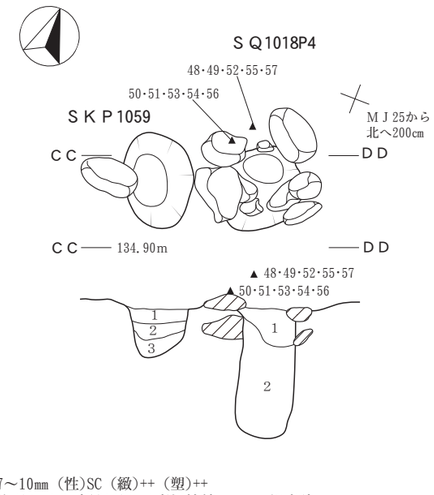
S Q1018P1
1 (色)5Y2/1 (構)亜角塊状φ7㎜ (性)SC (緻)+
(塑)++～+++ (混)礫φ10～200㎜20%
(備)疑似グライ斑φ5㎜5%点在 1·2層柱抜去
2 (色)7.5GY2/1 (構)亜角塊状φ10㎜ (性)SC(S+)
(緻)± 1層より軟 (塑)++～+++ (混)礫φ5～200㎜30%
(備)砂の粒径1層より大 グライ化 柱抜去
3 (色)5GY2/1～7.5GY2/1 (構)亜角塊状φ10㎜
(性)SC 2層よりC+
(緻)± 1·2層より軟 (塑)++～+++
(混)礫φ5～10㎜5～10% 1·2層より中形礫少
(備)グライ化 柱穴掘方埋土



S Q1017
1 (色)10YR3/1～10YR2/2 (構)亜角塊状φ7㎜
(性)L(S+) (緻)+ (塑)±
(混)礫φ10～300㎜50%
凝灰岩の風化した白色粒子
(備)炭化物φ5㎜のまばらな散布面上に構築

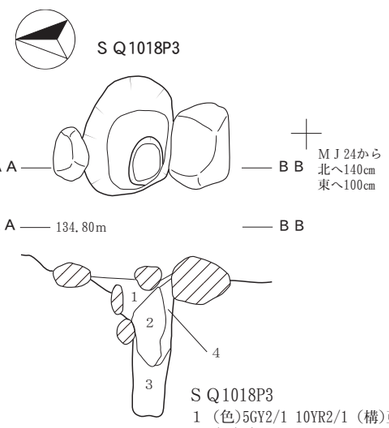


S Q1018P2
1 (色)10YR3/1～10YR2/2 (構)亜角塊状φ7㎜
(性)L(S+) (緻)+ (塑)±
(混)礫φ10～300㎜50%
凝灰岩の風化した白色粒子
(備)疑似グライ斑浮く
2 (色)10YR3/1～2.5Y3/1 (構)亜角塊状φ7㎜
(性)SL (緻)+ (塑)±
(混)礫φ10～100㎜20～30%
3 (色)N2/1青灰色帯びる (構)亜角塊状φ5㎜
(性)SC (緻)+ (塑)++
(混)砂φ1㎜+～++ 礫φ50～150㎜3%
(備)3層上部に疑似グライ化層と
グライ化層の境界 褐鉄鉱φ5～7㎜++
4 (色)10GY2/1～7.5GY2/1
(構)亜角塊状φ5～7㎜ (性)SCと礫
(緻)+ (塑)++
(混)砂φ1㎜大～++ 礫φ50～200㎜20%

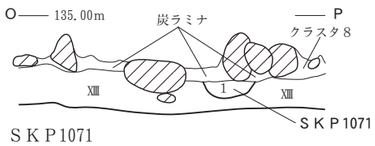


S Q1018P4
1 (色)10YR2/2 (構)亜角塊状～団粒状 (性)L
(緻)+ (塑)±～+ (混)礫φ100～200㎜+
2 (色)5Y2/1 (構)亜角塊状φ7㎜ (性)SC
(緻)+軟質 (塑)++～+++ (混)礫φ10～200㎜20%
(備)疑似グライ斑φ5㎜5%点在 1·2層柱抜去

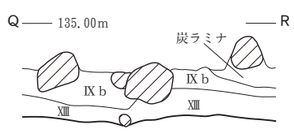
S K P 1059
1 (色)2.5Y2/1～2.5Y3/1 (構)亜角塊状φ7㎜
(性)L～CL (緻)+ (塑)+ (備)疑似グライ斑
2 (色)2.5Y3/1マトリクス 2.5Y4/3ブロック
(構)亜角塊状φ7～10㎜ (性)SL
(緻)++ (塑)++ (混)礫φ20～30㎜5%
3 (色)2.5Y3/2～2.5Y3/3 (構)亜角塊状φ7～10㎜
(性)SCL (緻)++ (塑)++～+++ (備)疑似グライ斑

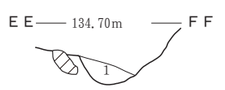


S Q1018P3
1 (色)5GY2/1 10YR2/1 (構)亜角塊状φ7～10㎜ (性)SC (緻)++ (塑)++
(混)礫φ3～5㎜とφ10～100㎜30% (備)グライ化 疑似グライ斑褐鉄鉱φ5㎜+ 柱痕跡
2 (色)5G1.7/1 (構)亜角塊状φ7㎜ (性)SC (緻)+ 1層より軟 (塑)++～+++
(混)礫φ3～5㎜3% φ10～100㎜1% Ⅻ層由来土φ20㎜1% (備)強グライ化 柱痕跡
3 (色)5G1.7/1 (構)亜角塊状φ7㎜ (性)SC (緻)+ 2層より軟 (塑)++～+++
(混)礫φ3～5㎜3% φ10～100㎜1% Ⅻ層由来土φ20㎜1% (備)強グライ化 柱痕跡
4 (色)5G1.7/1 10YR3/2 (構)亜角塊状φ7㎜ (性)SC (緻)++ 1層より－ (塑)++
(混)礫φ3～5㎜とφ10～50㎜20～30% 10YR3/2ブロックφ10～20㎜3% (備)掘方裏込



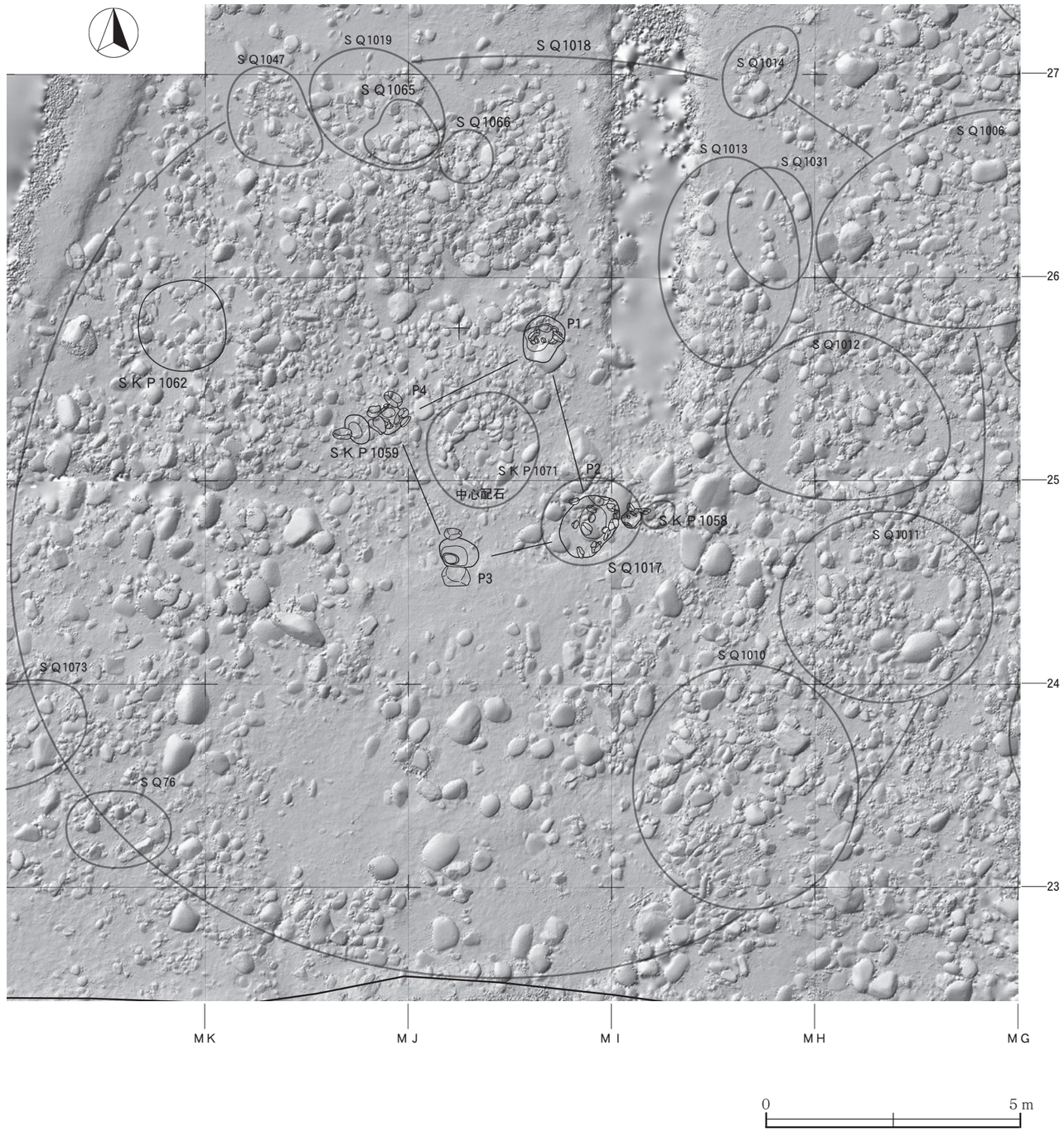
S K P 1071
1 (色)10YR2/2 (構)亜角塊状～団粒状 (性)L
(緻)+ (塑)±～+ (混)礫φ100～200㎜+



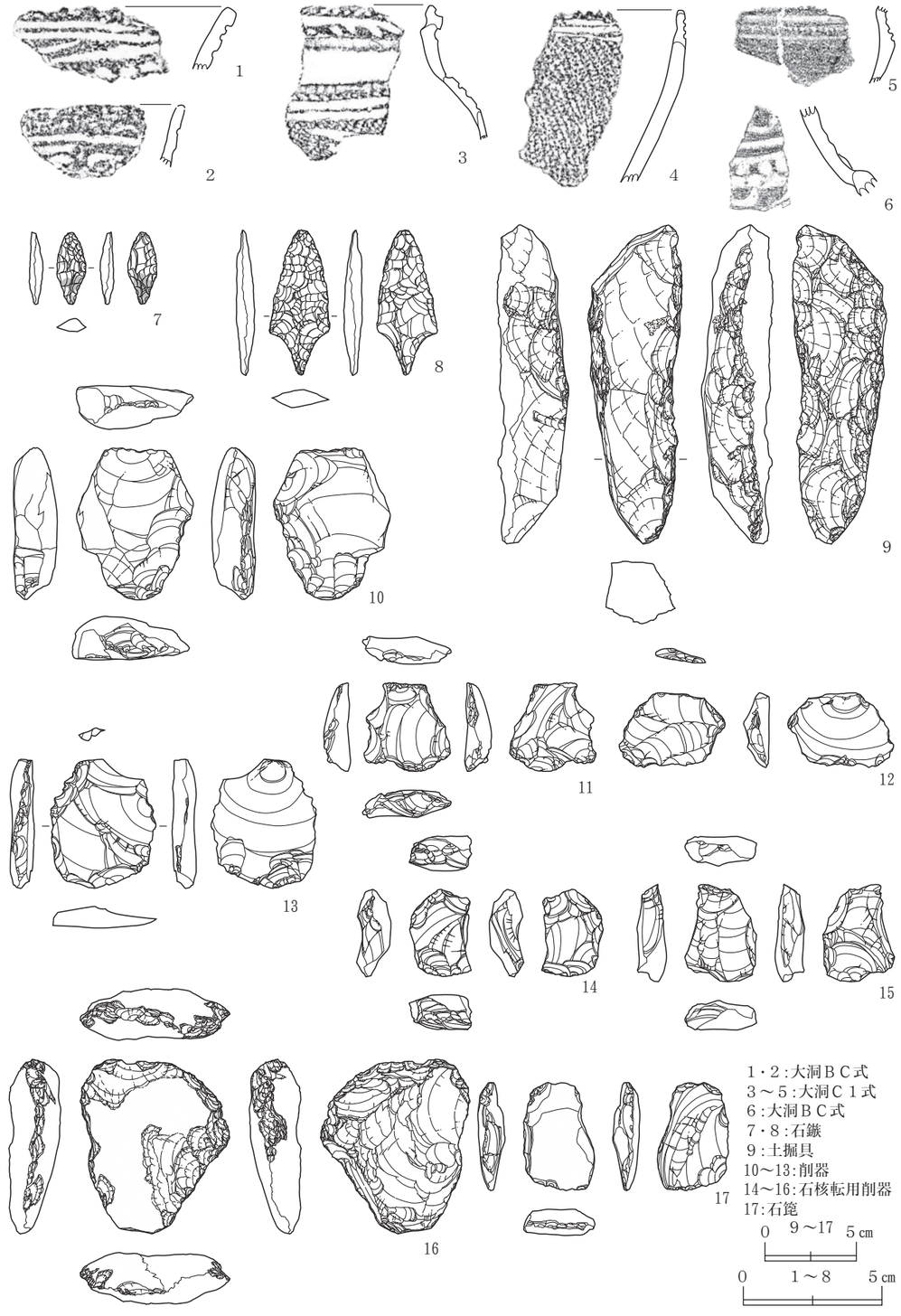


S K1058
1 (色)10YR3/1～10YR2/2
(構)亜角塊状φ7㎜
(性)L(S+) (緻)+ (塑)±
(混)礫φ10～300㎜50%
凝灰岩の風化した白色粒子
φ0.1㎜+炭化物φ5㎜
(備)炭化物散布面あり
疑似グライ斑褐鉄鉱点在

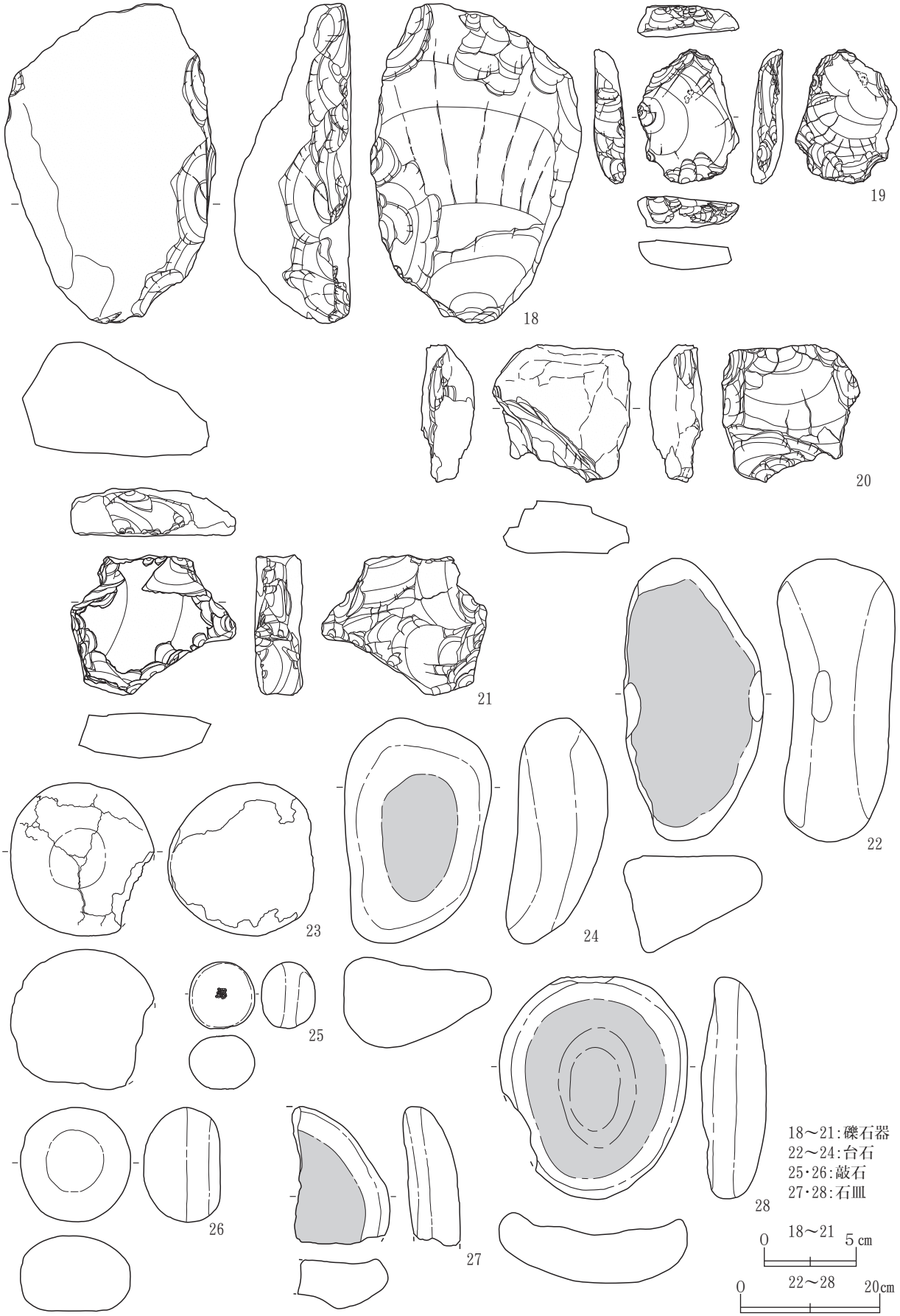
第67図　S Q1017・1018配石遺構SB1・S K P 1058・1059柱穴



第68図　ＳＱ1017・1018配石遺構・ＳＫＰ1058・1059柱穴レリーフ図



第69図　ＳＱ1018配石遺構出土土器・石器



第70図　ＳＱ1018配石遺構出土石器

第71図　ＳＱ1018配石遺構出土石器